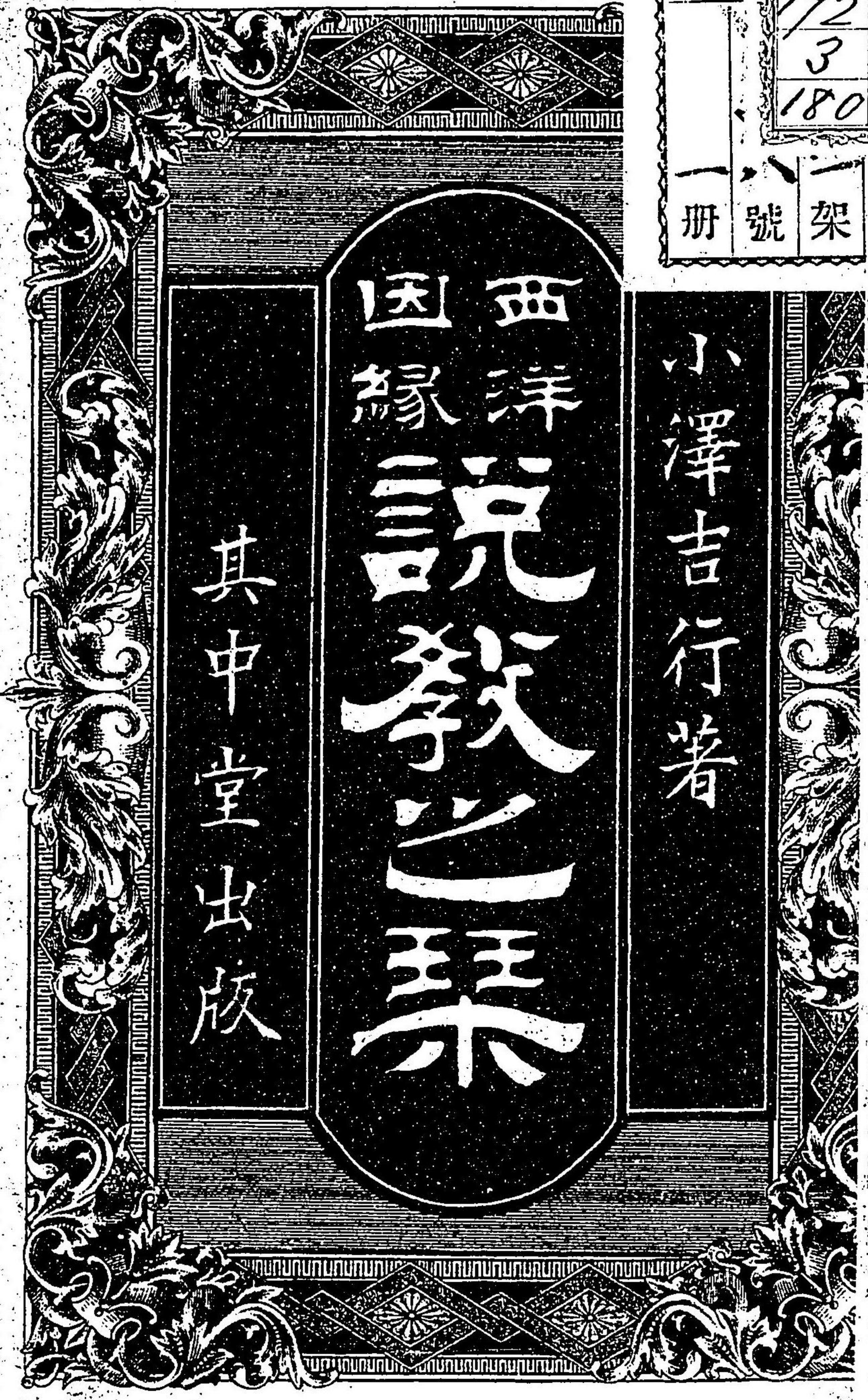


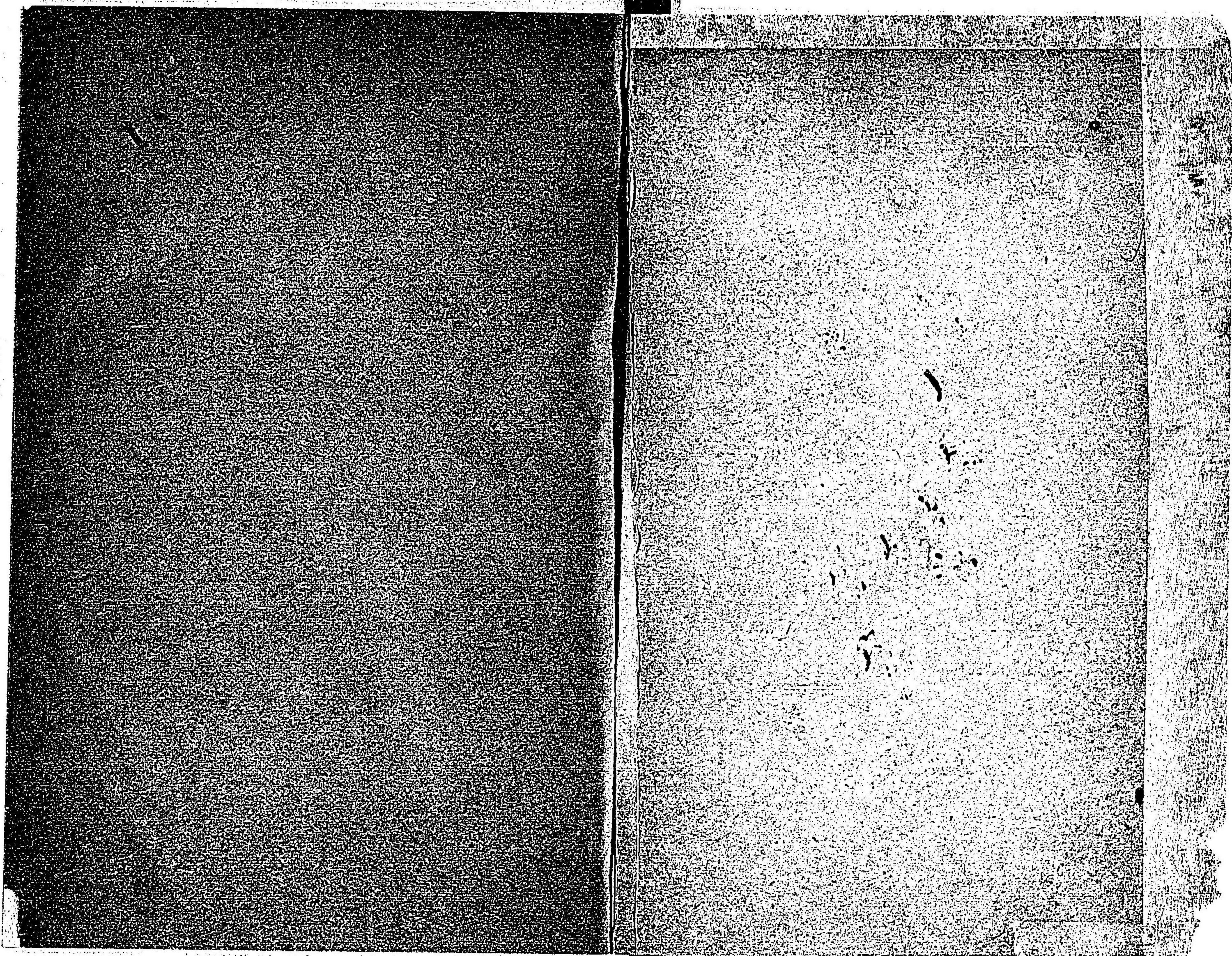
館藏	172
	3
	180
一册	一號
架	

西洋
因緣
說教之
集

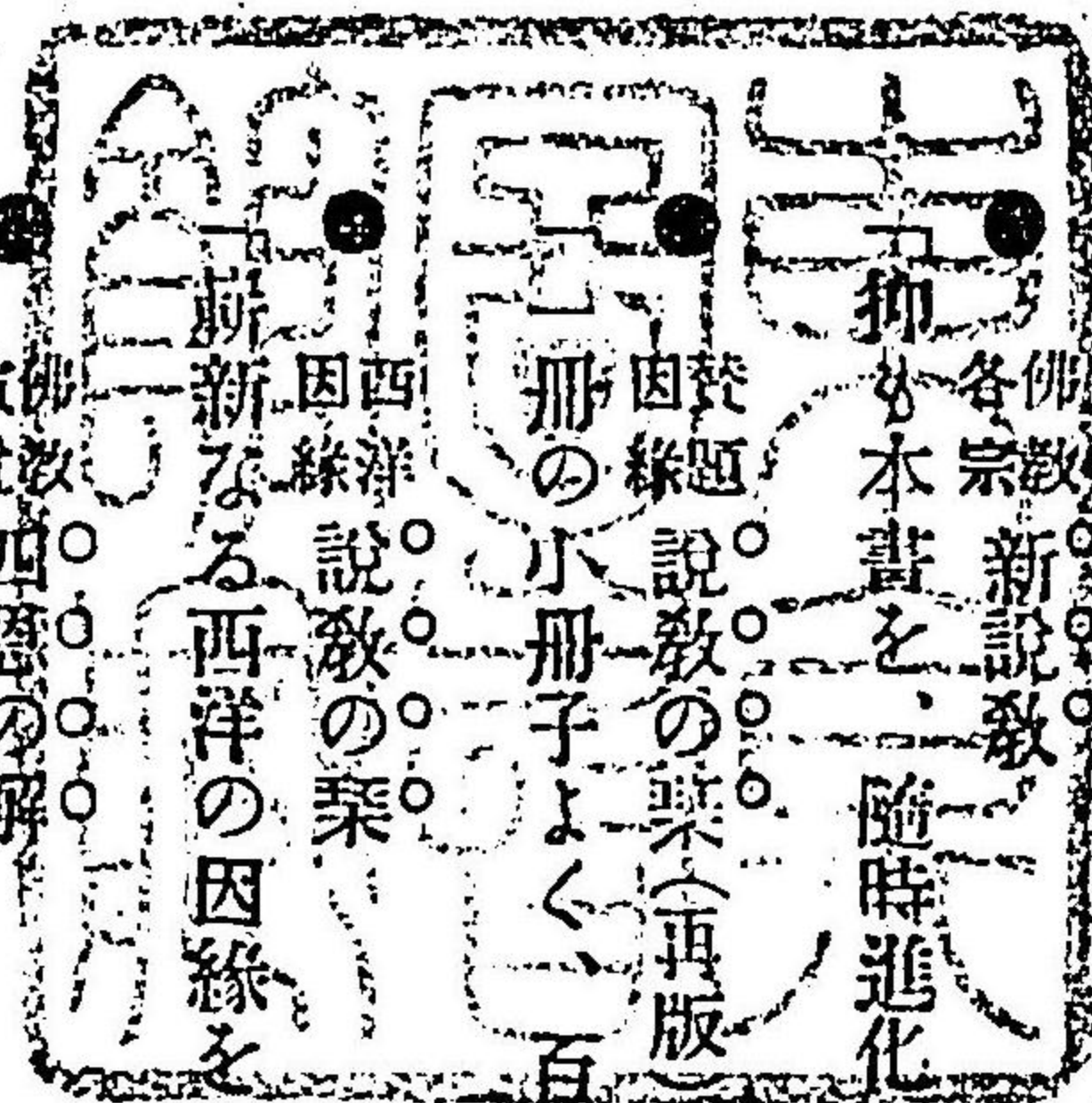
小澤吉行著

其中堂出版





No 3933 / 23



其中堂新版書目

● 改良新撰説教學

「右の各宗の説教法話の獨り稽古とも言ふべき書……」

小澤吉行著

正價四拾錢



● 佛敎新説教
各宗新説教
佛敎新説教
佛敎新説教

森 貴之著
新説教なりと自負する所以を言はば……

森 貴之著

正價廿五錢

郵税四錢

● 佛敎新説教の葉(再版)
因縁説教の葉(再版)
佛敎新説教の葉(再版)

小澤吉行著
二百座の説教を思ふか儘に述へ得らるゝは……

小澤吉行著

正價廿五錢

郵税四錢

● 佛敎新説教の葉
西洋説教の葉
佛敎新説教の葉

小澤吉行著
網羅して殘す處なく、吾が教理に合せ説きし書……

小澤吉行著

正價廿五錢

郵税四錢

● 佛敎四恩の解
佛敎四恩の解

「四恩十善の辨を頗る丁寧に言文一致の筆を以て、説き得し書……」

榎本道樹著

正價貳拾錢

郵税貳錢

● 佛敎達辨の術(再版)
佛敎達辨の術(再版)

「一名佛敎演説の獨稽古とも言ふべき珍書である……」

拈華蓮窓著

正價廿五錢

郵税貳錢

● 佛教演說軌範(再版)

伊東蓮窓著

正價貳拾錢

郵稅貳錢

「これも又佛教演說の獨稽古、數題の演說に評註割註を加へし書なり……………」

● 滑稽 寓意 佛教演說會(再版)

藤井東洋著

正價拾五錢

郵稅貳錢

「サア大評判の面白演說、坊様や居士方の内幕あはき、デハなる……………」

● 全第貳回

小澤吉行著

正價貳拾錢

郵稅貳錢

「ふれの外教者の内幕…………計りてゐる、面白かしく佛教の眞理を述へし……………」

● 一口 演說 僧侶の辨護

伊東蓮窓著

正價 八錢

郵稅貳錢

「坊様方の至極都合のよき事ばかり書しもの……………」

● 通俗十七宗綱要

伊東蓮窓著

正價拾五錢

郵稅貳錢

「各宗の大意を極、わかり安く書きなせし書にて、佛教大意とも言ふへきか……………」

● 佛教滅亡論(第三版)

田島任天著

正價貳拾錢

郵稅貳錢

「來れ、來れて一本を繕き、吾か佛教の將來と知れ……………」

● 佛教不滅亡論

萩倉夢笑著

正價貳拾錢

郵稅貳錢

「來れ、來れて不滅亡論を一讀し、吾か佛教の將來を知り……………」

● 眞偽 審判 日蓮深密傳

伊東洋二郎著

正價廿五錢

郵稅四錢

「日蓮宗の信徒は來れ、否な佛教徒の來つて一讀し深密傳の眞偽如何を知れ……………」

● 通俗 因明學

伊東蓮窓著

正價拾貳錢

郵稅貳錢

「因明の印度の議論法なり本書は西洋の論理學と對照比較せし珍書なり……………」

● 足立普明意見書

足立普明著

正價 六錢

郵稅貳錢

「師か滿腔の熱情、溢れて一編の意見書となり、宗教改良家の一讀せよ……………」

● 尊皇奉佛大同圓

小澤吉行著

正價 拾錢

郵稅貳錢

「大同圓に對する各新聞の議論を網羅し、夫々に著者が意見を加へ評せし書……………」

● 哲學大意(再版)

田島任天著

正價 八錢

郵稅貳錢

「哲學の初門…………其大意を簡單に解し安く書きなせし珍書……………」

● 哲學論評(再版)

青江覺俊著

正價拾五錢

郵稅貳錢

「哲學諸大家の演説を編集し、夫れに論評を加へたり……………」

● 哲學問答(再版)

田島任天著

正價貳拾錢

郵稅貳錢

「哲學の歴史、哲學の要領とも言へん歟……………」

● 印度古代哲學

中島弘毅著

正價廿五錢

郵稅貳錢

「釋尊以前の印度の哲學、一名通俗金七十論とも言ふへき歟……………」

● 今様 給入 宗教双六(大形一枚摺)

小澤吉行著

正價 拾錢

郵稅貳錢

「サア、くみやりなさる、面白ひ中に宗教的思想が發達しますから……………」

● 明治僧鑑居士一覽(大形一枚摺) 伊藤蓮窓著

正價 拾錢

郵稅貳錢

「日本全國に何人の龍象か有る……………乞ふ一讀せよ……………」

名古屋市門前町

● 各宗教科書及び御經類調進所

吉良屋兼助

● 西洋因緣說教の棗序

儻夫、有守株待兔、膠柱鼓瑟者、則誰不笑其固陋哉、今也、我國輸入泰西之文化、其勢滔滔、漲于全國焉、以是我國人民者、概崇拜泰西文物、徒競新好奇、如其事物、善惡邪正者、不敢問之也、此當時、不爲我佛者人、宜回善巧方便、而不護持佛法、亦敢弗俟深論耳、然我佛者之固陋、今尚不通世間之事情、與普通之學術、而漫然登於法壇、援引和漢因緣譬喻、以欲攝化民庶、亦誰不笑其陳腐哉乎、昔者以和漢因緣譬喻、而得能攝化民庶、今者人民爲之陳腐、而大厭聞焉、故余每語、曰憂佛法、不憂大弗興於世、反我佛者、不能回善巧方便也、然則爲我佛者人、當今、不從

來之固陋、脫却則豈何日得能免守株膠柱之笑哉、頃日小澤東海著作因緣說教之槩、携其草稿來、而序囑于余、余先披見其草稿、著作之体裁、分章別款、每款先舉泰西學說、又因緣譚照之於我佛說、其示活用法、使學者便利于索引講究、可謂其用意至矣、盡矣、故學者如熟讀此書、一登法壇、則聽衆清耳、稱其辨才也、必矣、否不止聽衆清耳、稱其辨才、佛法紹隆、法幢繁昌、復何可有疑哉、若夫至視此盛運、東海此書著作之功勞、可謂亦偉大也、余不堪隨喜、乃加序言、

明治二十三年庚寅五月下旬

蓮窓居士撰

● 西洋說教の槩序

今や文化日進の時勢の、滔々として益々長足の進歩を爲さんとす、此時に當りて、獨り我佛者の、世上の開明に後れ、人々の嚮後に、瞭然たるの、狀況あるの、毎に識者の深く慨歎する處とす、然り而して世人が智識程度の如何を視る時は、其識見の廓然として思想の高尙なる、事は又昔日の比に非ざるなり、世間の事情の此の如く夫れ進歩して、而して我佛者の世間進歩に、後るゝ事夫れ後れが如き者ありと、すれば、佛者何を以て、世人を濟度する、事を得可き乎、嗚呼今日我佛者の分際を、以て世人を濟度せんと、欲すること亦難い哉、夫れ然り今日我佛者の分際を、以て世人を濟度せんと、欲するものと實に、惟れ難たし今其難き所以を言は、今日我國文化は、歐米諸邦の文物制度を、輸入して以て其盛運を視るを得るに至り、者なるが故に我國人民の大半は皆な歐米諸邦に、心酔し苟くも歐米諸邦の事物とさへ言へば、其事物の善惡邪正を論せど、之を崇拜するが如き狀況あり、此時に當りて我佛者の依然として、舊套固陋を墨守し、和漢の故事因縁を說教法話の上に、敷衍するも世人焉んぞ、其說に感服せんや、否な、皆に感服せざるのみならず、聽く者大に其說

の陳腐を笑はんのみ、若し夫れ和漢の故事因縁を談するを、止め更に歐米諸邦の學説及因縁を將ち來りて之を、佛教に適合せしめつゝ、敷演せん乎聽く者大に我佛者の所説に、歸服するは、余の毎に之を實驗して、知る處なりとす、是れに因て之を考ふるに、我佛者今日の急務は先づ歐米諸邦の學説及因縁を佛説に、適應する方法を知るより、緊要なるの莫し、而して、歐米諸邦の學説及、因縁たるや我佛者中に多少當世の事理に、通達する人を除くの外、未だ當世の事情に、通曉せざる人にして、俄に之を窺はんと欲するの、實に惟れ難き事なり、茲に於て乎余の漫りに、此書を著述したる所以にして、之を要するに、此書は寡聞狹見の佛者に示して以て、歐米諸邦の學説及因縁を、我佛説に適應して、説法する可き方法を、知らしめんと欲するの微衷あり、讀者請ふ此意を了せんことを

明治二十三年五月

東海居士 小澤吉行 識

○凡 例

一 本書に掲ぐる歐米諸邦の學説及因縁の、多く原書に據て採譯したりと雖も、間に既に我國人士の反譯したる書籍より採擇したる者あきにあらず、然れども其採擇したりとて、時流の拔萃は毫も亦之を爲さず、其文章に最も彫琢を加へたり、讀者能く鑒識せよ。

一 書中一學説一因縁毎に、我佛説と對映適應せしめて、實地活用法を列記したり、然れども、其學説、及因縁は、固より著者が挿入したる、一局部に偏在す可き者にあらずして、其融通は實に無礙なり、讀者の伎倆若し能く一學説一因縁を以て之と萬般の事物に適用せば、其資益の甚く偉大なる可きものと。

一 書中地名は双柱を行傍に引き、人名の單柱を行傍に引きたり、而して彼我年號の對照は、本年より計算し、又貨幣の本位物品の量目等は、皆な現今の互市相場を以て彼我對照計算したり。

一 本書に掲げし、學説及因縁は、之と記すに、通俗体の文章を以てし、實地活用法は言文

一致休を以てしたり、是れ大に讀者の便益を計らんが爲めの微衷なり、
一書中一欸毎に古今歐米大家の格言を挿みたり、是れ唯だ讀者が欠伸を除くの資料に
供するに過ぎずと雖も、若し夫れ讀者格言を仔細に咀嚼することあらば、其資益ある
や、之を疑ふ可らき

著者 又識す

○西洋 因縁 說教の彙總目錄

○第一章 諸法實相……………一頁

(其一) ○萬法歸一 死體を石に變する新法

(其二) ○大事因縁 蟻と哲學者との話

○第二章 諸行無常……………八頁

(其一) ○無常迅速 盛衰の道理眼前にあり

(其二) ○現影非眞 犬と影との話

○第三章 精進勇猛……………十一頁

(其一) ○事無難者 事業を爲すの秘訣

(其二) ○勤勉克己 蜻蛉と蟻との話

○第四章 無明煩惱……………十六頁

(其一) ○妄見邪慾 人間の死なぬ秘訣

(其二) ○見解轉倒 新救世主の出現

(其三) ○王者信教 耶蘇教を信する各國帝王の數

(其四) ○愚癡迷闇 西洋人の御幣かつぎ

○第五章 因果應報……………二十三頁

(其一) ○廻向利徳 陰徳あれば陽報あり

(其二) ○積因得果 卑賤より起りて大名を擧たる人物

(其三) ○惑業薰習 著作者の奇癖

(其四) ○惑成業體 人間の先祖

(其五) ○因縁轉環 二頭四手二足一腹の人

(其六) ○畜生簡擇 犬の學校

○第六章 心用分限……………三十六頁

(其一) ○夢中意識 夢中に於る智力の働き

(其二) ○唯心所變 幽靈の話

(其三) ○能所二法 自動

○第七章 慈悲道徳……………四十四頁

(其一) ○誠偽虛眞 男女徳義心の検査

(其二) ○崇徳興仁 徳育の必要

(其三) ○忠信極濟 軍馬の忠節

○第八章 法爾本然……………五十二頁

(其一) ○能見不動 微弱の信心

(其二) ○化土相續 國粹保存

(其三) ○似而非行 鴉が白鷺をまねたる話

○第九章 不殺生戒……………六十頁

(其一) ○生類同愛 放生の利益

(其二) ○不得人身 宗教と自殺との關係

○第十章 不偷盜戒……………六十六頁

(其一) ○殘賊改悔 少年の誠實山賊を改悔せしむ

(其二) ○折貪慾挫 犬と盗人との話

○第十一章 不邪淫戒……………七十一頁

(其一) ○夢中行淫 怪夢姪娘

(其二) ○邪淫劣報 卵生の小兒

○第十二章 不妄語戒……………七十六頁

(其一) ○虚言薄福 虚言の爲め大に金を取損ふ

(其二) ○偽言被殺 象を欺きて却て殺さる

○第十三章 不飲酒戒……………七十九頁

(其一) ○酒是酖毒 酒は惡魔の巨魁

(其二) ○飲酒劣業 酒を飲むのか酒に呑るゝの歟

○第十四章 不惡口戒……………八十二頁

(其一) ○口業速報 口は禍ひの本

(其二) ○自讚毀他 猿と狐との話

○第十五章 不慳貪戒……………八十五頁

(其一) ○妄慳邪慾 鷓と鶉との話

(其二) ○布施功德 クリスマス

○第十六章 不瞋恚戒……………八十九頁

(其一) ○瞋業懺謝 怒る事の誠め

(其二) ○乳水和合 阿人の争論

○第十七章 不謗法戒……………九十三頁

(其一) ○神現威徳 愚夫神を勝る

(其二) ○敬神奉佛 神は最善の事を爲す

○第十八章 四維上下……………九十七頁

(其一) ○等象儀談 地球にあらざりて平地なり

(其二) ○永山實有 北洋探検

○第十九章 經典奉持……………百一頁

(其二) ○寫經功德 經典書寫

(其二) ○内外比經 新約全書の由來

○第二十章 最勝福德……………百五頁

(其一) ○子孫長久 世界無比の子福者

(其二) ○財福無量 世界第一等の金満家

○第二十一章 敬恭供養……………百十頁

(其一) ○鑄鐘功德 大砲大鐘と變ず

(其二) ○開甘露門 宏六壯麗の寺門

○第二十二章 回忌葬祭……………百十四頁

(其一) ○年忌追善 畜生尙ほ親の恩を知る

(其二) ○亡莫葬送 鰻の葬禮

(其三) ○陀毘修法 火葬

○第二十三章 圓融回互……………百十九頁

(其一) ○理事無礙 記腦力の養成法

(其二) ○三量差排 統計學と宗教學

(其三) ○求聞持法 祈禱の利益

○第二十四章 般若修証……………百二十四頁

(其一) ○文字般若 神符の利益

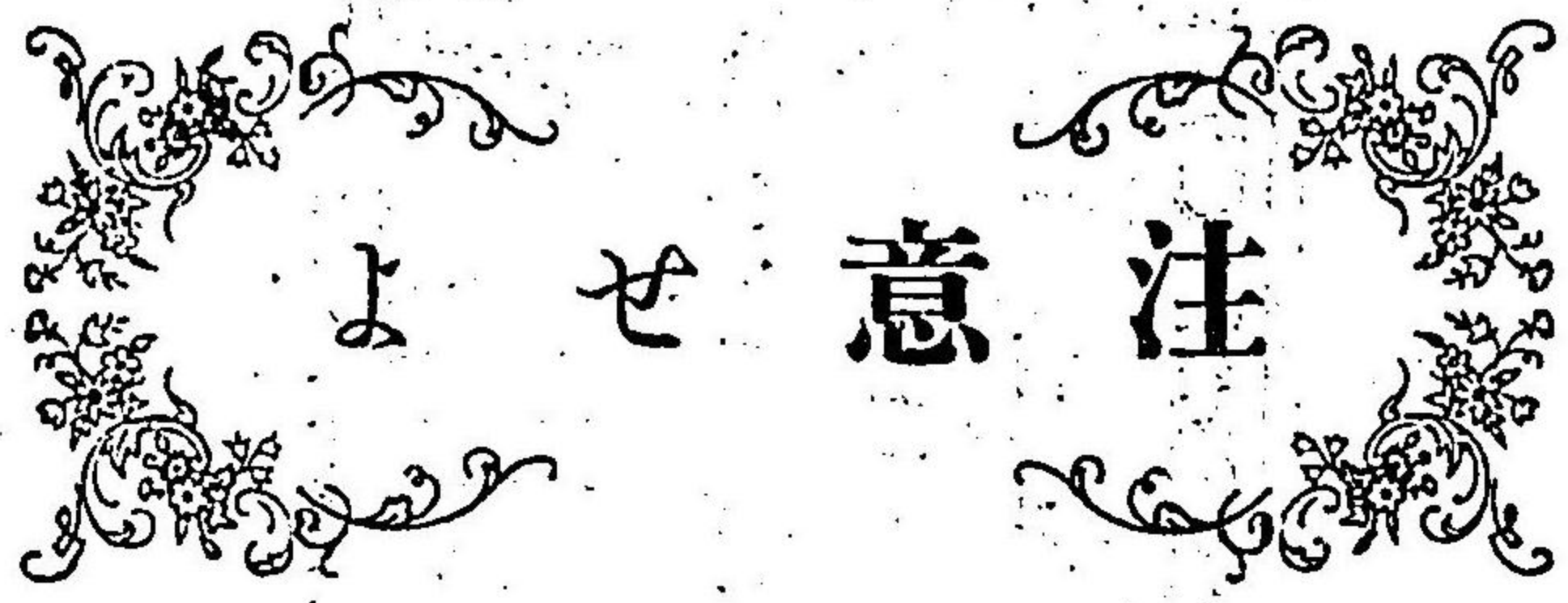
(其二) ○畫曼陀羅 美術の快樂

○第二十五章 雜……………百二十八頁

(其一) ○四大不調 コレラ病源の研究

(其二) ○成住壞空 地震の理

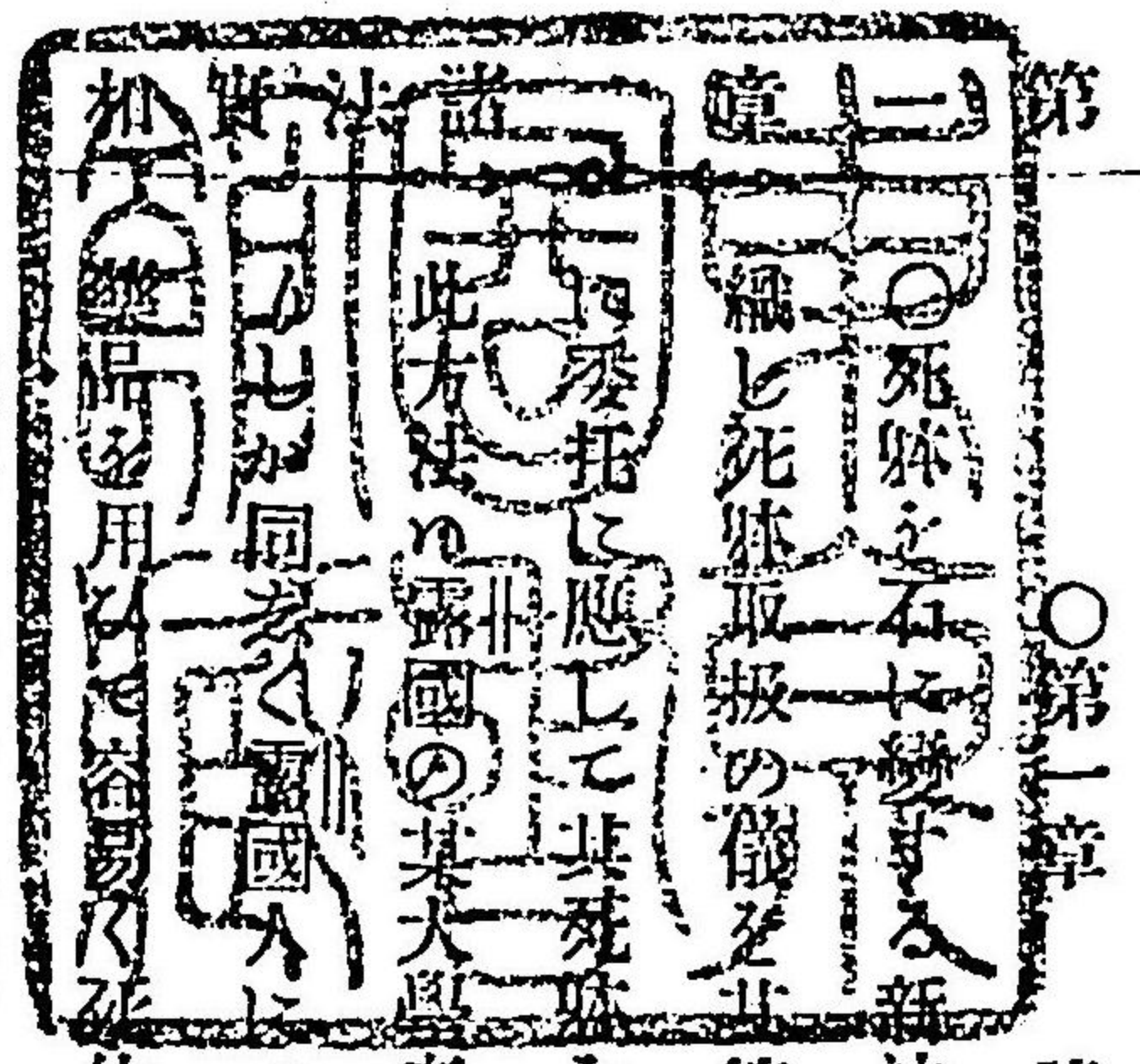
(其三) ○業感緣起 洪水と山林との關係



弊店の兼て廣告せし如く、前金御送付ならされば、何方様にても一切
 出荷せざる事に御座候處、應々代金御送付なく、端書又ハ封書等に
 て、屢々御注文、屢々出荷の御催促に相成候方も有之候得共、前記の
 通り代金御送付無之方へハ、出荷せざるハ勿論なとも、右に對し一
 々御回答仕候も煩しく候に付、今後御送金無き注文、又ハ往復端書、
 郵税封入ならざる御照會等にハ、一々御回答致さざる事に取極め候
 間、御照會の節ハ、郵税封入か、往復端書、御注文の節ハ、是非前金お
 て願上候○郵便切手代用ハ五厘切手に限る○五十錢以上壹割増の事
 ○爲替ハ三ツ井銀行か廣小路郵便局宛○差出人の宿所御姓名ハ可成
 明細に字格判然と御認め願上候

○西洋說教の樂

東海居士 小澤吉行 著



第一章 諸法實相 (其壹) ○萬法歸一
 死體を石に變ずる新法 米國フキラデルフニア府居住の日耳曼人中に一會社を組
 織し死體取扱の儀を其筋に願出づるの企あり、此會社の目的ハ人の死没する者ある毎
 一委託に應じて其死體を固結せしめて石質の者と爲し之を永遠に保存せしむるにあり、
 此方法ハ露國の某大學者の發明なりと云へど其手數繁雜にして容易に施行する能わざ
 しか同考の露國人にてアルヂー、ペロウスキと云へる博士は、不圖したる事より礦物
 藥品を用ひて容易に死體を石に變せしめ得べきことに心付き、多年の苦心を経て其案漸
 く成就したり、左れば何卒其の奇術を自國に實施せんと欲し聖彼得堡府なる醫科大學
 校に向て種々請求する所ありたど、然れども最初の發明者と稱する彼の某大學者を始
 めとし、何れの醫家も皆な博士の言を信せざして之を實驗せしめざりしかば、左れば

佛國に行て其術を試みんと遙々佛國に赴きしが、茲にも諸學者の爲めに皆な冷遇されたり、因て再び倫敦に至らんとせるに不圖米國チカゴ府に縁戚の人あるのミカ米國こそ此術を賣るに最も適當の國柄なることに心附き、俄かに其方向と轉して今より一年以前にチカゴ府に赴きしが、茲にても思ひなき働きを爲す能はざるにぞ、此次きは紐育府に試み尙ほ知己を得すんべ引返して倫敦に行かんと決心し、其途中圖らざるも暫時フアラデルフニア府に滞留せるに恰も好し、茲には死脈を固結せしむべき術を研究せんが爲めに特に組合ふたる醫學士の協會あり、期せざして其會長セカル氏にさへ同會しければ、新發明の奇術と語れるに、會長の該協會も既に死脈を固結せしむる事丈けの工夫したれど、容貌顔色を其儘に保存する方法を得せペロウスキ博士の發明したる方法こそ其最も苦心して探究し居たる所なる旨を答へたり、斯る次第もへ協議忽ち一決し、該協會の博士をして實際に試験せしめたるに、十分満足すべき結果を得しかば、之を代るく十七箇の湯中に浸せしかど毫も解融すべき徵候なかりしにぞ、見る者大に感稱して遂に、死脈固結會社を團結するものとすはなれり、博士の深く其藥品を秘し試験中の

獨り一室に閉籠りて何人も之れに入ること許さず、左れの如何なる方法を施し、如何なる藥品を用ゆるにや、毫も之れと知るに由なけれど、種々の藥品中鹽を用ゆるものと博士自ら之を公言せり、併し鹽の第二位以下に立つべき藥品にて重立たる藥品の其自ら發明したる所なると云へるはありて、其他の事一切之を口外せざれば、何人も窺ひ知る由なし

此ペロウスキ博士とカセル氏とは新發明に係る死脈を石に變ずる方法の藥品を以て斯くすると云ふからに、思ふに是れの化學的作用で有らうが、ナニしろ不思議の新發明で有る、先づ各位能く考へて見たが善い、我れ等の此軟弱な肉身が死んだ跡で、堅固な石に變ずるとの如何の藥品を以て化學的作用に依ると云へ、何と不思議の事では御座らんか、併し乍ら、能く考へて見ると、是れは我佛教で申すと即ち法性一如の道理で、人の脈が石に成る位の愚かな事ぢや、何となれば、我れ等の如き凡夫でも一旦菩提心を發して信根を堅固にすれば、佛と同脈に成れるものぢやに依て、其石に成る位の別に不思議でも何でも無い、法性一如の道理より深く考へて下すと、吾

人の死骸の化學的作用や藥品の効力を借んでも石に成らうと思へば自ら石に成る事が出来る、イヤサ石斗りぢやア無い自ら草木にも山川ふも大地にも、畜生、餓鬼、修羅等にも成れるのぢやに依て、此道理から云ふと我れ等の佛に成れる事の必らき疑ふべき事での無い、今日の年若い人の兎角西洋の學問の高尙だと申しますが成る程、左様でも有らう化學の理法と明らゝに究めて居る邊よと申すと實に泰西の文物の進歩して居るに違ひ無い、試みに其化學の定義を言つて見ると、化學といふ宇宙間に有ると有らぬの物質を組織して居る物質の性質と吟味し、且其物質の結合及分離と支配する一般の法則と調査する學問に外ならぬのぢやうら、若し話し少し極端に涉るかも知れんけれ共、物質の結合して又の一旦組立たる物質の變て物質が分離するに至る迄は時間、空間、勢力等の如何なりしかと問ふに最早、是れより先きは化學上にて説明は出来ぬものぢや、要するに化學を將ち來りて我佛敎の法性一如の道理と比較する時の中へ其優劣の差違の大層な相違で有る、何となれば化學の作用は特に相對が行き止まりぢやけれ共法性一如の道理の相對の思か、絶對迄も詮索が行き届き、譬へ陳稜とした事でも、玲瓏として判明ならしむるのう即ち法性一如の道理で有る、シテ見ると佛敎の中へ廣い、畢竟するに化學杯の先づ佛敎眞理の入口とでも申す可きものぢや

●一小眞理の力と雖も尙ほ能く幾億万斤の重量を引く可きものなり故に眞理の力は廣大無邊なり(テイラル氏)

○第一章 諸法實相 (其二) ○大事因縁

○蟻と哲學者との話 一人の哲學者ありて蟻に言ひけらく、蟻よ汝は何が目的にて此世に出來りしやと問へば、蟻は少一容と改めて哲學者に向ひ然う言ふ君こそ何の目的ありて此世に出來られしやと一番下螺に問ひ掛れば、哲學者の少しく沸然として、此蟻め小癩な事を言ふ者かな、一蟻汝は幾許の智識ありやと云ふと又蟻は自若として、然う言はるゝ君も幾許の智識を具せらるゝやと問へ返しけるより哲學者は益々怒り出し、已れナマ意氣な蟻の癖に我れに向つて口答へをする憎ツき奴だが、已れ何を知り居るぞ高の知れた蟻の智慧と言へるを、蟻は聞き了はらせケラと笑え出して哲學

大 事 因 縁

者に對して、如何にも君の言ひるゝ如く私は高の知れた蟻で御座るが併し私の此世に出て來た自分の目的の能く承知致し居り候、元來私共が生活の爲先に汲々營々するも、君等人間の如く樂を淪みて苦を避け生活とする様な考へは少くも無く、況て自利の一點に着目するが如き事あるに於てとや、左様の事の毛頭私共に之なく、之を要するに私共は自分の分限に應えて實利チチリチを計るを以て畢生の目的とする者なるが故に君等人間の如く自己の智識に誇りて却て絶對的アソソリトを解する能はざるに比較すれば、或は私共の智識君等に優れる處あるに非ざるかと存せらるゝ也と、諄々として説き立てしものから、伴んの哲學者も大に蟻の説に服したりと見えて俄に言葉を改定成る程、貴説御尤千萬、貴殿も吾黨の部類で御座る過刻よりの失禮御免候へ

此蟻と哲學者との話を咀嚼して見ると、中々寓意が有りて我れ等人間の心中と能く蟻が刺衝して居る、其然る譯は各位も聞かると通り蟻の話すには私共は自分の分限に應へ實利と計ると以て畢生の目的として居ると言ふは、即ち蟻の能く自身の因縁に安んず諸法實相の道理を究盡して居る者と申すも亦決して過言では無い、然る

第 一 章 諸 法 實 相

に我れ等人間は如何で有るかを尋るに、我れ等人間の大半は實利に着目する處の、第一自身一人の利益すら之を計る事の出來んで、ゴ付き居るで御座りませんか、此の如き輩は即ち彼の蟻が自分の因縁に安んず地穴に能く蟻居して生活を全ふ致し居るのに比較すると、其違ひは大層な違ひで有る、故に人間にして自身の因縁の何者たるを知らず將た其生活の方向にすら困りて、ゴ付き居る者は彼蟻にどうも如かさる事遠しと申すも、敢て失言で有りません、嗚呼人間にして蟻にどうも如かさるとは何と歎かば敷き事で御座らん、各位も能く拙僧の申す事を聽き取られ、各自因縁の道理を明らか、諸法實相の妙理を知り得らるゝに至らば、人間の最大幸福は之に超した者は外に無いのぢやから各位能く此事を承知して、開法相續せられなば天晴れ人間畢生の目的を達する事も出來るに疑ひ有りません

●不潔の快樂は、吾人を腐敗の世界に引く求心力にして、宗教の快樂は、吾人を清潔の天堂に引く遠心力なり

(ユレセス氏)

○第二章 諸行無常 (其壹) ○無常迅速

○盛衰の道理眼前にあり 昔し亞細亞に一王あり、兵を好んで善く戦ふ、國を併する數國、後ち戦ひ終り敗れて虜となる、敵、王を地上に坐せしめて、馬食を煮る所の甑を以て疎食を煮て啖はしめんとす、偶狗あり來て頭を甑中に入る、甑口狹ふして脱けず狗甑を壞りて亂走す、王見て大に笑ふ護衛の兵、異として其故を問ふ、王曰く今朝廚宰、我れに廚中の具三百の駱駝をして荷はしむるも荷を盡さずと訴ふ、今一匹の狗之を荷ふ、總して盛衰の道理の期定す可からざる事此の如しと

或る古徳の歌に「かはらトな彌陀の御國にひまれなば。昨日の夢も今日のうつとも」どの世の中の無常なる事を早く証得する法を教へられた者で有る、唐の劉庭芝の「年々歳々花相似たり、歳々年々人同トから老」と言われたが、實に此詩の通り今年春と迎ひ花と俟てとも、去年兔籍に入りし友は歸りて來ない、軒端の梅は古今同老く薫れとも、世に住む人の姿は一年増しよ老ひ、逝く者は流るゝ水と同老く滔々として日く下る、諸行無常にして念く壞滅し、今斯く此道場に集りて能説所説する我

れ等れ互も、其命數は唯ホンの一呼吸の間に有るのぢや、何と生死の一大事を決定せんで相成らうぞ、誠み昔し一休禪師が歳端に觸躰を提げ戸毎を廻り、無常迅速の要慎を示されたるも尤も千万ぢや、盛衰榮枯ナニツとして頼みに成る可き物なきは前に申した因縁の通りなれば、生死の一大事を決定して無常迅速の世の中に、大安樂を得る事が最も緊要と存じらる

●時あらは汝、懺悔す可いと云ふ勿れ、恐らく時の到るを待つも、時來りて汝の有となる事なかる可し

(ヒールル氏)

眞 非 影 現

○第二章 諸行無常 (其貳) ○現影非眞

○犬と影との話 或る犬が池の側お捨て有りし、一塊肉を見付け、啗ひ往んと欲したるに、其影は池の水面に映りたり、件んの犬は自分の影なるを知らず、其影の映れる犬の肉塊は、自分の啗ひたる肉塊よりも、一層大なるを以て、之を奪ひ取らんと欲し、一旦、啗ひ込たる肉塊を捨て、影に映りし犬の肉塊を喰ひ付きしに、固より影の事なれば、眞

第二章 諸無常

實に肉塊あるに非き、兎角する中に、爰に自分が一旦、啗ひて捨て置たる真個の肉塊は、他の犬來りて啣へ去りしるば、影は徐るに其犬に向へ「現滅常なき事我れを見て之と知らる可し、犬君少し注意し玉へ、餘り貪慾斗りに目を付ると、果ては君の命迄も、危ふますぞ」と論したりしに、犬は大に影の忠告を謝しほし「如何にも影公の言はるゝ通なるが、畜生の悲しさには、物事に對する識別の付ぬに困却したり、此識別を付る法に、公何か善き考へ之なきか」と問へしゆに影は「ソレハ好い處に氣が付れたり、先づ君が物事の識別せらるゝならば、過刻の如く君が仕損下られし事あるを、一生の手本と爲し、此後、肉塊其他食物の捨てたる物あるを見付け玉は、慾張らばに、篤と其食物の大小を見較べ小ある物と喰はる可し、然る時は喰ひ損し無きは勿論、君の身を危殆するが如き事、決して之なかる可し」と答へしと犬は尤もみ聞き、爾來其言葉を守りたるに、果して一生の幸福と、至ふし得たりとぞ、

此現影非眞の因縁に就て、各位が考へらるゝも、諸行無常の道理が能く分る筈で御座る、抑も我れ等が六道生死の迷ひは、皆な現影非眞の境で有る、喜ぶ事も泣く事も憂さも歎きも樂みも過くれば、都て夢の跡ぢや、我釋尊が御出世被成て、横説堅説遊ばされしも、慧命相續の方法と、到彼岸の道諦とを、御示し玉はん御慈悲で有るが、凡俗の悲しさに貪慾に斗り走るとも、正しき心の少しも起さず、毒蛇を見認めて眞金となり、寶珠となり、夜叉と愛して、福神とし、大黒天と思ふ杯の、實に迷ひの至り有る、我れ等れ互に此迷ひが有ればこそ、生死の苦患も受るあれ、若し迷ひを打捨て、悟りを開きた事あらば、生死の苦患を解脱して、樂果を得るに違ひは御座らん、今もも知れぬ生死の大事、各位能く現影非眞を觀せられて、安樂の身に成らるゝ事が急務で有る

●吾人死する時の恐怖に打ち勝ちたる者は、善く爲し得たりと謂ふ可きなり(ツエレメイ、テイラル氏)

○第三章 精進勇猛 (其壹) ○事無難者

○事業を爲すの秘訣 高尙なる學問を爲すは其進歩殊に遅し、絶大の事業は、一時に爲し遂ること能はず、故に人の一生は、道を行くが如く、一步づゝ進む事を以て足れり

事 無 難 者

とす可し、英人デメイスターは志を一途にし進んで渝らざるは、事業を成就する第一の秘訣なりと云へり英儒スマイルスの教を獲んと欲せば、必き先づ種を蒔き、耐忍して久しく待は可し、最も實なる菓實は、其熟する事、必き最も遅しと云へり亞細亞の或國の諺に「精勵と時日とは、桑の葉をして、繭子に變せしむ」と云へり、是を皆を事業を爲す者の、常に紳に書し置べきの金言と、謂ふ可きなり。

此一則の記談の、誠に我れ等が、佛法奉持の心を、精進勇猛ならしむるに、善き手本で有る、凡そ此世に在りて、我れ等が何事を爲さうと思ふにも、其爲す可き事を怠りて、事の成就を望んだ處が、夫れの到底出來ない譯ぢや、事の成就を見やうと欲するならば、是非とも其爲す可き丈の事を、勉めんけりやア成らんので有る、併し総て人々の心は、横着な者で有りて、勉めんけりやア、事は成就せんと言ふことを、百も承知し居り乍ら、矢張怠りて居て、事の成就を望めるは、先づ世人の通慣で御座る、何とマア轉倒妄想も餘りでは有りませんか、佛の世人の轉倒妄想を打破り、正見に引き直さんとして、佛道修行と遊ばされ、百折千磨、身を三祇に摧き、智を億劫に練り、肉を餓鬼に

授け骨を鬼神ふ與ひて、智慧慈悲圓滿具足し玉へし事は、最勝王經の捨身品や、涅槃經の聖行品杯に、委しく出て居るが、此等の御勝蹟も就て按するも、亦佛の精進勇猛被成た事が分りませう、夫れ佛ですら箇様ぢやもの、況て凡俗の我れ等が、佛法を奉持して、最上幸福を得やうとするには、何で精進勇猛致さんで、相成りませうぞ、

●宗教の生活は、斷へざる勉強と實行とを要する、一箇の美術なり(チャーム、ミツチ氏)

○第三章 精進勇猛 (其二) ○勸勉克己

○蜻蛉と蟻との話 蜻蛉あり冷風の吹そよぐ頃に至り、生活に窮し、如何はせんと思按し居れる中へ、一疋の蟻れ歩み來るを見て、蜻蛉の蟻に向へ「イヤ蟻君久し振だが君の近頃、如何にお暮しか」と云へば、蟻は蜻蛉に對して「僕等の兼て稼いで置たから、ドウカ生活には差支ませんテ」と答ふるものから、蜻蛉は「ソレハ君等、結構です、私等の暖かい、こちらは、何と云つても暮し易う御座るが、斯ふ寒く成つて來て、實に暮しを立るに、困ります」と眩き半分に云ふと、聞きたる此方の蟻は「我れくお互の生活は、並

十四
み大体の事ぢや御座らん、暮しよ困らん様にする氣なら、何でも稼ぐ事に精を出せよ、少しも困る事無いのです、僕等は暖かいうちに、精ッ精と、稼いで地上の食物を穴の中へ、運びて置ますから、寒く成つて來ても暮しよ安氣ですけども、君等は暖かい時節に、絹やスキャの羽織杯を着込み、ブラ〜遊んで斗り、居られたモンゴから、今日の様に寒く成つて來ちやア、食ふに困らるゝので、御座るのサ」と如何にも理を分たる訓誠に、蜻蜓も感伏したりと云ふ、

此因縁と聞けたる各位は、之を何と思ひるゝ、凡そ何事を爲すにも其目的を達しやうと欲するよは、何でも其事の成り遂る迄の間は、精を出さんでは相成らんと云ふ事が考へられませう、昔し釋尊は智行圓滿被成て佛とお成り遊ばした時、既よ五百塵點劫の過去に在りたと申すが、夫れですら、其過去世より娑婆に往來被成し事の八千度ぢやと、法華經や、梵網經の中に御説き被成て有る、シテ前の五百塵點劫と、又獲に御出世被成た年代、即ち二千八百年前とと、標準として、後〜の事と思ふと、此れより百千万劫を経て、亦復た百千万遍の往來と、被成る譯で有るが、何と御勉強を事では

御座りませんか、此の如く、釋尊の佛法の爲めに、又利物度生の爲めに、御勉強遊ばさるのに、我れ等の聞法信心に勉強致さんで、如何で得達安心が出來ませう、左れば古徳の、細々に信心の溝を浚へど仰せられたが、此信心の溝とても、唯た一度斗り浚つたとして、直に泥が溜ると、水の流れも止まる道理もえ、怠らぬ精を出して、常に能く泥を浚ひ、水の流れと止めぬ様に致さんぢや、イケません、昔し釋尊の其御爪の甲に、少一の土を載せ玉へて、阿難と云ふ御弟子に問はるゝに、此土と大地の土と孰れか多いかと、阿難の畏み答ひて申さく、因より其多少の、較べ物に成りませんと云ふを、釋尊の聞かせられ、左わらん〜、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四惡趣に、生を受けるの、恰も大地の土の様ぢやが、獨り人間に生を受けるの難き事は、此爪の甲に載せた、土の様な物で有ると仰せにき、何と各位斯く迄、生を受けるに難き人間に生を受け、遇へ難き佛法に遇ひ、信心聞法が出来るのは、誠に結構な果報者ぢや、尙や此上にも、善き果報を得やうと、思ふ了簡から、信心の溝と浚ふ事に、精を出さねば、成りませます、

●吾人ハ種蒔く者となりて、涙を以て畦を漙す迄は刈る者となりて、熟せる黄金の穂を歛むる事を望む可らず

(アライス、カレイ氏)

第 四 章 無 明 煩 惱

○第四章 無明煩惱 (其壹) ○妄見邪愆

曩に佛蘭西、に於てメストルと云ぬ人が、魔酔術を發明したりとて、種々奇怪の魔術と使え、多くの愚民を瞞着せし事ありしが、近頃に至り前のメストルに似たる、一人の詐偽師起り、出て佛蘭西の「アベル」雜誌に廣告して曰く予が今度新規發明せし、人間の死なぬ秘術は、神仙傳授の、一大奇法にして、長壽無病決して、死する事なきを保証と、有志者には來月第一日曜日を以て一人前金五十弗宛の傳授料を、申し請け其秘術を傳授す可きふ依と巴里市トールハン街第七十二番地ドリュエツ、レット方に來訪せらる可し」と、吁此廣告亦奇なりと、謂ふ可し、

仇し野の露と消え鳥邊山の煙と立去り、死は吾人の逃れ難き者で有る、併し乍ら其死期の來るや突如として、人を驚かす、死は人世の常で有る、併し乍ら、無常の風の一

忘 見 邪 愆

たび農ふや哀はれ果敢なきふと、人を悲ましむればこそ、死ぬ事は誰しも之を嫌ふのぢや、今前に擧げ人間の死なぬ秘術果して、能く其秘術通りに、人間の死なきに、濟む事の出来るや否や、甚だ疑はしき次第で有る、抑も此世界に、有らぬ一切の事物は、皆な因果の理法に制裁せられ、吾人の如きも始め生れた、因縁が有るので、死ぬると云ふ、結果が有るのぢやに、生れて來た事斗りで死ぬると云ふ事が、無かつたなら即ち是れ因縁結果相應せぬ、不道理な譯で有るから、斯る不道理な事は、世に決して有る可き筈が無い譯ぢや、シテ又如何に人間の智識が進み、學問が開けたとて、因果の理法に、背きたる人間の死なんで、濟む事の出来る譯が有らうぞや、思ふて茲に至れば前に云ふ人間の死なぬ秘術の信するに足らぬ事、既に明らかで有る、然るを此の如き廣告を出して、世の愚夫愚婦を欺き利を釣んど、欲する者あるは、實に惡む可き極で有るけれ共、世の愚夫愚婦の死ぬる事を嫌ふ餘り其詐偽の手段に掛るに至るは、此輩の固陋も亦誠に憫れむ可き限りで有る、昔し秦の始皇帝は、大に死ぬる事を厭ふ處より、蓬萊に不老不死の奇薬を、探したと、云ふが、剛毅大膽の、始皇すら既に

筒様ぢやよ、依て、都て死ぬる事を嫌ふの一般の、人情で昔も今も此情慾斗りの別に變りぬ無い、底で此死ぬるのが嫌ひなら、佛になるが善い、佛に成らうと思ふなら、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の道理を、知るが宜しい、

●夫の小なる蜜蜂は、草木の花より、只甘き蜜のみを集めて、之を食へ毒の含める物は捨て之を顧みざるにあらざりや、人の善惡を擇ぶこと、宜しく此蜂の如くならざる可らず
(ハリンター氏)

○第四章 無明煩惱 (第二) ○見解轉倒

○新救世主の出現 千八百六十五年(我度應二二)に米國ニユヨーク州リバーティー郡に一大欺騙者現われ、自ら救世主と稱し、頻りに愚民を煽動し、其常に言ふ處を聞くに、我れは神の子なり過る十八世紀間の白哲人種獨り神の恩恵を享有せりと雖も、後來は黒人種代つて、神恵を享有するに至る可し、扱我をば三十年前オハヨー州に生れしも我靈魂は此世界の出來ざる以前より存在せりと然れ共、斯く云ふ彼れ自身既に、白人なれば此の如き唱道の自ら大に不都合なる處なきよ非ざるに、此地の黒人の彼れの甘言を、欺かれて

見 解 轉 倒

覺らざる者の如く、多數の黒人の、尙ほ彼れの身邊を圍繞して彼れの足をも尙且つ尊びて、接吻するの光榮を得ん事を、争ふの有様なりし、左れば此欺騙者の、大に人民と蠱毒する者と見認められ、是れより先き官の捕縛する處となりしも、如何せん事の宗教上に關するを以て、法律に問ぬ可き、正條も無ければ、放免したるものゝ却て之が爲めに、黒人の欺騙者を、崇拜する事は熱度を高め各自稼業を抛棄して、彼れに隨伴し彼れ金錢を要すれば黒人等の争ふて、之を布施し彼れ衣服を欲すれば、黒人等の、競ふて之を調與するの有様也え、官に於て大に配慮し、如何よ彼れを處置せんのと協議中、彼れ運命の定命にや、或日欺騙者の二三の黒人を伴ひ教會堂へ到らんとする途中に於て、同郡内に住居する上院議官ブラッドウェル氏の飼犬が其股を喰付れ、アット言ひッ、地上に倒ると、面部胸部の嫌なく、滅多無性に喰付き廻りされ遂に彼れは其儘死去したりと云へり、

各位見解轉倒すると、此僞聖の様な行ひをして終ふ大事な命迄も無くして仕舞ます、又轉倒見解の人を見るに、自身も矢張り見解轉倒して居ると恰も前に擧た黒人の僞聖に於るが如く猥りに金錢衣類迄も無くして之を崇拜し、後は自分の生活にも差支

る様な事に成り行きましますから、能く注意して最も務めて轉倒見解を擲ちませんとイ
ケません、底で之を擲つに如何したら宜しからうと申すに、只自分が本來の光明を
放ち、自心を照す事が緊要で有るのぢや

●信仰は消極的の快樂なり、宗教の道徳を自心に備ふるは、積極的の快樂なり(メリー氏)

○第四章 無明煩惱(其三) ○王者信教

○耶蘇教を信する各國帝王の數 耶蘇教を信する、各國君主の數を舉れば、二億三千七
百萬の人民に、君臨し玉ふ英國女皇を始めとし、僅に五千七百四十一人の、臣民を有す
る、北伊太利、モナゴ國主に至るまで、合計卅六人あり、内十八人のみ、舊教信者にし
て、即ち奧地利、フラジル而帝伊太利、西班牙、葡萄牙、白耳義等の國君是れなり、此れ等
の諸國君主の内には少なくとも、三人は羅馬法皇と甚ぞ疎遠なる者あり、現に伊太利國君
の破門せられたる者よして、又サキメニー王は舊教信者なるにも拘はらず、其臣民の過
半の新教信者なり、其他に二國君の希臘教信者を除き去る時の、全く新教信者たる、各

國帝王の廿四人なりと云ふ、

耶蘇教も、舊教ぢや、新教ぢや、と云ふて、種々の宗派が澤山に有るけれ共、均しく一耶
蘇教中の宗派で有るのぢやに依て、彼此相互に、自讃毀他す可き事は致さんでも宜ら
うと思ふのに、彼此相互に教義の優劣を争ふて、兄弟牆に闘くの、奇觀あるの、抑も
亦た耶蘇教の鹵莽亂道な所以で、有らう、且夫れ前に擧た通り、各國の帝王多くは、耶
蘇教と信トて居らる、縦ひ其信する處派を異にし、教義上の優劣あるよもせよ均しく、
一耶蘇教を信ト、眞神の教訓を奉ふで居らるゝ限り、又均しく眞神の教弟ぢや、相互
に乳水一味の交誼を爲して、共に眞神の榮光を現揚することを當然で有らうのに、左の
無くて今日各國交際の有様の恰も春秋戰國の時代と、同しく、互に鬪墜のみ是れ窺ひ、
苟も乘す可き有る時の、寸取尺奪するを以て、目的とする者の如き、奇觀あるのは誠に
怪しからん次第で有る、熟らう、按するに、耶蘇教が人々の心性を陶冶し徳義を維
持するの、力に乏し其の致す處の即ち前の如き奇觀を現出するので有る、若し夫れ彼
れ耶蘇教は佛敎の如く、因縁所作の法と基とし成立した宗教ならば、帝王之を信トて、

以て治道を資け、一國の安穩を期圖する事が出来るのぢやけれ共、如何せん彼れ耶蘇教は、造物主宰と談上、根が悪平等の宗教ぢやに依て、之を信する者の自然に邪見も感化せらるゝのも致し方が無い、併し眼識ある者は、此話を聞くに就ても、又真正の宗教を能く撰み分けて、信仰するが何より大事で御座る、

●皇室の宗教は風の如く、能く人民之草の靡くか如くならむ(エトナード氏)

○第四章 無明煩惱 (其四) ○愚癡迷闇

○西洋人の御幣かつぎ 日本人は偶々「クシヤミ」をすると、ア、誰う噂をして、居るナと云へ乍ら、感胃に罹らぬ、爲め西方の肩を二度打つの風あり、然るに斯る御幣の俗さの風習あるは、實に日本のみならず、西洋諸邦に能く此風習行はるゝこそ可笑しけき、西洋人の常々最も忌避する事の甚ゞしき者は、首を北にして、寝れば地球は磁石電氣の通る、道なるを以て、最も能く寝るを得ると云ふ、日本にて死人と北に向るを例とし、北向と寝る事と思ひ慊ぬ者あるも、亦大に因る所なきにあらすと、謂ふ可し、

愚 癡 迷 闇

凡そ物事に付て、何や箇やと、思ひ慊ひとする事を、御幣のつぎと云ふが、是れは實も馬鹿く敷き話で有る、何となれば、世の中れ物事の、何一ツとて因縁の道理に洩るゝ者は無い、左すれば因縁の致す處は、御幣をかつぎて斯うすれば縁喜が悪い、那アすれば、吉祥だと、言ふて見た處が、自業自得の然らしむる處は是非も無い譯で有る、然るに自分の心性の、愚昧なる處よと、探るにも足らぬ事を氣に掛け心に信するを、之を妄信と申すもので御座る、佛は此妄信を打破し玉はんが爲めに世に出現遊ばされと、譯で有る「十方佛土中唯有「一乘法」無「二亦無」三除「佛方便說但以「假名字」引「導於衆生」說「佛智慧」故諸佛出「於世」唯此「一事實」餘「二則非」真終不下以「小乘」濟度於衆生」との金口をば、朝な夕なに、奉戴して佛教信心が專一で有る

●誤る者は人間也、偏頗に生長する者は人間也、極端に陷る者は人間也、神の教と吾人の考へとを混する者は人間也(ラチラシユレダン氏)

○第五章 因果應報 (其壹) ○廻向利徳

○隠徳われバ陽報あり 古の歴史家英のアルフンツト大王の事蹟に及へば、必ら左の一話を記載して、王の仁心深かりしこと、其デーンズは難を避けて、潜伏するの間、多少の艱難を忍べしこととを述べ、其畧に云ふ、一日寒氣殊に凜冽たり従臣等皆な山林に入て、獸を獵り、鳥を射る王、后と獨り止まる、王常に讀書を好み少暇あれば輒ち讀む、此日従臣等已ふ山林よ去て王無事なりうば、例の如く書よ對して之を閱す、后エルスウヰルも亦た家事を執る、偶々雲水の僧あり、門を叩て食を求む王、后を呼び彼僧に食を與へし、后は只一箇の麵包を得て之を王に示す、蓋し後の意其食糧に乏くして、若し従臣等獲物なくして歸らば、彼等に食はしむるに物なからんことを諷するなり王、后の意を知ると雖ども、其志と動りさぞ、欣然と其半を割て彼僧に與ふ、是に於て王、施仁克己の事をなせしと以て、中心私かに喜悅し后を慰撫して、曰く基督既に五箇の麵包と二尾の魚を以て、五千人に飽しむ、彼れ（即ち基督を指す）若し我事を悦ばば、必ら其殘餘の麵包を以て亦た吾が従臣をも飽しむべし（此經文を引て以て后を慰るなり）既にして王復た、書に對す暫らくよして、従臣等多くの獲物を荷ふて歸る、王の施仁即ち其陽報を得て、再び食に乏きこと

なかりいと云ふ

生死無常にして、電光石火の如く、因果歴然として影の形に隨ふ様者有る、因果の道理の、決して、之と昧ます事の出來ん、金剛經に「欲知過去因當觀現在果」欲知未來果當觀現在因」とある通り、總じて、因果の道理は譬へて申すと、麥の種と藎は麥と得るが如く、茄子の苗を植れば茄子を得るが如く、業因あれば善惡共に其報を受ぬと、云ふ事は無い、故に我れ等互に、善果報を得やうと、欲せば必らず善業因を修するより外に手段の無い、其譯に、前に述べる因縁の、道理を考へて、見ても能く之を知る事が、出來るで有りませんか、彼れ外道を崇拜する者と雖も、因果の道理を信する事深う置けばこそ、彼れの陰徳を施して陽報を得たので有る、我れ等因縁正法を、奉持する者、ドウして彼れよ劣るやうで相濟みませう

●一坪の畑にても、前年より二倍の收納を多く見んと欲せば、其欲する丈の勞力を爲さざる可らず（ホレーヌケ
リレイ氏）

○第五章 因果應報 (其二) ○積因得果

○卑賤より起りて大名を擧たる人物 王侯將相寧ろ種あらんとは、眞に格言なり古今英雄豪傑の起りたる、其跡に就て之を徴するに其種族の如何の固より、問ふ處にあらざ、今試みに西洋諸邦の卑賤より起りて、大名を得たる人物を精査するに、羅馬法王となりし、グレゴレイ第七の大工の子なり、又全法王アドリアン第六の和蘭水夫の子なり、金石學士ホイーの織物師の子なり、器械學士ホーテフェレの焼麵屋の子なり、其他傳道士にして、詩人たるシェレミイ裁判官の有名なる、テンテルデン美術學士の巨伯トルチル等の諸氏の散髮師の子なり、斯く何れも卑賤より起りて、遂に能く大名を得るに至りし、所以の者の實に克己の氣象を策勵したるの、功に依らざらざる也、

佛教の本來平等無差別と談せ然れ共、苟も形器を爲す限りの、法報應の三身を立んければ成らん、此三身の言葉を換えて申すと、体相用の三大と云ふのぢや、譬へば法身とい、本來平等無差別にして、自ら形と現せき力を出さんければ共、遍く充ち満ちて洪大な力の有る者を云ふのぢや、報身とい報ふる身で、釋尊が出家修行なされた上で悟

積 因 得 果

りを御開き被成た様な者を云ひ、應身とは應用無碍自由自在にして、種々の作用を爲し、色々に効用を現はせし事ぢや、釋尊が我れ等を濟度し玉ふ爲めに、出世被成たのは即ち應身と申すので有る、シテ見ると我れくの肉身を成立した處の、即ち法身と申す者で利巧も馬鹿も金持も貧乏も悉く皆な平等ぢやが、天子となり、大臣となり、學者となり、商人となり、車夫馬丁となり、乞食非人となるに至るの、因縁の依正する處で、其果報が違ふのぢやが、之を報身と云ふので有る、ソウして、天子、大臣、學者、商人其他の人に至る迄、何れも自分の職業を致して居るの、即ち應身と申す者ぢや、此應身の中にも前に申す卑賤より起りて大名を擧た人物の如きの、佛の應身、菩薩の化現と申す可き者で有る、其然る譯の、彼の人物の畜に大名を顯はせし斗りて無く、實際利物度生の効績を世に遺し、後世其功德を被ること、誠に多いので御座らんか、左れば各位も法報應三身の道理を考へ、常に自分の光明を照し、二利圓滿する事が肝要で有る、

●被覆を身に纏ふ人も勤勉すれば頭に月桂冠を戴くに至るべし(スマイルズ氏)

○第五章 因果應報 (其三) ○惑業薰習

○著作者の奇癖 歐米諸邦に有名なる著作者の奇癖を茲に掲げんに、フヰマロサ氏は自分の凭れる、机の傍に人ありて談話し、つゝ筆を取るに、あらざれば名句妙章を成す能はざ、スポンチニー氏の暗き所にあらざれば傑作を成す能はざ、アマム氏は床に就かざれば珠玉の文を作る、能はざ、サリエリーハ氏の菓物を、嗜り乍ら、往還と徜徉せざれば、壯麗偉麗の大作と成す能はざ、サチニー氏は猫兒を机上に、置き戯れしむるにあらざれば、名文を草する能はずグラツク氏の太陽に躰を曝さざれば、趣向浮バき、ドニセツチー氏は勝景佳風を愛し、山靈水伯の明媚なる絶境を遊覽し、一旦其場に睡臥したる上に非されば、錦繡の文章を作る能はざ、メールービル氏の大風雨の時に、檐下にイみ文案するの、癖あり、ハンデル氏の寺院の境内を散步し、乍ら工夫と凝らすの癖あり、夫れ此の如く著作者の奇癖は、千差萬別なり、豈に奇の又奇ならざや、

習 薰 業 惑

「人々に、一ツの癖あり、あるものを。我れに評せ、吸島の道」と、古人の歌にも詠れ通り、如何なる人にも必らざ、癖と云ふ者あり有るものぢや、シテ其癖と云ふ者の、佛教で申すと無明の一ツで、無明に習氣の無明と、根本の無明との、二種の差排がある、而して、此習氣の無明中に、罪の習氣と業の習氣との、二種の區別がある、罪の習氣とい、難多尊者の、貪習、舍利弗尊者の、嗔習、畢陵伽婆蹉の、慢習などを申し、業の習氣とい、憍梵波提の、食物を牛の如く啣噬し、迦葉尊者の、琴音を聞き蹈舞せし杯の、皆是れ前世に造作した罪業の、薰習より、遂に今生に及ばした者で有る、華嚴經の離世間品には、菩薩に十種の善習氣ある事と説きて有るが、我れ等の如き凡夫の淺ましき、善の薰習として、甚だ乏しく、唯た惡習のみ多き仕合せなるに、加ふるに、今生の信仰及善根をして、乏しめしめたならば、何れの日か能く出離解脱する時が有りませう、

●祖先の情愔は遺傳に属し、外界の刺衝より形質を變化するを應化と謂ふ、而して縱へ幾數年に渉るも、生物は此定則を洩れざる者なり(ダルウヤン氏)

○第五章 因果應報 (其四) ○惑成業體

○人間の先祖　タルウキン氏が人間の先祖は、猿より來れる者なりとの説を唱へたるより、奇を好むの徒は争ふて之を傳ゆる事となせたるが、米國のケルリ氏と云ふ博士の、更に新奇なる人間の先祖を發見したり、同氏の説に云ふ各國無數の人類の先祖の由來の姑く置き、歐洲北部の人民の遠祖は、全く猿にのあらず、蓋し氷洋の熊なりと、固より同氏とても他の學者と同一く先づ其説を、一個の假定より起す者ながら、其推量する處にては、太古氷洋の熊ありて、偶然氷塊に乗りて南に下り、暖帶の地に、漂着しけるを、氷塊は忽ち解けて、再び還るに山なかりし、其後年を経るに従ふて、暖帶氣候の効は漸く新渡來の熊の身上に見られ、其いらたちたる毛も、次第に柔らぎ、竟に全く失せ去り何時う後脚にてのみ歩むを習ひ、前脚次第に用ひ習ひて、遂に腕となり、手となるに至れり、現に今日の熊にても、其嗜む處は他の四足獸類に異なり、肉を食ひ穀物菓物を食ひ、且つ蜜を嗜み、蒸耐類を嗜む等、人間に似たる所少しとせき、云々と然るに同氏の説の甚ぶ簡短にして、他の人祖説、即ち猿を以て祖とするタルウキン氏之説の如きも、總て

排撃せざると以て之を觀れば、同氏の意見にては或は現に無數の人類あるが如く、各種の獸より出たるとの事にや、是も亦以て稍々今日各人種の互ひに、相寇讎視するの由來を解するに足らんかと紐育「タイムス」新聞を見へたり

タルウキン氏が人間の先祖は猿で有ると云ふ説を唱へ出したは、既に久しき事で、大方の學者の説も、爾來概ねメ氏の説と同様に成りて居た所が、今ケルリ博士の世界最多數の人類の先祖は、兎も角も、歐洲北部に在る、人民の、祖先は猿にのあらず全く熊ぢやと云ふの説甚だ嶄新な説で有る、今夫れ進化學の道理に依れば、吾人上等動物の、下等動物より進化し、有機体は、無機体より進化し來れる者とす、之を詳言すれば、則ち人間は畜生と、其祖先を同ふし、畜生は草木杯の、植物と其元種を同ふする者と云ふのぢや、之を要するに、劣等の物より、優等の物に進化すると云ふのが、即ち進化學の理法ぢやから、同劣等動物即ち、畜生中に於ても、猿は牛馬犬猫杯より大に智識動作の優等な所が有る、ソコで其猿より一層優等動物に位する吾人の祖先を猿ぢやと、メ氏の唱へ出したので有る、勿論メ氏は其説を證據立つるに、猿と人間と智識

動作の同トきのみならず、相貌骨格筋絡の組織等に至るまで、人間と猿と毫も亦異なる處なき説を以て一たれ共、ケルリ博士の説の如く、歐洲北部に在る人間の先祖を熊なりとすれば、或ハメ氏の説より一層我佛教の眞理と証明するに力有るやうに思はる、何となればメ氏の人間の先祖ハ猿なりと云ふ説すら我佛教の因果説を証明する力有るもえ、況して、ケ氏の説の通り、歐洲北部に在る人間の祖先ハ熊と爲し、以て世界に無数の人種ある如く云ふに至りてハ、益々大に我佛教の因果説の眞理なる事を擴張するに力有る事を知るに足るでハ御座らんか、其然る譯ハ同じ畜生中に於ても、牛より人間に進化し、或ハ馬より人間に進化し、或ハ犬より或ハ猫より人間に進化し來れる者ないとい申せん、是れ唯々過去因果の果報が、然るを致すのであるのぢやから、強かち人間の先祖ハ唯一の猿で、有ると斗ハリハ確定し、難ハ、左れば我れ等が斯く人間ハ生を受けて居ても、惡因縁を修すれば或ハ人間の業力相尽きて、畜生、修羅、餓鬼の身を感じるに至る事も亦無いとい申せまい、故に善因縁を修して以て畜生、修羅、餓鬼の身を感じぬ様に信心奉行が専一で御座る

●総じて、信仰力の強き者は、永生を得べし(ヘラクリタス氏)

○第五章 因果應報 (其五) ○因縁轉環

○二頭四手一腹二足の人 伊太里セチワよりポール、ベルト氏が「ラチーチニア」新聞の記者に寄せたる、二葉の寫眞ハ實に異形の人体にて、千八百七十七年タリンに生て今茲正に五歳なるが、今猶生活し居と云、其人相を記せば、二頭四手二胸一腹二足の異形なり、監定せし處にてハ、肺臟四個、心臓二個、胃腑二個と有し、他の微少なる臟腑の上部の必ず二重なるべしと云ふ、全く二個人の働きて右足の右部の指揮に従ひ、左足の左部の命に背かき、又左右各体の感覺ハ其右ハ右と相感し、左ハ左と感と同ふせり、此二個人洗禮を受けて各ジーン、ジャツケーの名を冒せり、只ジャツケーの方ハ足稍や太きまでにて、各一様に生育せり才智ハ平人に異ならず、人に答ふるに、佛、伊、日三國の語を以てし、性質穩和にして毎に間なれハ、床に倚り又ハ養父の膝より上りて、禮拜を共にせり、生來未ダ曾て病に罹りしこともなりと、

此異形の人體を受るも、其本源を質す時、唯其れ因果の轉環して然るを致せし者で有る、今夫れ古書を按ずるに、昔し鯨が黃熊となり、杜宇が、鷓鴣となり、褒君が龍となり、牛哀が虎となり、君子鵠となり、小人猿となりしと云ふも、皆な是れ佛教の謂ゆる因果の所作に依て斯く異形を受るに至りたのぢや、何と因果の所作、恐る可く愼しむ可き事での御座らんか、横目堅鼻、二頭二手兩足の吾人の正身で有るのに、二頭四手一腹二足の異形との、何と醜態の極での無いか、是れと人間中の癡疾と謂ふも亦決して過言での有るまい、併し乍ら因果の道理の然らしむる處の誠に致し方が無い、左をば、我れ等お互ひの、前に申す因縁と手本として相成る可く、善事を爲し以て結構な、果報を求る心掛けが、無くての相成らん、

●父母の心に不潔あれば、其得る處の兒も亦た不潔なり(レウエイ氏)

○第五章 因果應報 (其六) ○畜生簡擇

○犬の學校 米國紐育にの犬を教ゆる數多の學校あり、ワン、ワン、チン、チン、お預け等

の、初歩より、段々進みての、行儀作法及び獵場に於て、鳥の透出一方、獸の攻撃法、主人が命令れ聞き分け方、等に至るまで、日々數十頭れ犬生徒を、集めて叮嚀深切に、教授すると云ふ、其教授料の、多寡高低固より一様ならぬと、其最も高さの三ヶ月間百五十弗なりと、聞けば一ヶ月五十弗位なり、下等社會のものに至ると、一ヶ月間數拾錢の授業料さへ辨ざる能はせして、其子弟を學校に入れせみすく文盲の淵に沈むるの、紐育府の者に數へ尽されぬほど多きことなるに、夫れに引換へ、大家豪商の毎月五十弗の授業料を吝まざ、其愛犬を入學せしむる者續々踵を接すと云ふ、左れば、心ある者の、寧ろ富家の犬と爲るも、貧家の子弟たること勿れと、嘆息するも、道理なりと申すべし

今や世上の文化燦爛として、人目を眩す有様を現ト、下等動物の犬さへ此の如く行儀作法を、學ぶ世の中なるに、上等動物に位する、我れ等、人間學問として智識を磨ぐ事無くての何を以てか彼犬に對するの顔が有りませうぞ、殊に身を立て徳と修め、現在未來に最大の關係ある、佛教の道理を知り明らかに置んでの、何と以て我れ等、畢生の目的に契へたりと申せませう、夫れ薰陶の功と積む時、彼犬すら行儀作法を、覺

えさせる事が出来るのに、靈智靈能を具する我れ等が最勝功德と、殊大善根とを積み行きて、何で佛に成れぬ、理屈が有りませうぞ

●習性ほど強きものはなく、誠實ほど堅きものはない(セステ、フラン氏)

○第六章 心用分限 (其一) ○夢中意識

○夢中に於ける智力の働き 人の智力は、まづ夢中に奇功を現はすものとあるものにて、人或は睡眠中も、豫て苦心し居れる、詩作文章を成就し、若くは難問を解き得ることありとの話は、支那日本の文學士中にも、往々之れるることなるが、西洋の文學者及び心理學者の説く所に、亦其例多く、有名なる學者にして、自ら此の境遇に出逢へる者も少からず、カバコスカバコスの言にフランクリン氏フランクリン氏は其腦漿を疾ましめたる、大難問に就て、數々夢の助力を得たるとありと語れりと、又コンヤルラク氏コンヤルラク氏の文章を草するの際まづ、我が意を満たざる章句を、其儘に打棄てをきて、夢中にて右の不完全なる、章句の趣向をば、立派に紐立て得たることありと、の旨を自記せり又ゾオルデル氏ゾオルデル氏は睡眠中に、詩を作

り覺ての後迄も明かに之を記憶し居たることありと云ふ、ユーリツツ氏ユーリツツ氏は一夜夢中に長詩を作り、覺ての後も尙之と記憶し居たりしかば、直に筆を執て之れを筆記し居たりしに偶々、急用出來して外出し、一時間の後家に歸りて、前句の續きと認めんとせしがども、最早之を忘れて、再び想ひ出すことを得ざりしと云ふ、サー、トーマス、ブローン氏サー、トーマス、ブローン氏も我が智力は働きは、寧ろ睡眠中に盛なれば、若し成ることならば、夢中に學を講せんことを望ましけれと云へり、

夢の世に夢のまかたる夢心。かもふも夢の夢のさめなで」と、古人の詠れし歌の如く、凡そ夢と申すもの、如幻仮有の者も違ひ無いけれ共、其夢を見て居るぢちの事柄は、其夢さめた後までも相續する場合なきにわらすとすれば、一概に夢の如幻仮有の者ぢちとは斷言致し兼ねる譯で有る、殊に夢中唯た過去に屬したる事物と追想する斗りならば、未だしもの事ぢちが、左様で無くして、其智識の働きは、平素と少しも異なりた處が無いとしたならば、如幻仮有れ夢も、亦た實我實法と申さねば、相成るまじ、古來話一の上に傳へる華胥の夢や、羅浮山中の夢杯は、其境を経験した夢で、此れ等

は過去の事物を追想した夢で、有らうから、コンナ夢の、誰しも能く見る通例の夢ぢやが、之に反して夢中に、詩歌文章を成就し、或は難問を解き得る杯の智力の働きの、何と、各位不思議で御座らんか、現に我國に於ても後醍醐帝の夢の河内に楠中尉を得、周王の夢は傳説に傳説と得るの類、最も夢の虚ならぬ事と、証するに足りるでは無いか、佛教の上では夢の事に就て、種々の差排があるが、先づ善見律は夢の原因を四種に類別して有る、第一に天人の與ふるあり、第二に四大不和合より結ぶあり、第三に先きに見る故に見る、第四に想心の故に見ると偕此第一の夢は、心理學者の偶然と稱する夢に當り、第二の夢は心理學、生理學者の時候の寒暖及身體の位置に因て見る夢に當り、第三の夢は心理學者の經驗に由て見る夢に當り、第四の夢は心理學者の想像に依て見る夢に當る、總じて夢は、經驗と想像とを、離れて之ある可き筈なれば、夢中み於る智識の働きの有る事は、誠に恐る可き者で有る、夢の働きの既に恐る可き者ありとせば、覺の働きの又夢の働きのよりも其一層優る可き者ある事は毫も亦疑ふ迄も無い事ぢや、左れば我れ等、夢界の凡俗は三界の大夢を覺破し玉ぬ、大覺世尊の佛勅を奉戴し夢の世界より、悟りの世界に到達するの道を求めねば相成らん筈ぢや

●夢は會て見聞せし萬物の記憶帳なり(カックラン氏)

○第六章 心用分限 (其二) ○唯心所變

○幽靈の話 アガシズ氏は北米合衆國にて動物學者中の巨擘と稱せられし、博士なり、氏嘗て瀛車中にて、鬼神幽冥の説を唱ふる有名なるホーム氏と邂逅し、談話せし時、ホーム氏曰く理學者流は幽冥の事とし云へは、少しも其現象を考究せず、實に偏なると云べし、アガシズ氏答て曰く、余の凡そ學問の進歩に關する事なせば、如何なるものとても考究せざるはなし、且つ予等の集會に於て現出する奇怪の現象を見て、其理を推究せん事こそ望まじけき、ホーム氏曰く、左様な事ば今夕余か家に來臨あれ、鬼手の顯出するを御覽に入れん、アガルス氏曰く、其は實に面白き事なり、希くは鬼手の出現するを見せ給へ、然れ共、愚論にては其鬼手こそ、恐らくは人の手にして、之に磨するに燐素を以てせしなるべけれ、去れども猶は深遠の理ありて、教諭せらるゝなれば幸甚、只余が希

唯心所變

ふ處は、小刀を以て其鬼手てふものを刺さしめられんことを、若し其手にして眞に鬼神の手ならしめんには、少しも傷つくことなかるべし、若し人の手ならしめんには、其手の所有主こそ實に傷ましけれど、微笑して云はれければ、ホーム氏の眞面にて、否々その試験の止たまへ、斯も信向少なき人の眼前に、鬼手は現出すべからすと云へたりと幽霊とは如何なる者かと云ふに、先づ俱舎頌疏に就て見ると、人の死したるや、即ち中有の陰と成る、中有の色は微細にして、凡夫の眼に見ゆ可き者ぢや無い、況て極善極悪の人の、中有を経すに善悪の處に、落着するから幽霊など云へる者ある可き譯の無い、併し乍ら、人の死せんとする時に、父母妻子を眷慕し、或は常に、怨恨ある者に、悲心を遺し、心識將さに後有に移らんとするに當り、常に思ひを寄する、處に、忘影を幻出する、事が有る、之を指して、俗に幽霊と申すのぢやけれども、此外に幽霊らしき者、又其幽霊と申す者は、彼の柳下孤塚瘦姿青顔手を垂と火を燃して幻出する様な者の有る可き筈は無い、若し強て幽霊の名を下す可き者を、求めんと欲せば、其身の安心に決定なき脚跟のグラ／＼然たる者こそ、是を幽霊と申す可きか、菅茶山翁詩の

り、誦す可し「枯顔瘦骨髮飄蕭、昨日春容影亦嬌、今古人間都畏鬼、誰知坐者是眞妖」と左をば、幽霊は死んだ、人に斗り有るので無くて、現在生きて居る者でも、安心決定して居らん人の、何をも是を幽霊と申して差支の御座るまい、之と要するに、幽霊と成るも、又幽霊と見るも、是を皆な唯心の上の所變で有るゆゑ、此心を慥かに持つが専一ぢや

●一人の悪人あれば、必らず之に感服する一段の悪人あり、予は幽霊を見たりと云へる悪人あれば、必らず之を事實と信する一段の悪人ある者なり、人間社會の事皆を此の如し(ヘーコン氏)

○第六章 心用分限 (其三) ○能所二法

○自動 米國費拉德府西チェストル區の市民は、此頃同區内に奇異の現象を生したるを見て、狂奔すること一方ならず、學者輩は亦其理を講究せんとて平常の課業を抛ちしほどなり、其現象とは東門街のトーマス、チ、スミス氏が倉庫に、偶然と量秤を附したる、一小棍の震動を始めて止まざる一事なり、扱如何に此不思議を、生せいと云はハスミス

第六章 心用分限

能 所 二 法

の方に雇はるゝ者が、煙草箱を積立んとて、其處にありし二個の量秤を、何心なく取除けしに、凡そ一時間を経て不圖、量秤の一端に附したる、棍棒の時を正しく、震動を始めしを見て、コハ妙なりと訝りつ、數分時間、脇眼も觸らざ、見て、ありしに、宛から時計の錘の、動くに均しく一蹶一動、毫末の差を生ぜざるのみか、何時までも、止まることなきにぞ、驚き呆れて人々に斯くと告げしに、物珍らしとて群來る者、百餘人、日没鎖店の頃に至るも、尙ほ止まらざ大方の夜中に止むべしと、之を鎖して、其儘に打置き、翌朝見れば前日に異ならざ、矢張り震動して止まざるにぞ、遂に全府内を驚かそに至れり、最初より此時まで、測るに凡六十八時間なるに、尙ほ何時までも、震動して止まざるの状あれば、益々不思議なりとせざるいなし、棍棒の僅か尺未満のものなれども、秤量の端に正しく、附着して、寸毫の狂ひなく、南北に動きて、一分時間に八十四打する様、時計の巧たりに似、此秤量の數年スミス方にて使用せし品にて、舊の位地より少しく北西の方に移したる迄なり、震動の初日は、人皆スミス等が云ふ處を信せず、大方の仕掛の巧ありて、戯れに騙瞞することならんと、取合はざりしも、連日止むの期なければ、如何にも異

なり、奇なりとて、頻りに其理を推すと雖も、感服せるの説もなく、唯飛散せし電氣の作用に、依ると云ぬの説は、或の實に近きが如し、その故の西聯合、電氣會社の分局の、スミスが倉庫の上層にあるを以て、電氣線の架設しあればなり、然れども、數多の學者が數時見分して、各々考究せし處を記し、之を照比したれども、其說一轍に歸せざりしと云ふ、理外の理ともいふべき者か

我佛敎に能所二法の所談が有るが、此能どの自を指し、所どの他を指す、故に、能見と所見との、差別に依て、其物を見るにも大層な違ひが有る、能見の即ち自分より見る方に屬し、所見は即ち他人より見らるゝ方に屬す、而して見を司とる眼の五根の一に屬し、其眼に映る所の事物の境に屬す、譬へば眼にて花を見るは眼の根を以て花の境と申すものぢや、シテ眼で花を見て、之を花ぢやと知るを、眼識と云ひ、又知覺の性と云ふ、斯く識心の差排を明らにして、以て一切の事物に接すれば、誠に法界は洞然として、少しも暗い處の無いから、不思議や又の理外の理など有る可也筈の無い譯ぢや、左れば前云ふ、スミス氏方の秤量の一端に、附したる棍棒の自働すると云へる

心 用 分 限

のも、又或は、能見の方が動くので、其根棒が動く様に見へるのうも知を無い、譬へて云ふと、恰も山に沿ふた海河を船に乗じて渡るとき、舟に乗りて居て乍ら自分の動くに心附き、反て眼で見る處の山の方が動く様に思はるゝのと同ト事である、故に此心用分限を究量するに、佛法所詮の緊要な處で御座るのら、各位も能く此處を究量するゝが宜しう御座る

●精神と雨傘とは、十分に之を廣げて使用するに利あり、否りされは、塵穢り芥に汚れて、用を爲さざるに至る
 へー(フナツセイ氏)

○第七章 慈悲道德 (其一) ○誠偽虚眞

○男女徳義心の検査 米國ポストン府の或る慈善家の、男女徳義心の多寡大小を試験せんとして、十二個の安價なる蝙蝠傘を買取り其柄は白金の板を填めて、其住所姓名及用濟みの後、之を返送せられ度き旨を、彫刻し雨天を見計り市街に出て、傘を所持せぬ婦人に逢函毎に、之を貸與へたり、其後一週間内に、蝙蝠傘は悉く返り來り紛失したる

の、唯だ一本、ありしに過ぎざりしが、此れ逆も其借主の圖らずも盜難に逢ふて持去られし由にて、其代價を辨償と可き旨の書面を送り越せり、又其次の降雨の日に、右の蝙蝠傘を十二名の男子に、貸與へたるに、十一本の紛失し、其返りたるの、唯だ一本ありしのみ、此れ逆も借たる人の、返せるにあらで、慈善家の友人が或る寺院に於て祝宴を開きし時、來會者の一人が其傘を所持せるを見て、取り返し來れる者なりと云へり

此因縁を按するに、元來男の、徳義心薄くして、女の徳義心厚い様お思はるゝが、決して、一概に男女の別を以て、徳義心は厚薄の差が有る譯では、無い、併し乍ら男は多く氣象快活で小事に頼着せぬ方ぢやが、之に反して、女は柔弱で小事も之を等閑に致さぬ、性質で有るので、女も借た物杯の氣丁面に之を返へすも、之に反して、男は兎角等閑にして置く方が多い、故に男の他より物を借り、悪る氣の有る處から自分の物に取り込む了簡で、之を返へさぬので無くして、言はば投げ遣りにして返へす事を忘れて居る者も有るはぢやから、之を一瞥して男は徳義心に薄いが、女は徳義心に厚いと斷言出來ん、之を要するに、道義の人間の價標で有る、吾人此心ありて樂果を

感じ、此心なくしての苦報を受く、故に吾人の徳義を最も常に重んぢなければ、相成るま
い、佛の嘗て「佛所游履國邑丘聚靡不蒙化天下和順日月清明風雨以時災厲不起國農民
安兵戈無用崇徳興仁務修禮讓」と、何と各位徳義の勢力と盛んな者で有りますまいの

●眞理と道徳とは、世界に在りて、二個の最も力ある者なり、此二者相一致して進む時は、容易に之に抵抗し得
る者ありず(ラルフ、ゴドウカルス氏)

○第七章 慈悲道徳 (其二) ○崇徳興仁

○徳育の必要 哲學者を以て有名なるカント氏の曰く、徳育の人間に最も必要なり、元
來人性には道徳の完全ならん事を望むの心あり、此心あるを以て見れば、畢竟此完全の
望みを達する事を得べき者なり、而して此望みを達せんが爲めには、神に近づく事も、
天啓と信する事も無用なり、人間の天然に善を知る故に善を爲し待べし、然るを神の力
を頼みて善を爲すが如き、實に不完全なる道徳なり、殊に未來の爲めに善を爲すが如
きは、最も甚くしき不徳義なり、抑も眞正の道徳は、道理に依て行はる可き者にして、人

間の義務より起る可き者とす、故に人々として自ら善を爲し、道徳を完全にするの義務
ある事を知らしむるは、唯だ、教育の方法に依て専ら徳育を圖るにあらずと、

此カント氏の説中、未來の爲めに善を成し、或は善を爲すに神に近づくに及ばんと云
ふ語氣あるは、ツマリ氏の哲學者なるが故に、宗教を排斥するの極、此言を爲すに至
りた者で有らうから、徳育は唯だ、教育の力で之を完成するに足れりと思へるも尤も
千万で有る、然れ共、徳育は教育の力より之を完成する事は出来ん者ぢや、其譯は、
教育の、智力的、體力的に、最も之を育成する力あるに違ひ無いが、其徳育と完成
するの力あるのは、教育より宗教の力大に優る者が有る、善し、教育は徳育を完成す
るに多少の力あきあらずとした處が、如何せん、教育は唯だ現世の事に就て人々善
事を爲すの緊要ある次第を教ふるに過ぎん者で有るが、宗教は、現世より無く、未
來の事に涉りて迄も、道徳を完全にする必要を説き聞かせるのぢやから、人々の徳育
を完成するに、は教育の力よりも、宗教の力が大に超越して居ると云ふ所以で有る、
左れば徳育は、教育よりも宗教の方が、勝れて居るから、成る可く、教育上の事に宗教

者が關係して、宗教分子と、教育上に注入するのが肝要で有る、顧みて我國欽明天皇の時代佛教が始めて、三韓より渡來してのらと云ふ者と、我國教育の事は多く僧侶が之と掌りて居たのぢや、元來我國に、神道と申す者が有ると、國民の大半は皆之を尊崇して居つたスルト。應神天皇の時代に、儒道が輸入して、士人の多く此教訓を受けて居た、簡様な有様ぢやから、佛教は傳來しては見た者の、弘通抄々敷くは往うなんぞ、處が、聖德太子と云ふ賢明な御方が、佛法を御信仰遊ばされてから、後の代々の天子様も之を御信仰成さるゝやうに相成り、當時國家の元勳藤原鎌足公の如きは佛法に深く歸依し嫡子〔定憲〕を出家させた位で有る、後ち持統天皇、聖武天皇などは、大に佛法を尊崇し玉ひ、諸道に國分寺と云ふ大伽藍を建立し以て、鎮護國家の道場と爲された、頃は道昭行基など云へる名僧が出て、日本の神國ぢやから、佛法斗りで往うん、神、佛、二途一致主義で弘通し無れば往かんと云ふ處から、本地垂迹の説を立て、諸國の大社に、神宮寺を建立し、或は世間に向つて、深山を開き、道路を拵へ、橋を掛け、港を築き、井を堀り、陶器を製し抔して、大に日本の開明を導き、次に傳教、弘法

など云ふ高僧が出たまひ、文學、音韻、修身、道徳の事を、人々に向つて説き知らしめられた、サッ斯う成ると、世間の子弟は、悉く寺に入て教育を受けるやうに成つた、是れ今日尙や寺子の、登山抔の、登山抔云ふ言葉が殘つて居る所以で有る、現に源滿仲が子の美女丸の、延暦寺で學問を爲し、源義經は鞍馬寺で修業を爲し、菅相公の天台座主、尊意阿闍梨を師檀と爲したと云ふからは、佛法が當時教育力を盡して、徳育を完成して居つた事は、是れで誠に明らので有る、シテ其教育の法を申せば、鎌倉以前は經書を教ふるに、漢唐の註を用ひ、其後の宋學が輸入し、玄慈和尙抔は朱子の新註を以て教へて居たけれ共、當時の禪僧も多く、宋學を用ひて居た、此れ等の人々は倫理、道徳を因縁業報の説の、折衷し、手近く教へ導いたのら、其薰陶を受けた子弟は智、徳、慧共に具りた、完全な教育を受け、完全な人物に成れたので有る、シテ見ると、徳育は教育の力よりも、宗教の力の方が能く之を完成するでは御座らんか、教育上より養成する徳義は勳もすれば已を欺く事が有るけれ共、宗教上より涵養する道徳は、因縁業報が恐ろしいから、能く已に克つの氣象を具す、故に、教育上の事と、宗教上の事とは、全く區別

るも、宗教者が教育上に關係するは、大ふ世、出世に取りて利益のある事である。

●世には 城壁、官省、博物館、氣象臺等未だ備りずして、之を知らざる者あれども、宗教信仰の思想なき民は、世界中に之を看出すこと能はず(アルーター氏)

○第七章 慈悲道徳 (其二) ○忠信極濟

○軍馬の忠節 千八百十二年(我文化九年に當る)佛蘭西、兵を解て魯西亞より歸陣す、侍衛の卒お甚ゞ其馬を愛する者あり、戦ひに臨み常に身を以て馬を救ふこと屢々なり、嘗て其馬に云て曰く、我れ汝と共に佛蘭西に還るべし、若し然る能はざれば共に魯西亞に死すべし、馬亦た其意を解するに似たと、一日兵行中、其本隊に後れ、大雪を衝て獨り其愛馬に伴ひる、偶々馬足を失して卒、地に落る時誤て膝を挫き、再び鞍に上るよと能はざ、堆雪の上に俯して徒に死を待つのみ、馬、鞍高きが故に主の上ること能はざるを知り、自ら膝を屈めて主の傍らに跪まつき、鞍を卑ふして上るに便ならしむ、之に依て、卒痛みを忍んで鞍に攀ぢ上ることを得たり、馬の靜かに身を起し吾主を扶けて、遂に其本隊に逢

し、爰に傷を療治せしめしと云ふ、

夫れ馬ですら、正見に住して居る者此の通り、主人の爲めに難を救ふて天晴れ忠節を盡すでは御座らんか、我れ等の如き萬物の最靈とも言ふ人間にして、如何で此馬にごも劣る様な行ひをした時には、何と馬に對して大に恥入る次第ぢや有るまいの、馬に對し恥入る斗りか我れ等、若し忠信極濟の心が有らんけりやア何で心垢と洗除する事が出来やうぞ、心垢の洗濯が出来んけりやア逆も正見に住し平等一味の慈悲心を以て自他の利益を計る事が出来ません、此事若し出来すば如何して安心が得られませうぞ、抑も忠信極濟の心なき人は、我れは我れ、他人は他人、他人の難儀なら千万年も尙やコラユルと云ふ了簡ぢやから、一寸の間も唯ゞ自分の都合よき事斗り考へて居て、或時は誠偽りを言ひ、或時の騙取偷盜を爲し兎角不正直な行作斗り致す者ぢやが、小水常に流れて能く石を穿つと、佛の嘗て仰せられた通り、其不正直の行作が積み重ると、必らず其惡報が有るお違ひ無いゆえ、大に之を戒めねば成りません、夫れに付ても、忠信極濟の心を以て實地に之れを行ふことが佛祖道徳の本旨である

●他人に忠よりざる者は、愛の淋き人なり(シヤム、マツチ氏)

○第八章 法爾本然 (其一) ○能見不動

○微弱の信心 マニラ嶋に「ヘースチングス」と稱する一の人種あり、此人種多く「マツトレー」と云へる神を信仰し現在の禍福未來の賞罰を擧て、一切其神の之を制裁する處と思へるが故に、其神を崇拜する事は言語に絶せり、然るに「ヘースチングス」人種は「マツトレー」神を信仰するの深き、彼れが如き者あるにも拘りらば、時々此人種は神が果して祈願を成就せしむるや否やを、験めさんが爲めに、手足を湯火に接觸して以て、手足を焼傷し糜爛せしむる事を、毫も亦た意とせざと云ふ、左れば此人種の「マツトレー」神を信仰しつゝ、疑心を中心に抱ける者と謂ふ可き也。

何と各位、此因縁を聽き、ドウ思はるか、抑も信心の誠を表現する意にして、少しでも疑心がありては信心とは申せん、若し信心するも疑心が起る位なり、夫れはマメ信

能 見 不 動

心が足りんから疑心が起るのぢやに依て、斯る場合に誠心に鞭打ちて信心をしさへすれば疑心はイッカ晴れ去りて光風霽月の境界に成れるのぢやからアタラ手足を湯火に接觸し、焼傷して、苦痛するを承知で、願験めしを致さんでも宜しい譯で有るまいか総じて神佛の誠心を嘉みし玉ふものゆへ此誠心を表現するには信心が強く無くてはイカンのぢや、若し信心が弱いと疑心が起る、疑心を中心に抱きつゝ、信心をすりや、何程信心しても、神佛の利益を御與へ被下る等の無い、凡そ信心の眞理は、法界海攝一塵々々遍法界海微塵々々重々事々無礙法界と申して、誠心を神佛に捧けて、餘念なければ、自身と法界と神佛との平等不二ぢやから、其信心の利益も顯はるゝのぢやけれ共、若し或は狼りに、他の浮言を信じ人の談話を聞き、又自ら疑心を起して色々に思案を變へヤレ耶蘇教を、信トやウカイヤ神道を奉玄やうか、又の佛教に歸依して、見やうかと、心に迷ひ、甚だしきに至りては、一旦耶蘇教や、神道や佛教を、信仰した、人が已れの斯く之を、信仰する者の、眞個に神の恵みに、預る事が出来やうか、高天ヶ原へ、往く事が、叶ふか佛果を得るで、有らうかとの、疑ひを起す者の如きり、

其安心の不決定な事は、前に申した、「ヘイスチング」人種の、所爲と少しも、異なりた處は無い、

●我羅馬をして此の如く、文物燦爛たるに至らしめし者は、我祖先の計畫せし偉業なり、故に我れ等子孫は、之を保存して以て、報本反始の禮を彰表せざるを得ず（コーテンク氏）

○第八章 法爾本然（其二） ○化土相續

○國粹保存 獨乙皇帝ウヰリアム第一世は、不世出の明主に在らせられし事は、歴史に存するを見て、世人の能く之と知る處とす、ウヰリアム皇帝の初め即位し玉へし頃は、万般の制度未だ緒に就かき、随つて當時其内閣には、大臣の倚る可き完全の椅子の備ひ無く、僅に單純簡雜なる製造の腰掛け臺と以て間に合ひせ居れる有様なり、左れば皇帝偶々内閣に臨御わらせらるゝも、皇帝に進め奉る可き椅子なければ、矢張り大臣と、同しき、腰掛け臺を進め奉れり、以て當時獨乙の國歩艱難なりし事を追想するに足る可し、斯る有様なりしが故に、時の老臣或日皇帝に謁見し、制度擴張の方法より、内閣及諸官

衙等に備付の諸器具改良等の儀を奏上す、皇帝老臣の言を聞かせ玉ふて、仰せけらく、國を建つるには必らず先づ、其國民の氣風に相當する制度を設るを必要とせば、何ぞ諸官衙備付の器具の精粗良惡に關を可ん、只た後世我國の官民一致して、朕が建國創業の志を繼續し、此國家の爲めに盡すことあらば、則ち我國の繁榮は期して之を見るを得べきなりと、爾後ウヰリアム皇帝質素の美德の、獨乙國の國粹となり、彼國民舉つて、其國粹を保存せしが故に、能く獨乙國は今日の如く、強盛富榮の大國と成るに至れり、國粹を保存する事の大切な次第は、前に話した因縁で能く知れたで有らば、今夫れ西洋諸邦は、文明國に違ひあるまい、併し乍ら、其文明國の西洋に行はるゝ事物は、悉く皆な善いと云ふ事ハ出來ん、又野蠻國に行はるゝ事物は、一切惡き物斗りぢやとも申し難い左れば其文明國の事物と、野蠻國の事物とに論なく、此れが邪正を甄別し無いで、一に西洋の事物とさへ言へば、何でも箇でも、善き物と心酔するの極、大切な心識と托し、安心決定す可き宗教迄も、邪曲の甚しき、耶蘇教と以て之に充てんと欲するに至る者あるのは、誠に歎く可き事である、此の如き輩は、此日本國の貴重なる事を

知らせ、又國粹を保存するの大事な所以を知らぬの致す處とは申し乍ら、日本建國の因縁に相應し、且最も日本國に因縁ある佛教と措きて、耶蘇教を信せんと欲する者あるの國家の爲めに大に憂ふ可き事では御座らんか、然るも國粹を保存するの大切な所以を知らず一も西洋、二も歐米と、諸事悉く彼れを以て、此日本を文明國たらしむるの基本と爲すの、是れ國家を危ふする者と申さんで何と言ふ可んか、曩も我國に渡來したる獨乙の建築學士ビュクマン氏は、某貴顯に對し、日本國の檜と云ふ良材も富めるを捨て、不十分な練瓦家屋を築かんと欲するは、其家屋の永久に保つ事の出來ぬ事とて無く、大に一國の經濟に不利益ぢやと、勸告したと云ふ噂が有つたが、若し夫れ日本人民なるにも拘はらば、徒らに西洋皮相の文明に心酔し、自國の國粹を保存する事の大切な所以を知らぬ者あるを彼、ビュクマン氏のやうな、具眼者に聞かしたなら、氏は之を何と評するで有りませう、抑も世相の無常なる、其變遷は誠極まり無い者ぢや、是を固より眞如の變相にて、眞實如常の水牀に、一旦波瀾を起せば、人心も種々に變動する者なき共、兼て心に堅固な處さへ有れば、決して他より動搖せ

しめらるゝ事は無い、況して西洋熱に浮かされて、自國の國粹を輕視し、遂に國家を危ふするに至る様な事が有らう筈は無い、夫に付ても各位の、有縁の佛教と信仰し、常に安心を決定し、自分々の職業を勉勵し、家内和合無事息災で、四恩に報ふる經營が何より一番肝要で御座る、

●吾觀を維持するは一國の瞻望に補益あり。(コツセス氏)

○第八章 法爾本然 (其三) 似而非行

○鴉が白鶴をまねたる話 古昔希臘に「シユタービ」と云へる神あり、此神は頻りに白鶴を愛し玉ふ處より、鴉は大に白鶴の神に鍾愛せらるゝを羨むの餘り、我も一番化粧をして、鶴に似せ、鍾愛せらるゝて見んとて、數日間、化粧よ心と凝し、化粧全く整ふて「シユタービ」神の前に到りしに、何ぞ思はん、鴉は忽ち化の皮を看破せられたれば、ホーホの体にて、鴉は逃出さんとするも、數十羽の鶴の追ひ來りて、鴉を取押へ、異口同音に「己れ憎ツき鴉めが、能くもく我をくの眞似と、しくさつたナ、此シレ。者が用捨ハセ

んど、覺悟「ろッ」と云へさま、寄りて、たかつて、其反羽と繼足とを取りて、仕舞ふとッ
メ眞ッ黒な元の鴉なりしと、

此鴉の因縁の、何と各位面白くして、大に味の有る話ぢや御座らんか、今時の我國人
民は、動もすると、西洋く、と云ツて、彼を眞似るが、是れは矢張り黒い毛色の鴉が、
白い毛色の鶴を、眞似ると同ト事で、黒い鴉が白い鶴を眞似て見た處が、決して白く
は成らん、黒い矢張り黒いのぢや、二三年前の事なりしが、東京で一人と云はるゝ、立
派な或學士が、西洋人は雪隠に入りて、出て來ても、手を洗はん慣習ぢやが、是れは畢
竟彼國で經濟、衛生、時間等を貴重する點より、此慣習と養成した者で、我國人も箇様
にしたら、宜しからうと、堂々たる、某新聞に其議論が記載して、有りた事が御座り
ましたけれども、各位能く考へて見るがよい、我國人の雪隠に到りて、手を洗ふのは、
即ち我國人の美德なのぢや、然るを雪隠に到りて、手も洗はん様な、西洋人の惡徳を
眞似て、我國人民の數千年來、歷傳した、固有の美德を改めんと欲するは、抑も亦何れ
る間違ッた了簡だらう、凡そ如何なる物でも、因縁の理法に外れて出來た物は無い故

お西洋人よの、西洋人の因縁が有り、日本人には、日本人の因縁が有る、シテ西洋人の
因縁の、西洋の習慣を保存する因縁で有りて、日本人の因縁の、日本の風俗を、紊亂せ
ぬ様にする因縁で有るのぢや、左れば日本人にして猥りよ西洋の風俗を眞似るとも、
夫とて日本人は、開化すると云ぬ譯でも無けりやア、又日本國が、文明お成ると申す、
次第でも無いのぢや、日本人は日本人、西洋人の西洋人で、恰も黒い鴉の鴉、白い鶴は
鶴ぢや、因縁と申す者の、鳥により、人により、國により相同トからざる者で有るのを
強へて之と撥無すると、忽ち喜怒哀樂の感情を發達し來り、煩惱癡惑の根柢を結成し、
後は六道輪廻の種子と成るに至るのぢや、何と各位、深く因縁の道理を考へて、大に
戒むる處なくては相成るまい、要するに吾人は、お互に心の聞き處から、妄見と云ふ
者が有るので、我他彼此の差別を致すのぢやが、雨降りには何が入用か、老後には何
が入用かと、云ふ事を先づ心と相談して見たら、臨終死後の入用物を、調達するの大
事にして、且は急務なるは、中々西洋の風俗を、眞似る處の、氣樂沙汰ぢや、御座ら
んテ、

●宗教の世界は一個の美術館なり、吾人一人は此館に入れば、精神を快活にして眼目を喜悅せしむる美妙の物多く備れり（ヂッケンズ氏）

○第九章 不殺生戒（其一） ○生類同愛

○放生の利益 曩に英國ロンドン府に醫學博士ニコラス氏が肉食排斥會と組織し、肉食の人身に有害にして、菜食の身軀を營養するを、最も有益なる事を主唱してより、爾來氏の説を賛成し其會に加盟する者頻りに多く今や、殆んど其會員の數、十二萬人に垂んとす、近頃に至り、其會員の一人たる、メヨール博士の演繹法と歸納法との道理より、放生の自壽、壽他の利益ある事を發見し、有志者と相謀りて、毎週一回當業者のみ山邊或は海邊より獵獲し來れる鳥類魚類を買求め、之を放ち遣る、之を見る者の、奇異の思ひを爲さざり、却て此事を殊勝と爲し、賛成者の追々増加するの景況なりと云へり、

凡そ活きたり生ける者、ナニ一ツとして、生を愛し死を憎まぬ者の無い、身を愛し命を惜まぬ者の無い、然るを人間の萬物の靈長ぢや、牛や豕や鳥の類は、吾人の食物よ

充る爲めに、神が之を造り置れたのちやに依て、吾人の牛豕魚鳥の生命を屠殺し、其肉を食ぬも、亦敢て差支が無いと云ふ者あるは、是れ何たる邪見ぞや、成る程、吾人と彼の牛豕魚鳥と智識及動作の優劣を比較して見たら、誠に人間の万物の靈長に違ひ無からうけれ共、其萬物の靈長ぢやに依て、吾人は牛豕魚鳥の生命を屠殺して、以て其肉を食ふても宜いと云ふなら、吾人よりも、體格筋骨の偉大ある、又其力の一層優れた虎や狼の、吾人の生命を戮害して以て、此肉を食ぬも亦敢て差支が無い道理ぢやが、斯る不道理の事、誰も決して、之を許すまい、生けると欲し、死ぬる事を嫌ふ情慾の、吾人も彼の牛豕魚鳥も、亦同じ事である、左れば吾人は成る可く物の命を取らぬ様ふ致さねば相成らん譯ぢや、我佛教の放生の功德ある事を聞き、之れを修し、之を行き事などは、最も自壽他壽の妙訣で最勝功德ある事、世に放生よ若く者が無い位ぢや、昔し天竺に流水長者と云ふ人が有つた、或る時幾千の魚を池中に放つたが、其魚は捕網の難を逃れて天年を全ふし、後ち忉利天に生きて、無比の快樂を受けつつして、又流水長者の其放生の功德に依て遂に佛果と成し、釋迦文佛となられたと云ぬ

第九 章 不 殺 生 戒

が、何と放生の利益は廣大な者では無いか、放生の利益の廣大な事ハ夫も同様者で有る、今や此放生の廣大な利益ある事が、肉食人種の英國人にまで知らるゝの時運に成るとも誠に佛教の歐米諸邦ハ繁榮ならん事を今より徴するに足る可きの勿論、凡そ世の中の眞理と申すは其一而不二な者ぢや、シテ其。一。而。不。二。の眞理は佛教より外に無いと云ふ事も、亦前に示せしメーヨル博士の所作を以て之を知るも足りるで御座りませんか、夫も同様肉食をして生活する人々さへ、今や放生の殊勝な事を知りて來たとすれば、況して、佛教國に生活して居る我れ等ハ、成る可く物の命を取らぬやう又一年に一二度か、若しくは一月一度の、隔月に一度とりに、有志者を拵へ五厘、若しくは、壹錢の淨財を集め、有情至重の命根を贖ひて、魚鳥を放生し以て天年と企ふし、長壽を樂む事は何より善き事で御座らんか、若し此の如くして漸次に大慈悲行を修して往きますると、自利々他、法界に圓滿して、無量の功德と受るに至る可き事ハ少しも疑ひ有りません、

●愛を公平に施すは、吾人が道義を高める資本なり (シヨセフ、スミス氏)

○第九章 不殺生戒 (其二) ○不得人身

○宗教と自殺との關係 凡そ宗教の人心を涵養し、徳性を維持するに力なくんばある可らざるは、勿論の儀なると、共に苟も宗教を信奉する者にして、此貴重の身命と瓦礫視し自殺を爲すに至るが如き事ハ、決して之ある可らざるの理なり、然れ共、若し宗教信者にして、自殺する者之あらんか、其心性の軟弱にして、徳義の缺乏を見ると得るとともに、其宗教の勢力なきを知るも足れり、歐米諸邦の人民は夙ハ耶蘇教を信する處のものにして、而して耶蘇教は擧て歐米諸邦の文化を贅育するとまでに誇稱するにも拘らざ、其人民に自殺の多きことは、實に驚くに堪るものあり請ふ今其例を擧て之を証せん

モルモリ博士の調査	百九十八	新教徒百万人に付自殺の數	百九十八	舊教徒全	五十八人	希臘教徒全	四十八人
ウェストコット博士の調査	百七十八		百七十八		八十八人		
ルゴイト博士の調査	百〇六人		百〇六人		六十二人		三十六人

第九 章 不 殺 生 戒

六十四

當統計表に依て見る時は、新教徒にして自殺せし者の割合は、舊教徒に比較し其數頗る多きを視るべし。ウェストコット博士の、新教の無形の宗教にて、都て十字架を飾らず、恰も好畫家が畫の美妙を愛すると同く、無形の處に神の榮光を觀するを、目的とすれども、舊教の之に反し、有形の宗教なるが故に、耶蘇の偶像を祭り禮拜の儀式寺院の構造迄も、總て外觀を莊嚴し、弱き心の者をして之を依頼するの念と起さしめ、又懺悔の法ありて、教師に對し、懺悔する時の、一切の罪障消滅すと教ふるを以て、舊教徒は新教徒よりも、其自殺の數の少なき所以なる可しと論斷せり、然るに佛蘭西の教育家ブルック氏は教育と、自殺との、關係を論じて、教育盛んなるに至れば、自殺者を多くす可く、其理由の第一に、教育は人の腦力と發達し、思想力を強ふると共に、人を以て激烈なる、生存競争を爲さしめ、第二に、教育は人の腦力と多く使はしむる者なるが故に、腦病神經病者を多からしむ、此二個の理由の實に自殺を多からしむるに至りし原因なりと云へり

自殺者の數の多いと少ないとい、其國の文明如何を判斷し、又其國の生産の多寡と

六十五

貧富の懸隔如何等をも推知する事が出来る、ソウして、自殺者の數の多いと少ないとい、其國の教育如何を斷定する事の出来るは勿論で有るけれ共、併し乍ら、自殺の原因は其人の心性の軟弱にして、徳義の完全ならざるに、職として由る者ぢやあら、一國自殺者の多少は、一に其國に行へるゝ宗教の邪正如何に原因すると申さば成らん道理で有る、シテ今自殺者の耶蘇教信者に多きこと既に前に擧たる統計表を以て之を知るに足る、顧みて我佛教を信する者の自殺の數は如何で有るか之を調査して見ると明治十七年中は人口五千六百〇三人に行き、自殺者一人、明治十八年中は人口七千二百八十人に行き、自殺者一人の割合ぢやから、彼此自殺の數の多少は、實に雲泥の違ひで有る、彼れ耶蘇教徒に自殺者の多きもの、畢竟するに、其教義の鹵莽なる、未だ以て十分に人心を感化維持す可き力あらざるに由るので有る、我佛教は、人心を涵養し徳性を維持するよ最も力あると共に、自ら生命を輕視して、之を毀損するやうな事の深く之を誡めてある、清涼傳を讀む「佛教自殺者不得復人身(中略)南史褚祐之傳云進藥晋恭帝々不肯飲曰佛教自殺者不得復人身(中略)宋書彭城王義康傳云遺中

書舎人嚴龍齋藥賜死義康不肯服藥曰佛教自殺不得復人身便隨宜是處分乃以被掩殺之
 と此言以て佛教が人々に自殺を誠むるに、銳意なる事を知るに足るるで御座りませ
 んか、

●自殺は、他人に對し、又自身に對し、又殊に神に對して、最も甚だき重罪なり（ホールンタア氏）

○第十章 不偷盜誠（其一） ○殘賊改悔

○少年の誠實、山賊を改悔せしむ、ベルシヤ國の寒村テカートと云ふ所に、燒麵の小賣
 と爲し、幽のある生活を立るコトタツチと呼ぶ者に十三年の齡なる一男子あり、名をハ
 スレーと稱す父コトタツチの不圖したる病に罹り、種々治療に手を尽せしも其功を奏
 せず、遂に死去したるを以て、母の父の遺産金二弗我八圓四十錢に當るを取出し、ハスレーに向ひ、
 此金は父の遺産なるが、之を汝に讓るに依り、何處へなりとも行きて生涯の生計を立る
 に足る可き、職業と修行し來れ、業若し成らずして、家に歸るも、決して家に入るを許さ
 ざる可れば、必らま汝業を卒へて歸り來れ、否らざれば、此母は汝の顔を再び見る事な
 らざる可しと云へ了はりて、母もハスレーも暫し黙して居たりしも、斯て果つ可き事なら

ねば、母ハスレーを勵まして、二弗の金をば服裏に縫込み遣はせしに、ハスレーも今は
 詮方なく思案を定めて母に對し、袂別を告げ旅立たり、然るに一日二日と旅行して、或
 る山中と越る時ハスレーは一群の山賊に出逢し、毫も亦恐るゝ色なく、泰然自若とし
 てハスレーは相構へて居るを以て、山賊共の之を取捲き、汝何と所持するやと尋ねたる
 に、ハスレーは徐ろに見は此着服の裏に、二弗の金を縫込み所持せりと答ふるも、山賊
 共は此山中を一少年が通行するに、二弗の金を所持すると云ふを疑ひ、之を信せざりき、
 然れ共、山賊共が幾度と無く、尋るもハスレーの答は前に變らざるが故に、山賊共の然
 らば汝の着服と検査せんとて、ハスレーの服を剥き検査したるに、果して二弗の金を見
 出しければ、山賊共は又ハスレーの白狀の容易なるを疑ひ、其山を尋ねたるにハスレ
 ーの答ふるやう「此金を與へたる兒が最愛の母は、常に兒を誠究て決して偽る勿き、天
 道は心正しき者も幸ひし玉ふと申さざたり」と山賊中頭と見ゆる一人の此言に痛く其
 良心を打ちたると見ゆ、忽ち兩眼に涙を浮べハスレーの手を取り「嗚呼、我れ御身に對

殘 賊 改 悔

一、濟ぬ事を爲せり、御身は少年乍ら能く母の命に従はるゝに、我れは年來、父母の心と痛め、利さへ天道に背きたる事を爲す、實に我れ過てりくどて、悔の涙お咽びたれば、傍お聞き居し手下の賊共も、此有様を見て、一同に地に臥し、前非を悔乍ら、泣き叫びたりと、噫ハスレ一少年の身を以て一群の山賊に取圍まれ、而して、毫も恐るゝ色なく、誠實を以て山賊の豪膽を挫き、能く賊等の惡逆無道を改悔せしめたるは、之を五條橋頭に辨慶を服せしめたる、牛若丸の勇にも優る可し、彼れ一人、此れ多數、噫誠實の力強きのな、

罪は業の用にして、業は罪の用で有る、貪嗔痴慢の妄念の甚ぶべき所より、事物の道理を辨明する事が出來ず、貪る心ある之を罪と云ひ、其心猛りて盗みをするに至るを業と申すのぢや、シテ其罪業の既に形の上に現はれた後の、國法の支配する所で有るが、其罪業の感體を根治するのが、佛教の効用で御座る、何となれば、感體とい、無始の無明の事ぢや、此無明の薰習、甚だしければ、貪慾も迷ましく遂には盗みもするに至るのぢやけれども、佛教の眞理の不斷煩惱得涅槃で罪業深重の者も、良心の刺戟

第 十 章 不 倫 盜 戒

が常に甚だしいから、前に擧たる因縁の如く、少年の誠實も猶ほ能く山賊を改悔せしむる事が有るのぢや、既に此の如く、佛教は極重惡人も、猶ほ其利益を受る事が出来るでは御座らんか、然るを況してや、各位の様な殊勝な、法義篤信の人々が、何とて其利益を受られぬと云ふ事が有りませう、左れば各位の益く、心を勵まして、信心せらるゝが宜しう御座る、

●財を慕ふは凡百の惡根なり、人々、之を慕ふこと甚だしければ、多くの苦害を以て自身を刺すに至る可し(タンチー氏)

○第十章 不倫盜戒 (其二) 挫折貪慾

○犬と盜人との話 或夜半の事ありしが、盜人がノツリノツリと拔足差足にて或富豪家の前へ來掛るや、兼て張り番を爲し居る犬の盜人の來れる事を知りけるより、當り前なら吼も可き筈なれども、古來舜の犬、堯に吼ゆとの笑柄も有る事ゆえ、盜人に向ツて吼付も、自分乍ら感心せざる所ありと思へしか、犬の盜人の此方に近づき來かゝるを見

て「御前さん、此夜中お何用ありて來なされた、思慮に御前さんの、窃盗どりをする積りで來なされたやせん」と云はれて、盗人は犬に向ひ「オイ暫く静かに、跡で手前には褒美を遣るうら、静かに頼むぞ」と云ふと、犬の盗人に對し「御前さんは静かにと言へなさるが、能く考へて御見なさい、私は當家に年來飼きて居る畜生の身なるも、主人へ報恩の爲めに斯く毎夜守門の番を致して居ますに、お前さんも人間で入らッしやりやア、少しの道義感情を具へてお出でしやううら、今晚の所の其儘歸りて、考へ直し、改めて又出て來なさい」と理解を分けし犬の言葉に、盗人も大に其感覺や刺衝せられけん、跡の言葉は一句も出てき、黙くとして退き去れりと云へり、

佛は偷盜の罪は、無間墮獄の業と迄に説き置れたが、凡そ吾人の心を殘賊に致し、又此身を毀くる事の甚くしき者は偷盜罪より外に無い位で有る、左れば、他人の物を盗む様な了簡の者の、逆も佛には成れんうら、自ら已れに克ちて以て、常に心の取締りを致さんでは相成りませぬ、併し能く考へますと、偷盜も畢竟邪見から起る者で、若し一念心頭に光明を放てば、前の因縁の如く、盗人が犬の訓誡を受けて改悔するに至る

事も有れば、其悪い心を起さぬ前より、常に一念心頭に光明を放ちて、正見に進み行く事が、緊要で有る、

●他人の物品を盗み取らんと欲する心は、人心の軟弱なるに原由す、之を唯だ強硬なよりむる者宗教の感化力なり(フヒニー氏)

○第十一章 不邪淫戒 (其一) ○夢中行淫

○怪夢妊娠 瑞典の一小村ワクタルよ、小函を製造し、辛くも生計を立て居るテルトーと云ふ獨身男ありけるが、獨身にては家事向き不自由勝なるもえ、或人の媒酌にてカプへいと云へる婦人を妻に持ち、夫婦睦ましく月日を送り居たるに、或時テルトーは函の原料を買入れの爲め、十二三里隔たるハルカインと云ふ地方へ趣きたり、然るにテルトーは發足の節妻れカプへいに往復四日間を要するとして出掛けたるにも拘はらざ六七日過ぎるも歸宅せされば、留守宅のカプへいは夫の歸宅を待ち草臥る斗りよて、夜も碌々睡らぬ程なりし、或夜半の事なりしがカプへいの例になく熟睡せる處へ、表の戸をホト

く叩くに、ハテ此夜半に誰も来る人の無いがと訝り居ると、今歸はたと云ふは微かなれ共、夫の聲なれば、手燭を点する間も急がしく、戸を開ればテルトの茫然として物をも云はねバカアヘイは如何なさつた大層御永い御道中で、何か子細の有りし事のと、案卜る言葉を押し止め、何かの話の明日致さう、草臥れたから直ぐ寐ようとして、其儘臥床に入りと思ひしが、翌朝に至りて見るとテルトの姿は見えねば、ア、昨夜夫の歸宅されーと思ひしゆ、夢なりしか左るにても夢にーしていと、疑ふ處ありかとも、他人には云れもせせ、胸を痛めて居る處へハルカインより電信着し、手に取り之を讀み下すと、夫の急病死去との事もエカアヘイの歎きの一方ならせ家内は沸き返る程、騒ぎ立て直よ親類の者はテルトの死骸引取りにハルカインに出掛けしが、其晩もカアヘイの、夫の歸宅して、同衾せし夢を見たり、後ち夫の死骸を引取り來りて、埋葬も済ますと、間も無く月経も止まり懐妊せし様子、追々腹も膨脹れ出し、全く妊娠に相違なければ世間の前を憚りて、カアヘイの心苦さ云ん方なく、死したる人の夜なく通ひ來りしと云ふとも人は信すまど、如何せんとの心痛より、遂に思案お餘り或日鋸お、家中の梁へ、細帶

夢 中 行 淫

を掛け首を縊り死したるが、其跡へ遣せし書置を見るお、死骸解剖の事さへ認めあるに依り、家内の者より最寄の病院へ右の趣き申出てしに、速に醫員が出張し、逐一、解剖して見ると、周圍一尺五寸斗りの毛の生へた塊りが、有りしゆワクタル地方の人々の、狸お魅入れて、其胤を宿せしあらんと噂しわへりと云ふ、

此因縁の實際は犯淫せし譯では無いが、淫情の制し難さより、宅に居らぬ夫と夢とて同衾したりと思ひる事ガ、即ち邪淫は原因と成りて、アマヲ命を棄て、搗て加へて、狸の子と胤せしとて、死んだ跡まで、他人に笑はるゝ結果を見るに至りたのぢや、之を以ても、何と邪淫は固く戒む可き事で御座らんお「心猿飛移、五慾、枝、意馬馳走、六塵、境」と斷す可きの邪淫で有る、併し乍ら邪淫を斷はりに、先づ其心を斷するが肝要で有る、左れば佛の其陰を斷せんより、心を斷するお若かきと仰せられた譯ぢや、又承陽大師の、王嬪西施美妙の容顔を見るときも、朝露の眼を遮るが如きなりと仰せられた、此概念を以て、邪淫を慎まば、六根門頭、大自由を得る事が出来るお、更み疑ふ可き處で無し。

夢 中 行 淫

●暴淫は体力を衰頹し、精神を消耗し、氣力を滅殺し、殊に平和の大敵なり (ウエストミンスタア氏)

第十一章 不邪淫戒

○第十一章 不邪淫戒 (其二) ○邪淫劣報

○卵生の小兒 埃及のカイルのガメルアマル區と云ふ處に住居の、或る歐羅巴の婦人が懷妊して、出産を催ふしたるに付き、早速區内の産婆並ひに醫師を呼び迎ひ、出産に取り掛りしに、非常の難産にて、急には生れぬと、醫師と産婆がいるくと手と盡して、漸く産せた處、赤兒ならで、長三寸二分、直徑二寸二分ほどの卵を産み落し、空氣に觸ると、直に卵の皮が堅くなりて、鳥の卵の様なるに、何れも興を覺せしが、醫師の頓て親族の許可を得て、其卵を割て見ると、桃太郎のやうな、小さな赤兒が息才で居るに、ますます驚き、猶其赤兒と篤と見ると、外に變り無ひが、唯鳴のやうであつたと云ふが、其原因の住居する家の庭に在る、池の中に雌雄二匹の鴨が居て、常に淫事と幹するを視て、羨みたるに依れりと、該近傍にて噂せり、

夫れ他の淫事を爲すを視て、心に之を羨むの、淫と行せざるも亦、既に邪淫と申す者

邪淫劣報

ぢや、又之を羨む心が積み重なりて、夫れが一の業となると、鴨や雞、其他畜生の様な兒を懷妊するに至るので有る、之に反して、若し善い事のみを視て、奇麗な事斗りを心に感づて見たが宜い、屹度正しき業報を視る事、疑ひ御座らん、左れば吾人の、務めて邪淫の心を制裁致さんでは成らん譯ぢや、古人の殺生戒を仁と爲し、偷盜戒と義と爲し、妄語戒を信と爲し、飲酒戒を智と爲し、邪淫戒を禮と爲したが其譯の吾人仁有れば愛生と、義有れば廉に成り、信有れば誠存し、智有れば愚去り、禮有れば行ひが正しく成る、此の如く仁義五常の中でも、邪淫戒の禮の位に當りて居る、シテ人の禽獸に異なる所以の、禮の道と知りて居るからぢや、然るに其禮を亂るの最も甚だしき邪淫の心を斷ぜん様ぢやア、逆も行ひを正ふする事、出來ん、夫れ禮亂れ、行ひ正しからぬ者の、人々に信用せられん者で有る、既に同之人々にすら尙ほ信用せられぬ者が、ドウして佛の心に副へませず、ドウして苦樂共々解脱して、得達成佛が出來ませうぞ、故に邪淫の心を、常に制裁する事、務めて怠らん様に致さんでの成りません、

●淫心熾んなれば靈魂の平和を破り、冀望の泰山を崩し去る (ツヨウツツ、リウイス氏)

○第十二章 不妄語戒 (其一) ○虚言薄福

○虚言の爲めに大金を取り損ふ 露國今上皇帝の御祖父ニコラス帝が嘗て在位の時、或る地方へ民情視察に、御巡幸遊ばされて、一の民家に休憩し玉へしに、其家の主人たる白髪の老翁が、餘念なく聖書を、讀む居るを帝の御眼に留りければ、帝は老翁に問はせらるゝに「汝は常に怠り無く聖書を讀めるか」と老翁は打ち喜びたる顔色にて、帝の御前に進み出て「仰せの通り少しも怠りぞ、聖書を讀み居る」と、帝此言を聞き玉ひて「然らば何程位讀み得るや」と、老翁答へて「昨一ケ年間に舊約聖書を讀み切り、今年早々より新約聖書を讀み始め、今は其中バを讀み居れり」と、帝は老翁の殊勝なる言に感せられ御服の「ポケット」中より金五百ルーブル〔我拾貳四五拾錢に當る〕を取出し、竊かに馬太傳の中程に挿みて當家を御出立遊ばさる後ち、二三月過ぎて復た、帝は同家に御立寄り休憩し玉ふや、老翁の聖書を取上げ見られしに、兼て帝の挿み置れし金五百「ルーブル」の尙は依然として其儘なまければ、帝は老翁に打ち向せられ「相變らず、汝は日々聖書を讀み居るや」と、問われしに、老翁は「左ればに候今は路加傳を讀み掛け居れり」と答へし、ゆゑ、帝は老翁より聖書を取り上げ玉ひて「汝の虚言も亦甚だしきかな、日々聖書と讀むとせば、何ぞ汝は此聖書中に朕が嘗て挿み置たる、五百「ルーブル」の大金と見當らざりしぞ、汝の罪深き朕の與ふる物すゝ之を見認る能はざり、争で、神の恵みに預ると得んや」と、云ふて件んの金の帝再びポケットに入れ、當家を御發聲遊ばさきて其金の貧民に恵み玉ひしと云へり、

此因縁に據て考ふるも、亦た虚言妄語の自身に損害の有る事の能く相分りませう、シテ見ると、相成る可くは、人間の最も惡徳たる虚言妄語は、慎みて之を言はん様にせ給ば、成りません、昔し孟子は、**誠と淫と邪と遁との四ツの、言葉の見分け方、聞き分け方等と、示して「未だ可い言而言是以言蝕之也、可い言而不言是以不言蝕之也、是皆穿踰之類也等」と申したが、誠に言葉には言ふ可き事と、言ふまじき事と、聞く可き事と、聞くまじき事が有る者也、眞實其心に無き事と、語らへららず、又他の言ふ事を、上は邊で聞く体とする杯の事は是れ皆な其身の惡徳と相成る者で有る、大**

無量壽經には「心口各異言念無實依諂不忠巧言諛媚」とて相互に不實不誠の言葉を吐ぬ様に、佛の垂誠し置き玉ふ、左れば我れ等、二世安穩最上樂境に到らうと思ぬからに、虚言妄語を廢に戒めんければ、成すまますまい

●自己を欺き、他人を欺き、神を欺くは虚言なり、譬へば一虚言を以て他人を欺かんと欲するは、即ち自己を欺き、神を欺くの、最も甚だしき者也 (ラッセル氏)

○第十二章 不妄語戒 (其二) ○偽言被殺

○象を欺きて却て殺さる 壞地利のワイキィと云ぬ處に、一人あり、日に椽前に坐す、其近傍に清流あり、御象者多く此に來て象に水を飲ましむ、彼人常に無花菓の葉を以て象に與ぬ、象甚だ之と嗜めばなり、一日戯れに石を無花菓葉に包み、御象者に語て曰く、我れ汝らの象に之を與へて、其措置する如何を試みんとす、御象者之を止めて曰く、彼れ決して君に欺かるものには非ざり、其之と與ふるに及んで、鼻を以て其れを弄觸し、果して其非なるを知り、之を地に捨てし願せ、御象者笑て云ふ、君我言の偽りならざるを

見よとして、敢て他の事を告げず、夫れより象に水を飲ましめ、歸路復た彼家の前と過ぐるに、其人尙は椽前に坐しければ、象之を狙ひ、彼れの不意に出て忽ち鼻を以て高く捲きあげ、地上に打擲蹂躪して之を殺せりと云へり、

都て、言語が信實で無いと、象の様な畜生でさへ、筒様に仇を以て吾人に報えますゆえ、少しも誠や偽りの出來ん者で有る、世の中に、誠偽りを言ふ人の、即ち既に自分の心すら欺き居る者ぢやに依て、其他人を欺き居る罪の決して輕く無いので有る、此輕からん罪を作りて居る限りの、其業報の程こそ、何と恐ろしいで有るまいか、左れば各位も能く佛戒を守りて誠偽りを爲さん様に、注意せらるるが宜しい、併し佛戒を守らばに、誠偽りと言ふなら諸苦所因邪慾爲本と申して、其誠偽りれ爲めふ、慘憺たる悲境に、陥る様な事が出来るもゑ、慎む可き誠偽り有る、

●言語の用意は、個人の生活を仕遂るの妨害たらざる所爲原理を遵奉するにあり (ジョリツ、ヘンリー氏)

第十三章 不飲酒戒 (其二) ○酒是酖毒

○酒の悪魔の巨魁 愛蘭北方の小都會ラスミルス市に住む貴女マクナットンは或日、近傍の漁夫某に對へ、御身の常に酒を嗜まるゝが、元來酒の悪魔の巨魁にして、種々の不品行の、飲酒より生ずる者ゆえ、以來御身の酒を禁じての如何と、懇切に論じらるに、某の暫く勘考の後ち、貴女若くはブラックロックよりホルトバルアントリ迄の海上一哩間〔我十六丁半餘に當る〕と、游泳し玉ひ、余の貴論に従ふ可しと返答したるふマクナットンは某の禁酒を冀望する熱心より、心易く某の言の如く、僅に三十九分時間に、能く其一哩の海上を、泳きたるにぞ、某も大に感服して、斷然禁酒家と成りいと云ふ、

酒の悪魔の巨魁なりと、云ふ西洋の諺も、酒の起罪の因縁なり、と云ふ佛の仰せも、酒と申す者の、人身に害ある事を戒めた旨趣は能く東西其符節を合して居ると云ぬて宜しい、總て酒の、諸般の害惡を誘起する性質を有する者にて、吾人の心を顛倒狂亂せしむるに至る者、此れより甚だしき者は無い、左れば酒の自分の飲む事を禁ずるは勿論、他人にも之を飲む事を爲さしめぬ様にするが、菩薩大人の行願と申す者である

●禁酒は平和の味方なり、智識の無盡蔵なり、不潔を洗ひ去る石鹼なり、道徳を高むる月桂冠なり (ウヰッソヤルド夫人)

○第十三章 不飲酒戒 (其二) ○飲酒劣業

○酒を飲むの酒に呑るゝの歎 獨乙國人の非常に火精酒を好む事、世人の能く知れる處なり、而して其非常に火精酒を好む處より、神經病者の、特に該國に多き事、統計學士、醫學士等の頻りに之を唱道する處とす、茲に獨乙のサレカーテと云ふ、村落おマシローと稱する大工ありけるが、此者の無類の豪酒家にて、毎日夜食に半ドレン〔我三合に當る〕の火精酒を飲み、飲み了れば、必らぞ心を亂して、狂ひ騒ぐこと氣違ひの如し、或日の事なりしがマシローの兒が「嚴父よ嚴父、嚴父の酒を飲み玉ふか、將た酒を呑れ玉ふ歎」と問へければマシローは兒に對して、汝の「何故に左様の事を乃公に問ふ乎」と質せしに、兒の「左ればちり嚴父の、酒を飲み玉ふと、其跡にて必らぞ心を亂し玉ふを視れば、其酒を飲み玉ふにあらざして、却て彼れに呑れ玉ふが如き者あるを視ればなり」と此言

を聞きマシローの沈黙たり、

此小兒の言、誠に妙ぢや、凡そ世の中に酒を飲む人は、却て酒に呑るゝのが多ふ御座る、然る處以の者ハ、酒が吾人の心と亂し、氣を荒くするから、素面でマシメの時ハ、大人なしくツても、酒を飲むと亂暴に成り勝ちや、善し縦へ亂暴を致さんでも、酒を飲むと自分の本心と悪魔と交代するもゑ、智慧の明達を障碍する事甚だしき者で有る、智慧明達せんけりやア、如何ぞ此身を安穩に守る事が出来やうぞ、古歌に「守るといふ身を守るのが守るなり。身を守らば神も守らざ」と申して、身を守らん位の者ハ、神佛も既に之を御見捨なさるから、其慧命を相續して、福利を得る事は出来ん者ぢや、殊に夫れ、飲酒の業ハ万劫に涉りて苦患の基と成る者なれば、此戒を守らんと、到底、天真獨朗、圓融無礙の境界に、達する事ハ出来ん者で有る、

●酒は吾人を怠惰に導き、放蕩に誘は、殊に吾人を大膽不敵ならしむる一大惡魔なり (サマラン夫人)

○第十四章 不惡口戒 (其二) ○口業速報

○口の禍ひの本 羅馬のタチント街「ヂユタービ」派の僧侶が二三人にて街上托鉢し居るを「ロユータール」派の僧侶が教會堂書見室の窓より眺見して「ヂユタービ」派の教義及僧風を誹りつゝ、自分の「ロユータール」派の整頓せる事を自負したるを「ヂユタービ」派の僧侶より、宗教裁判所に急訴せられ、其「ロユータール」派の僧侶ハ、科料四「フランク」〔我八拾八錢餘に當る〕申し付られたりと云へり、

此の如く自讃毀他の罪業ハ、業報の速かなる者ぢや、何と各位、大に誠めんけりやア成らんで無いか、抑も自讃毀他の邪見より起り、邪見ハ隨其心淨即佛土淨に大なる障碍ある者ぢやから、此戒を守るハ、誠に苟且ならぬ事で御座る、

●他人が一大の過失よりも、自身の一小過失は、自身に取りて恐る可き者なり、故に他人の過失を言ふよりも、先づ自身の過失を熟思せよ (ホイットレー氏)

○第十四章 不惡口戒 (其二) ○自讃毀他

○猿と狐との話 種々の獸類相集まるとして、生活上に關する協議を爲し居れり、斯る處へ

自 讚 毀 他

狐が出来りて、衆獸に一禮し、偕云へけるやう「我れは黠智の優れる事、憚と乍ら汝等衆獸の上に出づ、故に本日、汝等生活上に關する協議を爲さんと欲せば、議場の整理を我れに依頼し、我れを以て議長と爲せ」と、猿の狐の言を聞きて云へるに「黠智に長する者を衆獸中に求めば、或の狐君に如く者あららんか、然れども眞實なる智識と、經驗とを、有し且、最も世故に老練にして、万斛の思慮に深き者は僕を措て他に能く僕に、及ぶ可き者なり可し、狐君如何に黠智に長せりと自負するも、到底僕に能く及ぶ、可きにあらざるなり」と言末了らざるに、狐は聞き兼ねヤツキと成りて「へん自惚れも程が有る、高の知れた猿智慧の辯よ」と云ふや、猿も又ムツキと怒りて「何だ己れは穴住居として、白晝碌々、明るき處へ、顔出しも出来ない分際で居乍ら、僕を笑ふ杯とは小癡な奴ごと、互に負けす劣らぞ、言ひ争ぬ、中に果ては互に啗合へを始むるに至りしも、元來狐や猿は、自分れ智慧の少し斗りあるを頼みに、他の獸類を愚弄し、輕蔑するの持前あるを以て、他の獸類も常に其傲慢不遜を憎み居る折柄なれば、狐と猿どが言葉の、争ひより啗合へ始めしとて、何條これを程善く仲裁す可き、却て之を奇貨とし、他の獸類の議場の安寧を妨害し、たる者と爲し、一同寄つて掛つて、其狐と猿どを食ひ殺して仕舞たりと云ふ、

自讚毀他と申して、自分斗り威いやうに、褒めて他を悪く云ふ事は、誠に罪ある次第で有る、左を菩薩の、一切衆生に代りて毀辱を加ふるを受け、好事をば他人に興ひ、惡事をば己ふ向ひるが當然ぢやと、佛は仰せられたが成る程、此佛の仰せの通り、己の徳を揚げ、他人の好事を隠すやうか不徳な事を致して、之を菩薩の波羅夷罪と申すも、亦決して過言では御座りますまい、之を要するに、前ふ擧た猿と狐との話杯は、自讚毀他の誠に善い手本で御座るのら、各位も能く、之を戒めて、徳を高ふし、身を安全に保たるゝが大事で有る、

●舌頭刀刃をりざるも、濫用すれば身を毀づく (ライセール氏)

○第十五章 不慳貪戒 (其二) ○妄慳邪慾

○鴈と鳶との話 爪蛙の沖に數十羽の鴈の、毎に海上と游泳し、水中の魚類を食し生活

しけるが、或時、氣候の變象あらんとするの前兆を覺り、頻りに魚類と陥込みて、其近陸に運び掛けたり、然るに二三の鳶は、天上より之を見て、善き得物こそ見認たれ、イテ地上に下りて、彼の鴈の食糧を一獲し去らんと欲し、伴んの鳶は、地上に下り來りて、鴈の運び居れる魚類を浚へ行かんとす、鴈は之を見て大に怒り、「コレ鳶め、我れくの食糧を汝に浚へ行かれては困る、我れくは、近日氣象の變ある事を前知し、逆も海上お當分生活する事能はさる可れば、其生活に差支なきやうに、茲に食糧を運び居る者なるに、其れを汝に浚へ去られては、甚だ迷惑なり」と云へば、鳶は「ソウでも有らうけれ共、元來汝等は、海上に在りて、少しも口を休めず、魚を食通しにして居るに非るう、汝の食糧に當めること羨むに堪へり、俺れ等の、毎に食物を欠き飢餓に迫れる者なり、偶ま俺れ等の食物あるも、鼠か蛇の死せるを見當るに過ぎず、汝俺れ等の生計に困苦するを、察せば、少しく汝の運びたる、食物の内より、幾分を分與せよ」と、云ふも、鴈は中く聞き入るゝの様子なければ、鳶は強力を以て奪ひ去らんとするもゑ、鴈は「汝に奪ひ去らるゝ位なら、皆な食ひ了はるに如かき」とて、無理に魚類を、丸呑にしたるを以て、俄に

妄 慳 慾 邪

鴈の胃腑は膨脹れ出し、随つて全脈の絡通や止めけん、遂に一羽倒れ二羽倒れ、見るく數十羽の鴈は、死倒れ了りしかば、鳶は莞爾として「鴈の慳貪めが、此最後のザマを見る、魚類の内の幾分を俺れ等に呉れる事を慳みたツツかりで、此死ザマ、ア、俺れ等久し振りで、結構な得物に有り付た、サア魚類から先きに喰ひ掛らうか、死鴈から先きに喰ふか」

妄 慳 慾 邪

今夫れ慳貪の不徳ぢやと言ふ事の、此鴈と鳶との話を以て亦能く知るに足りるで有らうから、成る可く各位の、擅波羅密を修して、以て積功累徳せらるゝが肝要で有る、分別業報經に「若し生天の爲めに施し、或は復た名聞を求め、恩に報ひ、及報を望み、恐怖の故に施を行き、果を受ること清淨ならせ」と佛の仰せ置れたが、シテ見ると、少しでも慳貪の心が有ては不可で有るのぢやゆゑ、布施淨戒を修し、功徳を積累せる事より外に、結構な事無、左れば佛の布施の功徳を述玉ふて「一を施して萬財を得、安樂にして壽命長し、今日施善の人、其福量る可らき、皆な當さに佛道を得て、諸くの十方を度脱す可し」と何と各位、慳貪の惡徳に反して、布施の功徳は、廣大な者、

では御座らんか

●我れは貪慾を制して以て、我足元の燈火と爲し、以て我行く道の光明と爲す可し (シヤフ氏)

○第十五章 不慳貪戒 (其二) ○布施功德

○クリスマス 米國カナダ洲の地方に於ては、最も「クリスマス」として、毎年十二月廿五日に執行する耶蘇の祭事を立派に相營むの風習あり、其中に就て、最も善き習慣と養成する事と稱す可きは、兼て親達が五十錢なり、一圓なりの物品を、買整ひ置き、當日小兒に種々の物品を誰彼を問はず多くの人々へ、施與する事是れなり、抑も小兒の時より斯る習慣を養成するは即ち、人間の徳性を、陶冶する事、甚く利益ある事と、謂ふ可きなり。

此の如く、妄見外道の教を奉ずる人民でさへ、我佛教で申す、布施を行つて、貪慾を挫く、習風が有るぢや御座らんか、然るを我れ等の如く、佛法を信ぜ、慈悲平等を本とする者は、争でか布施を行せんで相成らうぞ、佛は昔一金幣を盆上に載せしものと視て、

布 施 功 徳

之を毒蛇にお譬へ被成た事の有るのも、詰り、貪慾の心を挫きて以て、人々に布施を行せしむる爲めの善巧方便で有るのぢや、抑も我れ々の衆苦は、何から起るかと言ふと、皆な貪慾から起るので、此貪慾を挫くは、布施を行するのが一番善い法で御座るゆえ、各位も、成る可く此布施を行ならるゝが宜しう御座る、斯く布施を進めんとて、澤山せよと申すのぢやア無い、又寺や坊主斗りに物を遣るのが布施の旨意で無い、寺や坊主の勿論、其他教法慈愍、一切の事に關して、物を施すのが、布施の眞面目なのぢや、シテ此功德の最勝の善根で有るゆゑ、其結構な果報を受得する事は、生々世々に亘りて少しも泯滅せぬと、佛は之を御受合なされて有る、何と布施の功德の、廣大無量ぢや無いか、

●汝の靈肉又は隣人を害する汝爲し得る火、得益あるべし、汝無用の費用を除き爲し得る火、之を貯蓄すべし、汝又爲し得る火、之を人に施すべし (ジョンソレスレー氏)

○第十六章 不瞋恚戒 (其二) ○曠業懺謝

○怒る事の戒め 白耳義國のアルター村に一商估某なる者あり、此某の長男ヘース^{二十}年、誠に怒る癖ありて、常に數ならぬ事に腹を立るが故に、其両親も大に心配し居たり、或時遠方に隔離せるヘースの叔父叔母來りて、此家に泊り居るものと二週間に及ぶ、其間ヘースの常に能く怒ると案察、何とかして其癖を矯せんと欲しヘースを呼付け親しく怒る事を止む可き旨を論したればヘースも大に感念たりと見え、是れ迄誠み兒の了簡違ひを致し居としが、故に後來必らざるを慎む可しと答へたとき、然るに、翌日の學校の試験日なるを以て、平日ヘースの早く出掛け行きに、試験の席順が其従弟に當る、トルパーより下に成りて、自分の勉強の足らざるを、省みず、トルパーに對し大に怒り、家に歸りて見ると、妹が爪を少し破りたとて、火の如く怒り、又庭に出掛んと欲するに、寢て居た犬に躓つき小言を並べ、毫も自分の非なる事を思ひざり、斯る有様を見たる叔母の呆れ果て、何事も再びヘースに言ひせめて、其翌日早々に叔父叔母の歸宅の途に上れり、其後ヘースは不圖叔母の訓誡を思ひ出し、嗚呼兒過てり、思ひ起せば爰に叔母の兒を諭せる言葉に、怒る事は不徳の頂上なり、何となれば他人に最も厭はれ、

父母に對しては心配を掛け、自分も心持ちを悪くし、神に對しては大なる罪を犯せばなり、叔母の諭せる言葉、漸く今兒の心に徹し、大に前非を悔ふるを覺ふ、イテ速に叔母に手紙を送り、案心せしめんと、即ち件んの次第を認め、前非改悔の由を報告し、又神にも自分從來の不良なる行爲を謝したりと云ふ、

「腹立たば、先づその儘に寐るがよい、覺れば、心なをるものなり」と狂歌にも有る通り、總じて嗔悲の念の熾んな時は、殊更に平等の觀門に自分の心に向ける事が、肝要で有る、已身と衆生と本來平等にして、我相人相を離るること尙や波と氷と相融して隔てぬ様にする事、佛教に於て嗔悲の念を打破る鐵槌として有る、然るを、之を思はせしめて、腹を立て、怒り立れば、遂に無量の劇苦を受るに至る、誠に瞋として明らかで有るから、之を戒る、忽ちせにす可くさる事ぢや、西洋の學者も言ふ通り「激烈なる感情は、公直なる智識を錯乱す」と、眞に吾人の智識と錯乱する者の、嗔悲より甚だしい者の無いが、又吾人の美德を損する事も、嗔悲より甚だしい者の無いが、嚴に自ら戒めて、怒つたり腹立ちたりする事を、慎しまねば成りません

●高慢なる者には神なく、嫉む者には隣人なく、怒る者には自己なき者なり、故に此高慢と、嫉む事と、怒る事とは、吾人の最も誠む可き者なり、此三個の不徳を爲さざれば、一身安寧にして幸福多かりん (ホールル氏)

第六十章 不瞋悲戒

第十六章 不瞋悲戒 (其二) ○乳水和合

○阿人の争論 千六百五十七年(我明曆三年に當る)の頃アイルランドの西に一小島あり、島中二人の豪農ありて、家産甚だ富めり、鬪島の者之を羨まざるなり、二人の富の、もと其共に群羊を牧するを以てなり、然るも一旦毫末の事より、遂に争端を引き起し、各其羊を分たんと欲す、羊數一百一なるを以て、一百に分て五十となすべさも、其一疋を分つべからば、百方工夫を回せとも、終に其爲す所を知す、已むを得せして、二人復た、一羊を交牧す、甲或る時、一對の襪を造らんと欲して、一羊の毛を剪らんふことを謀る、乙肯んせせ、遂に其半身の毛を剪る、未だ幾何ならせして此羊死して溝中に在り、乙の其毛を剪るの爲を感胃して死すと云ひ、甲の半身の毛を剪らざるが爲めに、彼を其體の平均を失ひ、終に誤て溝中に落ち、一ならんと云ふ、争論更に決せせ、是に於て、遂に之を官に

第七十章 不謗法戒

訴ふ、訴訟の費用、各其全羊を盡して止む、昨日の豪富も、今日の赤貧となり、食を道路み乞ふ、人其子孫を指して、島中第一の極貧者となり、猥りに好んで訴訟をなす者、之を以て般鑑となすと云ふ、

業道秤れ如く、重き者の必せ引くと、佛の嘗て仰せられたが、誠又其通りで有る、今夫れ物事に對して、動もすると喧り勝ちの人あらば、其人の何程、善事と爲したとて、一方の墮業れ方が重いから、其重い方に引くは、當然の道理で、誠に恐ろしい者ぢやうら、嗔怒の誡めぬば成とません、殊に之を常に誡めぬと、必らせ前に擧た阿人の争論たる笑えを免るゝ事は出来ません、

●他人をして其舌を制せしめんには、先づ自ら黙す可し (セカ子氏)

第十七章 不謗法戒 (其二) ○神現威徳

○愚夫神を謗る アフリカ州のトローピン村にマキタンと云へる者あり、マキタン一日山丘に樵りし、不圖山中小凸の所に、一羽の死せる鷺あるを見付しゆえ、善き得物こそ

見認たれ、此れぞ即ち神の與ふる賜ならん、取らずんば有る可らすとて、之を取りに掛
ると、何ぞ思はん民に打ち落ちけきばマキタンは頻りに神を祈て救ひを求めて云へけ
るやう「神よ、願くは此災難を救ひ玉へ、神よ、此災難を救ひ玉は、速に禮物を捧
けて、其恩に報へん」と言へ了はりて、民中を見廻せば、一寸とした段階あるを見出した
るゆえマキタンは其段階に足を掛け民淵の荆棘に手を掛け、漸くおして攀上る事を得
たどければ、早や神恩を忘れたりと見え、ア、神も無情なる者かな、我れアレ程迄に祈
願したるにも拘わらず、神の之を救ひも爲し呉れど、我智慧の働きありたれば、此
民より攀上りて、一命を全ふする事を得たるなり、左すれば神も頼母敷からぬ者かなと
て、眩き乍ら徐ろに樵りに取掛ると、又候民お打ち落ちければ、再び押強くも神に救ひ
を求めたるに、威容巖然たる神は、民淵に現ト玉ふて、汝よく余を誇り、汝の如き不
届なる心底の者に、何とて其願ひを許されやうぞ、

神の冥報、此の如く恐ろしければ、十方無礙にて、三世通貫せる佛の冥罰も亦恐ろ
しき事の知を切りた譯で有る、是れ本迹不二水波同体なるが故に、神佛共に冥罰の恐

ろしき事と同トいのぢや、左れば我れ等の、如何ぞ此冥罰の恐ろしい神佛を誹る様な
事をしての相成らうぞ、畜に誹る事斗りして成らんのだぢや無くして之を疎略に致し
ても相済んで有る、世の中の人々の内には、神佛の活きて居る者でなく、唯之と尊
崇して、神ぢや佛ぢやと、云ふに止まるので有るに依て、敢て人々に冥罰を與へる
程の事、有らう等の無いと申すけれども有相無相性相常住と談トて、其活きて居らん
からと云つて、神佛は人々に冥罰を與へんとは、斷言さる可き者ぢやア無い、其活
きて居ると否と、眼に其形が見ゆると否とを問はせ、神佛の冥罪は、必ら有る者に
違ひ無い也え、之を誹り之を危末にする事は出来ないので有る、其然る譯に、神佛に盛
んなる威徳が具りて居るうらの事ぢや、左をば、各位は能く此道理をわきまえて、
神佛を常に尊崇し、信心が緊要で御座る、各位の拙僧が前に申した、神佛の冥罰の恐
ろしい事の、既に之を承知られたなら、神佛の慈悲愛憐の深く被爲入ると云ふ事
も承知せらるゝに相違ない、神佛の慈悲愛憐の深く被爲入る事が合點出来たならば、
神佛を尊崇し、且つ之を信心して利益の無い事有りませう、

●神を勝る人は、神の惠愛を受るを得ず、宗教を講る者も亦た、宗教の感化を受るを得ず (ヂユ、ラチラ氏)

戒法謗不 章七十第

○第十七章 不謗法戒 (其二) ○敬神奉佛

○神の最善の事を爲す 葡萄耳のロルレン村にオークルメンと云へる商客あり、或日市墟より、騎て返る、背に囊を掛け、中ちに巨金を盛る、偶く天雨を降して、全身盡く濡濕し、自ら其煩悶に堪へず、因て天を仰きて大に神を恨む、時に路の深林を經る、忽ち見る賊あり、前路と遮さり、銃を擬め指を、擡機に充つ、火藥濕ふて發せず、商客間を得て逃れ、辛ふして其禍と免かるゝことを得たり、家に還りて自ら語て曰く、吾何を向きに愚なりし、天若し、斯雨を降さざれば、吾復た再ひ生きぞ、嗚呼曩の恨むる所の雨は即ち吾生命を全からしむる所のものなり、吾れ斯く善教を奉し以て後ちの幸福を祈り、且つ神の爲すこと、最善の事なるを記して、永く忘れざらんと

各位は此因縁と聽きて何と思はるゝか、始めは神を謗り、後ちは神を敬すとい、抑も是れ何と云ふ妄見ぞ、夫れ吾人の万物の靈で有りて、天地に參するから三才と申し、

下上維四 章八十第

シテ吾人の心の不可思議作用あるや、方寸の間に隠れて、天地の外を該録、一類定まり有りて、万物の理を備ひ、熱に逢ば熱を知り、冷み逢ば冷を知り、過現末の三際を達観するの識量を具して居るうら、天地も我れ等人間ありて、上に覆へ下に載し、万物も我れ等人間ありて、各く其用を現し、神佛も我れ等人間ありて其徳を顯する者ぢや、然ると、此道理を知らずに、唯自分の身や、都合よければ、俄に神佛を敬し、身に都合悪しければ、急に之と謗る杯とい、實に見解轉倒の甚ざしき者で有る、寒山子に「我心似秋月、碧潭淨皎潔」と申されたが、吾人此の如き清潔な心を以て、常に神佛を敬すれば、其神佛も、常に吾人を惠愛し玉ふこと決して疑ふ可きも非る事である、

●神の小惠を受ん事を望まんよりは、寧ろ神の榮光の顯はれん事を欲するに如かず (デカート氏)

第十八章 四維上下 (其一) ○等象儀談

○地球にわらずして平地なり 紐育ウチールドに於て、地球は球狀にわらず、平面なりとの説を唱ふる者あり、之と誰とかなす、博士ウヰリアム、カーペンター氏なり、氏は此

程開會せる「セー、ヨングメンズ、クスチャン、アツソンエーション」に於て、地球は平面なり球狀にあらざり、而して常に其位地に固着して、太陽之が四邊を輪回すとの持説を講演したり、此夜、氏の博士アール、エー、プロクトル氏の作に係る地圖等を臺上に陣列し、予の屢々公然の討論と、プロクトル氏に挑たるも、氏は更に應せざりしを述べ、且古來天文學士が測定したる、地球と太陽の距離に付、種々講明したる末、是れ皆な、無稽の言のみ一も採べき者なしと斷言し、波上に浮べる船舶や、空中に騰輕する氣球等の事に就き、種々の例証を引援して、自家の持説を主張せしと云ふ、

此ウ氏の平地説の、近頃誠に嶄新の説で有る、元來我佛教に於ては、地球説を談する者を排斥する事ぢやが、其譯を申さば、須彌山説を立るからして地球説をば排斥するので有る、佛教では元來此須彌山説を立るから、九山八海の事相を談して日月行道の程度を計り、天宮下界の理相を明かして六道四生の因果を審かにする事が出来るのぢや、然るに若し、此須彌山説を立んけりやア、如何して佛教が立行かうぞ、シテ此須彌山説を立んとすれば、是非とも地球説を排斥せんでい相成るまい、今や時來りてウ

氏の如く、平地説を立る人あるを見るの、抑も亦た我佛教の眞理を証明す可き秋に至りたからの事で有らう、抑も佛教の法門は十法界を、以て一心に攝し、一心を以て、十法界に遍下、洞達貫過去來なく、生死なく、自由自在なりと云ふのが、大乘の極意ぢやもろ、此境に到れば萬法皆空で、須彌山も地球も平地も何も箇も、一の是れとて執す可き物な無いけれども、人々の見解、轉倒錯亂して居る處から、之を正智見に入らしむる爲めに、須彌山と談下、三十三天の配置をも説くので、有る故に唯識所變の道理に依ては、八萬山甸の須彌山をも見るで有らう、又地球も現下、平地も在るで有らうが、併し是れは、理相上の見解ぢやあら、事相上では此の如き見解をば相許しはせん、ドコ迄も、須彌山實有説を執して以て、六道四生の因果を審かに、するのが、其眞面目で御座る、

●此地球は、有限と云ひ無限と云ふも、共に積極的の理論なり、故に積極的の理より現はれ來る、若し之より消極的の理論ならしめば、消極的の理より現はる、事を知る可し (アラトー氏)

○第十八章 四維上下 (其二) ○冰山實有

○北洋探檢 今日地球の經度は三萬里ありとは、一定の説み相成り居りて、且つ方今人類の繁殖せるや、地球到る處として、人類生息するを得べき處の、之を開墾せざるのみなく、最早此上、地球中に邦土と開墾す可き處なきが如く思へ居たるに、近頃英人フエデングと云へる航海學士は、一命と賭し、危険を犯して、北洋に航しけるに、其極下氷山ある事を發見し、之を開拓すれば、人類を移住生息せしむるに足るの、好邦土と得可しと云へり、

各位此フ氏の北洋探檢説に依るも、又地球説の漆桶摸象なる事が分りて、將た佛法の須彌説や、六道輪廻説杯が、虚誕ぢやと斗り申せん様で御座るまいか、今や地球説に依れば、地球一周して晝夜の別を爲す議論は、一應尤もに聞ふべきも、立世阿毘曇論に依れば「我れ記す、阿難外道あり、地恒ふ去て息まきと、阿難此の如く答ぬ可し、此事然らば、地若し實に去らば、人の物を前に擲つに、物應さに後又落つ可し、復次に外道あり、此の如きの説を爲す、日月星辰恒住移らば、大地自ら轉せ、是を天廻ると疑ふのみと、阿難此の如く答ふ可し、此事然らば、地若し實に廻らば、人の射る時に、射棚に至らざる可し」と、此對問に就て、佛法の須彌説を按するも、八万山旬の須彌山は、其實有なる事疑ふ處は無い等ぢや、况や三十三天の配置と考ふれば、六道輪廻の説は決して虚誕で無い、夫の現に我れくが見る、小星の地球の如く、有生の居住する惑星を以て繞る者なりと、博物新編に記して有る、此れと云ひ彼をフ氏の説と云ひ、人間の報土は、現在の地上のみに止まらば、心靈の流轉して、報土を感受する處の、數多く有る譯が知れるで有らう、シテ見ると、六道輪廻の虚誕で無いゆゑ、輪廻苦患を求めん様に、佛法信心が何より緊要で御座る、

●航海學士は、夫の北極星を標準として海上を航海するの方向を定むるが如く、吾人社會の行路は宗教を以て北極星と爲し進み行かざる可らず (ハンテスル氏)

○第十九章 經典奉行 (其一) ○寫經功德

○經典書寫 希臘のヒカンコー云へる小都會に、ハアヂンスと呼ぶ一老翁あり、此老翁

は、若年の頃より、神を深く信ト年久しく無病息災にて、安穩に生活し來れるは、是れ全く神の與へ玉ひし幸福も外ならずと爲し、其神の恵みに報へんが爲め、神の榮光ある事を神典中より拔萃して、之を數萬枚の紙に自筆にて寫し、之と諸人に頒布したりと云へり、昔し佛は御自身の骸より、血を絞りて墨と成し、皮を剝りて紙に代へ、以て經典を御寫し被成たと申す事ぢやが、抑も佛が斯く迄に慘憺たる所爲を被成て、經典と寫し玉へしは、何の爲先かと按するに、唯々佛敎の利益ある事を、御信ト被成て、外に御疑念が、無う侍たからの事ぢや、成る程、能く考へて見ると、經典書寫の功德は、必らる廣大な者に違ひ無い、何となれば修多羅は法身の慧命と申して、經典は都て活きた佛と同じ靈妙なる働きを具して居ると云へば、經典を書寫して、其功德の無い事は御座るまい、現に金剛般若經に經典書寫の功德の廣大なる事は、百千萬劫に身を捨て布施せんよりも勝れる趣が説き置せらるゝて有る、

●經典は、火に焼れ川に投せらるゝ、其活潑は世の闇さを照らす光りとなり、世の腐敗の瘡の鹽となる（リチヤン氏）

○第十九章 經典奉行（其二） ○内外比經

○新約全書の由來 新約全書の筆録の中古より今に至る迄、存するものを數ふと、殆ど五百卷に近くと雖も、其中の最も切要となす處のものは、只五部あるのみ、茲も此の五部の來由を掲ぐべし、第一を即「ア」の録と稱す、此筆録は、古昔アレキサンデリア後にコンスタンチノバルの大監督なるシソルスルカリス氏の所有せし物なり、羊皮に記し四冊に分ち、三冊は舊約聖書にして、一冊は新約書とす、第二の記録は「ビ」号にして即「コフデキスパテカノスト」云ふ、其文字と聞ればエシブドに於て、記録せし者なりと思はる、是を硬牛仔皮に誌せし舊新約書なり、然れども、新約書中に缺乏する處、左の如し、希百來の書九章の十回節より、書の終尾に至る迄、又提摩太書二章提多書腓利門の書及び黙示録是れなり、第三の「セイ」号にして、即「コーデキスエフライムト」云ふ、別なることを見れば、彼れアレキサンデリア若しくは、アレキサンデリア方言の通ずる處に誌されたりと思はざるを得ず、必竟其本文、惣体純粹のアレキサンデリア文章

なり、此輯録は必き「アー」の輯録より遅く記されたりと思ふを得ず、故に第五百年期中の筆録と定むべし、第四の「デイ」号にして「コフデキスカンタンブレーシエンセス」或は「コフデキスベセ」と稱して英國のキャンブレージ大學校の書庫に藏せり此輯録のリオ
 ンズのイリニヤスノ修道院より採れるものにして、羊皮に記して四福音傳と、使徒行傳の原文を含有し、其外にラテン語譯の分を加へり、元と普通書翰と云ふ書をも載せたることあり、書翰の第三十一節より十五節なり、此の輯録原文の特別にして、他の輯録の原文に違ふ處多し、第五の「アレフ」号にして「コフデキスサイナイテコスト」云ふ「アレフ」は「アラビヤのイロハ」此の輯録はチシンドルフ氏が一千八百五十九年に「我安政六年に當る」シナイ山の聖女なるカスレヌ氏修道院より取りたる者なり、

是れに因て彼れ耶蘇教の事を考ふるも亦、彼の教の虚妄なる事が相分る、我佛法の、釋尊成佛の曉より、鶴林の夕に至るまで、其所説の法門、八萬四千、其化度の衆生の無量無邊で、佛滅後に至り、迦葉阿難の二尊者を上首とし、一千の大阿羅漢が、王舍城に雲集し、一代の佛説を結集し、具彙に記して、三藏に分ち、爾來支那に傳はりて其翻譯

に係るもの宋元明歷の四版あるが、共に是れ日本にも傳へて居て、前に申した、耶蘇教の經書の虚妄とは、大に譯が違ふので有る、又佛法の宗旨の種々に分れたの、隨機説法で、人々の機類に種類が有るので、其化度に便なる處よと、宗旨の數が多く別れたのちや、古徳の歌に「わけ登る麓の道は多けれど、同ト高根の月を見るかな」と申されたが、此歌の意を考へて見ると、何も佛法の宗旨が、數多く有るからと云ふて、之を疑ふ處と無し、

●眞正の宗教は、其感化力熾んにして、恰も火焔の燃るが如し（ラツソン氏）

○第二十章 最勝福德（其一） ○子孫長久

○世界無比の子福者 蘇蘭の織物屋の妻ポコットは、七十一年の齡を重ねる迄に、六十
 二子を生めり、其内男子は四十六人ありて、女子は十六人なりしも、女子は四人を餘ま
 すの外、何れも丁年に至らざりて死去せど、然れ共、四十六人の男子と、四人の女子とは
 何れも壯健にして、能く成長したりノーサムヘランドのシヨンテラヴァルは千六百三

十年〔我寛永七年に當る〕此目出度、子福者を見んとて蘇蘭〔蘇蘭〕に行きポコットに面會して事實なるを世上に披露したと、又英國ノーフオーグ公爵の待醫トーマス、グレンビル氏〔千六百九十三年〕〔我元禄六年に當る〕紋章登録所長に宛て、一篇の願書を提出せし事あり、其願旨は「私儀父グータルの七男にして、男女兄弟の三十九人目の子に當るを以て、此奇事と永く後世子孫に傳へんが爲め、本家の定紋に特別の徽章を加へんと欲す、請ふ之を認可せられん事を」と云ふにありし、元來英國に七男の紋章を區別する事、既に成規あるを以て、之を許すも三十九子を區別すべき明文に至りては、成規に之をさが故に、登録所に於ても、大に其處分法を困却したりと云ふ、

世の中の子を欲しかる人より子なくして、子を欲しからん者に却て子が多く有る、又富貴の家に子が少なくて、貧乏人の所に却て子が多く有ると云ふ様な有様で、凡そ子は欲しありたどて之を容易に得らるゝ者ぢや無いもえ、其人の貧富如何に拘はらざ、子の出来るのは、即ち其親人の福分と申す者で有るのぢや、然るを世には、心得違ひの人も有るものにて、其家の貧しき處より、子を殺し或は身の徒らより、胎内〔胎内〕に出来た

子孫長久

子を墮胎する人あるは、是れ甚だしき大罪で有る、昔し佛の御在世中に、頻婆娑羅王の子なさを悲しされ、相師をして之を占見せしめられしに、毘富羅仙人、命盡きて貴王が皇后の胎に妊娠する事あるへしと奏せしに依り、王は相師に托し、皇后韋提希の胎内〔胎内〕よ、若し命盡きたる毘富羅仙人の妊娠する事ある共、死せん事を請はしめられし處、何時の早や仙人は胎に宿りたりと見へ其仙人の申すは、然らば三年間、猶豫して、太子と生る可しと答へしも、王は、之を聞き玉ひき、醫に命じて墮胎せしめられんと欲し玉へしも、仙人の運強く、終に皇后韋提希の胎内より生れ出で、成長の後、大に王及皇后に仇をしたと申す事ぢやが、總べて墮胎は、無慚の至りで、惡業の頂上もえ、簡様の事は、決して致しては相成らん、抑も子の有るのは、其身の福分なれば、親たる者の子と愛するの、當然の事〔當然〕で有る、家貧ふして子多く、之を養育するに逆も力足らんと思ふの邪見で有る、何となれば、初め子の生るゝ方りてや、天祿と申して其子一人、一人に、禍福自然に備へて、生れ来る者で有るのに、之を一人殺したるとして、其親の生活に幾許の餘裕あるか、又之を活かし育でたりとて、其親の何程の心勞とするも

のなるり、親となり子となるも前世の因縁で有るのぢやから、子が生れたから、之を大切ふ養育し、天晴れ立派な人に躰け上げ、自分が老いの楽しみとするは、是れ親たる者の義務と申す者で御座る、

●子孫の數多く、而して其繁榮なるは「ダイヤモンド」の指輪、腕輪に優る (ハンタレー氏)

○第二十章 最勝福德 (其二) ○財福無量

○世界第一等の金満家 世界第一等れ金満家の米國紐育ダフルユエーチ、ウバンデルヒルト氏なり、氏の米國政府の公債證書にて、六千五百万弗〔我三千七百三十万圓に當る〕を有し、紐育セントラルエンドホドワソ河、鐵道株券にて凡五千萬弗〔我二千百万圓に當る〕紐育州及其他諸州の鐵道株券にて、五千万弗〔我二千百万圓に當る〕其他紐育の地所建物等貴重なる不動産の巨額を所有するよし評判あり、左れば氏の財産は二億弗より甚なるものにて、恐らく三億弗に近き程のものを有する者あるべし、之を以て考ふれば、氏の疑もなく世界第一の持丸長者にて、彼の陶采、持頓をして遠く數舎を避けしむる者と謂ふべし、故に氏の富

財

福

無

量

は以て、歐州有名の富豪家ロスチャイルド氏の財産全額を買ひ締め、殘る處の財産を以て、猶や天下無比の富豪を稱するに足るものなり、而して彼の英國の富豪家ヘッドフォル侯アルチール侯及バックキューク侯の如く、其富有財産を父祖より相續したる者よあらざ、氏の財産二億餘万弗の、皆是れ粒々辛苦の蓄積と成るものなり、

此タ氏の富豪に相成りし來歴を聞きても、福德と申す者の、其心の正しくして、其身の行ひ直き處より斯くまで富豪を極むるに至りたので有る、此富豪を極むるに至ると云ふも、○○○因縁の然らしむる處で有りて、タ氏の富豪を極むるに至りしも、畢竟百千万弗より因縁相續して來て、遂に現世に富豪を極むるに至りたのぢや、抑も福分の善行に原し、禍の悪行に根を有る者で、善行の善の五蘊強さに依り、悪行は惡の五蘊強さに由る、左れば禍福の五蘊の強弱に因縁する事の、誠に明らなぢやから、福分を得やうと思ふに、善行を修する事が肝要で御座る、然るを悪行を修して、却て福分を求めんと欲する様ぢや、逆も其望みを、達する事の出來ません、啻に其出來んのみあり、却て其心の暴逆な爲め、恐ろしい冥罰を受るに至ります、故に斯る妄見

を起さん様に、人々、我れ我れで、因縁に住し、善行を修する事が大切で有る、世の中、隣りの家の寶を算ぬる人が多ければ、是れ何れも成らん無益な事ぢや、徒らに隣りの家の寶を算ぬる位に、羨しいから、寧ろ自分の額上、汗水を流した方が宜しう御座る、是れを佛に謂れた、正見に住する人と、申す者で有る、

●不満足は不信仰の反響なり、貧乏の原因は懈怠にあり、勤勉の結果は、富貴なり (トレーノル氏)

○第二十一章 敬供養 (其一) ○鑄鐘功德

○大砲大鐘と變す 今を去る三十餘年前、水戸の烈公が、寺院の梵鐘佛像を以て大砲に改鑄せんと企立ありしことを聞き傳へしが、今は其れと反對して、マロン大寺院に奉納したる大鐘は、其重量七千八百十五貫、高さ十四尺、半口徑十二尺半にして、アンドロースハム氏がウヰルヘルム皇帝の勅命を奉り、曾て佛國より奪取したる、大砲廿二門に錫を混和し、鑄造したる者にて、永くウヰルヘルム皇帝の鐘として、世に知らるゝなるべし、今其鐘の前面を見るに銘あり、曰く「獨逸の皇帝にして、且普瀾西の王たるウヰルヘルムは、天の冥助を空くせき、佛蘭西と戦ひ勝利を得て、茲に獨逸帝國を回復し、佛國より大砲を奪取して、大鐘を鑄造し、之を今將に完成せんとする大伽藍に懸く」と、又其後面の銘に云く「余鐘を指す」の皇帝の鐘と呼ばれ、余の皇帝の名譽を宣言す、余の神聖なる伽藍に懸り、獨逸帝國の爲めに、神が永久帝國に與へ得る平和と、保護とを祈る者也」と此コロン大伽藍に、セントピーターの肖像あり、又貴重美麗と呼ばるゝ、二箇の大鐘もあることなるが、此度の鐘は美麗鐘に模して、鑄造したる者なりと云ふ、

獨一主宰を立る耶蘇教國の獨乙に、此殊勝なる因縁あるのは何と各位感入るで御座りませんか、抑も鐘音の佛事門中最大殊勝な物で有りて、六道衆生が耳根の病を療するふと、譬へば芭蕉の葉の雷を聞きて裂け出すが如き者で有る、昔の梁の武帝地獄の相を見て、苦を止るの法を寶公に尋ね、罽膩王の大洋の魚となりて劍輪を脱するの法を太子に知らせたと云ふが、是れに因て考ふるも、鐘聲の六道に通る事が能く分るで有らう、現に吾人が無明の睡夢を覺すは、此鐘音の功德で無いか、現在既に然り、シテ見たならば、三千界裡に迷ひ居る幽冥の魂魄を救ふの功德も、亦た鐘に具

して居らん筈の無い、何と、鐘の功德も亦た廣大無量な者で有りませんか。

●梵鐘は吾人の睡眠を覚醒して、以て吾人の心を正道に進まらむる者なり (アユリント氏)

○第二十一章 敬恭供養 (其二) ○開甘露門

○宏大壯麗の寺門 伊太利のチーユシル市にチユルターと云へる上院議官あり、此人は此程自己の歸依寺に英貨五千二百弗〔我二万千八百四十圓餘に當る〕を擲ちて、宏大壯麗なる門を建立したり、抑も今チユルター氏の斯く巨額の金を擲ちて、寺門を建立せしは何の爲めりと云ふか、自己の最愛なる夫人トルコインの冥福を祈請する爲めにしたる者なりとの事なり、左ればにや、其門の兩柱に金字を刻み、梁上鳳舞ひ、柱礎獸蹲り光氣相映して、美觀なる事の誠み名狀す可らざる者ありと云へり、

夫れ寺門建立は、最勝の福田で有る、其然る處以の者は、四衆其門に入れば俱に佛慧を修し、佛眼を開き、佛智見に達する事が出来るから、人として佛身ならぬ者は無く、土として淨土ならぬ處の無い、シテ見ると凡夫の建立した門でも、即ち甘露門で有る

に依て、「能開甘露門廣度於一切」の金口に該當する功德の有る事は能く知れた譯ぢや、夫れ既に、寺門建立の此の如き功德ありとせば、之を疎に美にするとの差別に依て、又其功德に多少の差が無くて成らん筈ぢや、抑も我れ等衆生は本來無作の佛で有る、能居の我を等既に佛ならば、所居の土も何と亦た淨土では有りませんや、故よ正見を以て見る時は、瓦礫の穢土も即ち七寶の淨土ぢやけれども、正見の見る處の凡眼の未だ嘗て見ん處で有る、左ればチ氏の曰く宏大壯麗の寺門を建立し、多くの人々を此門に入らしむるは、即ち甘露門を開いたと同功徳が有ると云ふて宜しうらう、經に曰く「重門高樓門男女皆充滿」と、又曰く「旃檀立精舍以園林莊嚴」と、寺門建立の福田なる事何の疑ふ可き處が有りませう、耶蘇教國に成長したる人の中にも又チ氏の如き能き心掛けの人が有るに、況て佛敎國に生育した我れ等お互ひ、彼をチ氏の後に瞻然する様な事が有りて相濟みませうぞ、

●佛國迦羅門の美麗なるは、當時佛國人民の天真爛漫たる思想の彫琢なり (アルトロット氏)

○第二十二章 回忌葬祭 (其一) ○年忌追善

○畜生尙は親の恩を知る 煥地利トクテアの山間に「ペスレン」と云へる小獸あり、此獸の親子の規律能く整ふて、常に少しも其秩序を紊さざ、獸類の中には稀有の珍獸なり、斯る獸なるが故に、親獸の死するや、其子獸は必らき十二日目毎に、追善を修し、亡親を追懐す、元來此獸は常に山間に在りて小鳥の類を捕へ常食とする者なるも、忘親の忌日に當る日は、一日間全く食ひざるも亦決して小鳥を捕らざ、是れ亡親の追善の當日也え、殺生を思ひものなるにや、又此獸は其親の死するや、當日より自分の巢居に木片一個を、日く暗へ來り、十二に滿る日を以て、亡親の忌日を知るの印と爲せりと云ふ、

夫薄福下劣の畜生ですら、親の恩を知り、其亡靈の追薦を修する事は簡様で有る、況して、我々等人間に生を受たる者、親の恩を思はんで何としやう、亡親の冥福を祈らんで何としやう、亡親の冥福を祈り、追薦供養を致すのも、其子が亡親へ對する孝行の一部分で御座る、左れば曾子の「終を慎み、遠きを追ふ民の徳厚きに歸す」と云ひ

又禮記に「君子終身の喪あり忌日の謂ひなど」と又佛は地藏本願經に「是の命終の人未だ生を受る事を得ず、七々の間に在りて諸くの骨肉眷族と與もに福力を造りて、救濟せん」と、仰せられた、之れを要するも、追薦供養の目的は衆生無始より、互に恩縁繋屬があるのちや故に他の善本を修し回施を用ふる時に、薰發の縁と成りて、亡者をして善心を發して、出離の行を修せしむると、又他の回向に依て、直ちに生死を出で、法性平等、自他不二の故に、生々互に恩ある處から、亡者即ち修善の縁と成るのちや、此二ツの目的が有りて、追薦を修するのちや也え、追薦と申すものハ決して不稽妄誕なものでは無い、人々の當さに修せざる可らざるの道理を具して居るもので有る、

●結果の如何を恐れて、自己の義務を果さんと欲せば、就眠したる父母を追懐す可し (コエスチル氏)

○第二十二章 回忌葬祭 (其二) ○亡奠葬送

○鴟の葬禮 土耳其のマチルトンと云ふ地方に居る鴟は、自己の同類が死すると、他の

多くの同類を呼集め、其脚爪を以て土を掘り、死鴟を埋葬し、幾度と無く「キャ〜」と連呼する、有様は、人間の葬式と格別に異ならぬ程なりと云ふ、

此の通り鳥類でさへ、葬禮を恭しく整へるに、我れ等人間一生の大禮とも申す可き葬禮を輕視する様では相成らん、今時の人は、動もすると、理論的から、葬禮ハ人間死後の事に關するものゆゑ、葬式をするに多く金銭を費すは馬鹿氣て居ると云ふに至るが、或ハ然る譯も有らう、左ればとて、其死んで往く人の心は「イザ知らせ、此れが遺族たる者の心に成りたらば、縦ひ貧しき身分でも出来る丈の經費を掛けて、葬式をし度と思ふのが一般の人情で有る、宋の謝廷芳ハ「祭は屢くするを欲せせ、屢くそれバ、則ち敬せせ、祭は疏きを欲せせ、疏き時は則ち怠る」と、申されたが、総トて亡靈に對し禮を疏くするは、怠るの道理で有るから、身分相應に出来る丈の葬禮をするのは、即ち遺族の義務と云ふ者で御座る、

●人間の死は万事を畢了する者なり、故に葬祭を壯麗にせざる可らず、其葬祭を壯麗にするは、天國に到りて主に見ゆるの敬禮なり (メンチル氏)

○第二十二章 回忌葬祭 (其三) ○陀毘修法

○火葬 倫敦、巴里等の大都市には、多數の人口あれば、隨て年々死亡者の數極めて多しと雖も、耶蘇教國の習、體を焼くことを忌嫌ふ故に、此等の死者は、皆郭外に埋葬するの法なるが、斯くてハ、年を経るに従ひ、墓地の面積を増すのみならず、死體を地に埋るハ、衛生上にも妨害あることなりとて、近來死體處分の議論追々行はるゝ由なるが、去月中英國の「ドクトル」ルリーチなる人が「パールン、ソサイチー」の集會の席にて、火葬と云へる題にて演説したる大意を聞くに、近來世上に喧しき死人處分の論ハ、ヘンリータムソン氏の一言を以て之を決するに足れり、氏の言に曰く、死體は之を火にして、炭酸水「アンモニヤ」及び各種の礦素に分解すべし、斯くせば速かに仕末を付くることを得て、又人に害を及ぼさず、且つ人をして不快を感せしむることなかるべしと、此言誠に然り、死體を焼く時は、多量の炭酸を生じるのみならず「アンモニヤ」其他の惡臭を發する元素は凡て消散すべし、今日倫敦にての年々死者の數は凡そ八萬人もあれば、其目方を

量るに、三百噸内外にして、殆ど四百萬立方尺の有害なる瓦斯を發すべし、之を思へば、空氣及び飲水の腐敗して、人の健康を害するも怪しむに足らざる也との旨意なりしと。

西洋諸邦の人々が邪見なる事は、今に始めぬ事であるが、ソレにしても、死骸を火葬にする事を心附くに至りしとは、是れ佛法の西漸する兆候と云ふて宜しき御座る、抑も死骸を清淨にし、遺族の感情や健康を保全するに、死骸を土葬するよりも、之を火葬にした方が善い事なり、ル氏の説の通りである、顧みて我國火葬の起原を按ずるに、文武天皇四年三月道昭和尚が、七十二歳にして遷化せられた時に、其御弟子方が、栗原に於て、和尚の遺體を火葬せられた、此れより火葬の行はれ出したもので、之と西洋諸邦の人々が、漸く近頃に至りて火葬の事に心附きしと較ぶれば、其違ひは實に、雲泥の事で御座る、

●吾人の死は今まで彈じ居たる「オルガン」器の、足踏みを止めたるが爲めに、唼喚たる聲音をも止むるに至りしが如し (マックススウェル夫人)

○第二十三章 圓融回互 (其一) ○理事無礙

○記憶力の養成法 英國の心理學者タンチル氏は、近頃記憶力の養成法に付き、演説して曰く、記憶力を善くする事は、如何して之を善く得しらる可きや、古今諸人の工夫を凝らす處とす、而して其養成法を既と按出せし者なきあられ共、其實験効なきが如し、然るに予は今爰に、前人未發の記憶力養成法を發明したり、抑も其養成法は衛生上の規則と、心理學上の法則とに依て、腦髓の健全を圖るに有り、即ち衛生上の規則より、云へば、身體の温度を適度ふし、睡眠を適度ふし、飲食、運動、職業の科程を適度にし、且つ食物も消化し易くして、最も滋養分と有する肉類を撰みて以て、腦髓の健全なる、事を求むべし、又心理學上の法則より云へば、意志の散亂攪動と制裁し、以て思想を毎に連合せしむるに有り、此の如くする時は、漸次に記憶力を養成し得べき事は、予の既に實驗して之を保証する處なりとす、予の記憶養成法を圖りて、之を左に示す可し、

記臆力…〔腦髓の健全…〕

衛生上の規則…

温度

睡眠

飲食

運動

職業の程度

意向の如何

心理學上の法則…

印象の淺深

思想の連合

空間連想
時間連想
類同連想
背反連想

感覺力…

物事の界外

今夫れ記臆力に關する圖を作りて示す時は、此の如しとす、若し人此圖を見て、仔細に之を工夫し、衛生上の規則と、心理學上の法則とに依て、腦髓を健全にする事と圖らば、能く記臆力を強ふするに至る可きは、散て疑を容れざるなりと、

佛教に於て談する、色空圓通の法門は、即ち記臆力の養成法で有る、色空圓通如何せは可なるかと云ふに、坐禪の修行明心の修法に如くは無い、坐禪といふ心思を一途に定

め、不思議底を思量する事ぢや、聞聲悟道見色明心の修法の、即ち三業に佛印を標し、三昧に端坐する時、遍法界とな、佛印と成り盡虚空悉く悟りと成るのが即ち坐禪の修行明心の修法で、色空圓通の法門と申すもので有る、按ずるに記臆力と申して、一度なり二度なり、嘗て見聞した事を覺え居て、何時にても、之を想ひ出すのは吾人靈妙なる法性の作用で有る、此作用を利用するには坐禪をして、無我法性れ觀え住し、真心を一途にして、眞如無相の理を發得するに有るのぢや、吾人此境に到きば、何の記臆力之を爲し得ざらん、又何の爲し得ざる記臆力之あらん、凡そ世の中に、因縁事相の作用に乗じて、萬有如幻の相貌、歴々々々舒するも、顯現するも、是れ唯だ自然の眞理で有る、シテ之を眼で觀し、耳で聞き、心で覺えて居るを記臆と云ひ、此記臆と無我法性の作用と申すので御座る、

●吾人の心性は鏡の如し、宇宙の森羅万象皆を照し來りて、其現象を示さざる者なり (ライプニツク氏)

○第二十三章

圓融回互 (其二) ○三量差排

○統計學と宗教學 佛蘭西のガルニエー氏の統計學と宗教學との關係を論じて、曰く、宗教學の、宗教自然の規律を研究する者にして、其學たるや人間と宗教との關係、万有と、宗教との關係、智力的宗教と、情感的宗教と、孰もか能く社會の勢力を得可きや、否や、等れ問題を研究する者とす、而して其目的を達せんには、或は既往の事實を調査し、以て其演繹法の總合、開列の正否如何を檢按し、或は確實なる事實を得て之が解剖を爲し、一般の天律即ち、永久普通なる事實の發顯を判定するが如き等の事に至りては、必らばや宗教學の統計學に據る所なくんばある可らずと、誠にガ氏の説の如く、統計學の宗教學の其關係の親密なるに依て、宗教を學ぶ者、又之を信する者、又之を傳道する者の、須らく統計學の心得丈なり共、知らんでは叶はぬ事也、

統計學の理法に該當す可き者を、佛教に求る時は、現、比、聖教三量の差排で有る、現量といふに古に案之今に視る處の一切の道理の山來を推究する事を云ひ、比量といふ、實驗し、得る事の出來ん物迄も、推理して之を識する事を云ひ、聖教量といふ、前の現比二量に於て確か先た事を、尙や一層、確かむる事を申すので有る、此三個の立量差排は、即ち統計學と同一の理法也、

佛敎と統計學との交渉する處、及統計學を研究する者の現、比、聖教三量、差排を兼知るの、肝要なるの勿論の事である、

●統計學は百般の事實を調査して以て之を吾人に示す者なり、故に宗教家の統計學を修むるは、社會の趨向を視て其布教の方針を探るに最も便利なり (オケツフル氏)

○第二十三章 圓互回互 (其三) ○求聞持法

○祈禱の利益 埃及のパテレンタ地方の人民は、常に「マラスコー」と云へる神を信仰し、何事も此神に向つて祈願すとは必らば其利益あるものと爲し居れり、茲に獨乙の文學博士チースケー氏は該地巡遊の時に之を視て、其祈禱の理趣は、歐米諸邦の人民が、耶穌教の神に祈願する有様と違ひ、哲學上の所謂「メートリック」^{メートリック}と其同じき處あるを以て、此祈禱の利益ある可き事を保証したりと云ふ、

此因縁を見ても、佛敎の祈禱に無量の利益ある事分るで有らず、何となれば、佛敎は哲學よりも一層優りた宗教で、其祈禱は眞理の、一切法界を究盡する者ぢやから、

「メートリデング」杯云へる、唯た彼此の觀念上より僅かの利益を發得する様な者と違つて、佛教祈禱の利益の、頗る廣大で有る、シテ又佛教の祈禱は、現世と後生との別が有るが、現世祈りの唯た現在の事のみに関し、後生祈りは、専ら後生の事のみに関す、而して、現世祈りを以て後生祈りを遮せず、後生祈りを以て現世祈りを妨げぬ處が、即ち佛教祈禱の不可思議なる妙用で有るぢや、

●人類は祈禱を爲す動物なり、祈禱は人類の性情に發して以て理想上の觀念に其現驗を期する者なり (クラック氏)

●第二十四章 般若修証 (其二) ○文字般若

○神符の利益 大平洋の群嶋中に、サマラと云ふ一嶋あり、此嶋に住む人は多く「サマラン」と云へる神を信ぜ、元來此神の耶蘇教「ゴット」と違ひ、人々の心性上に関する神なり、嶋中學者を以て尊敬せらるる、トルテアイトと呼ぶ人は、夙に此神を信ト居れるが近頃に至り、諸人の利益を計らんとて、嶋中一般に行はるる、アラビヤ文字を以て「サ

マラン」神の名を記したる符札を頻りに人々に施與するに、其神符は病を癒し災を除き、福を授くる等は利益不思議に之ありとの評高く、嶋民擧つてトルテアイト氏を活き神の、如く尊崇するが故に、該嶋に駐在する數多の耶蘇教の宣教師も、自家布教の妨害を受る事少なからせ、と大に困難の様子なりと云ふ、

此因縁を考ふるに、此開明の世の中に、神符が利益を人々に與ふる杯とい、馬鹿く敷き思ひを爲す者も有らざれども、決して、ソウ輕視した物ぢや無い、夫れ神符や祈禱の利益ある事、佛が嘗て之を諸經に説き置せられたに依て、能く之を知る事が出来る、抑も神符と云ひ、佛符と云ひ、唯夫れ符札に文字を記したる迄に過ぎざ、然るに其文字を記した迄に過ぎん符札が、吾人に利益を與ふるとは、何と各位不思議では無いか、併し能く考へて見ると、是れ當然の事であるのぢや、何となきば、文字般若の功德は、能く世、出世間の一切智を生し、事業を成し、解脱門を開くの能生根本であるからの事ぢや、守護國界經に「唵字を以て三世一切智の能生とし、般若佛母の文字を以て、實相智の本誓とす」とあるゆゑ、此佛の仰せに依て、按ずるに、唯だ文字を記し

た迄に過ぎん符札でも、佛や神の名が有れば、活き神佛も同じ事ぢや、果して然らば、此符札が吾人に利益を與ふる事、般若波羅蜜多の甚深微妙な道理に照して、之を疑ふ可き事で御座らん。

●社會に文字をかりせば、吾人は能く言語を使用するを得るも、亦尙ほ聲の如く啞の如き事を免かれず (トル氏)

○第二十四章 般若修正 (其二) ○書曼陀羅

○美術の快樂 佛國の巴里にデホチックと云へる審美學士あり、此學士常に人々語りて言ひけるに、凡そ美術の吾人に快樂と與ふる要旨、其美妙なる處あるに因る、其美妙といふ如何なる者かと云ひ、則ち繪畫、彫刻等に神韻清絶なる處ありて、能く吾人の感情を攪動す可き妙相を具する事是れなり、總トで美術の吾人に快樂を與ふる要旨、唯其れ美妙なる處あるに由るなり、吾人は此の如く美妙な、感情を攪動せらる可き者なりとすれば、若し此理を推して、神に對するに、其神も又美術の美妙が、吾人の感情を攪動

する力あるが如く、神の正さしく存在して、其力の廣大なる事をも知るに足る可きの理なり、人爲に係る繪畫、彫刻等にして、既に神韻清絶なる美妙あり、況んや絶對的の靈妙なる神にして不思議の徳相を具する者をや、吾人の美術に對する觀念を以て、其神の存在及、力の廣大なる事と知るに何ぞ、其れ難からんやと、

此デ氏の話に就て、仔細に之を咀嚼すれば、我れ等多少の異論なきにはあらね共、大体に付て、先づ以て之を是とする者で有る、抑も繪畫、彫刻等が、人々の愛翫を受け賞觀せらるゝ處となる譯は何故かと言ふと、實にデ氏の説の如く、美妙なる處あるからぢやが、畢竟するに、人々が其繪畫、彫刻等を觀て感ずるの、其物に意匠と云ふ者が具りて居るからで有る、其意匠と云ふ者を佛法で申すと、即ち般若の當躰ぢやから、縦ひ小切れに描きた繪畫でも、又播木棒に、彫つた彫刻でも、人々の意匠を凝めて、描きたり、彫つたりした物ならば、則ち繪畫、彫刻、其物に意匠を具ふるは自然の道理ぢや、左れば此意匠を具へた繪畫、彫刻等を觀て、人々の感ずるのも亦是れ自然の道理で有る、一山一水も、法曼陀羅にして、一氣一韻も、般若の當躰で無い者は御座りませ

ん、此道理から能く推して考へたら、佛の仰せられた、眞如實相は、即ち法界一切の諸物に具りて不可思議の妙用を、現成致し居る事が相分りませう、

●吾人の理想は、希臘人の彫刻したるジュニタルの如き、アポロの如き、美妙を愛す、宗教の美妙は之に優れり、故に吾人は宗教信仰の快樂を欲す (アロナー氏)

○第二十五章 雜 (其一) ○四大不調

○コレラ病源の研究 曩よ獨乙の醫博士コホ氏が、萬死の危難を冒して、虎列刺病の原因と研究し、其「バチルレン」の作用なる事を發明せしより、病理學は爲に著るしき進歩を爲したれども、療治方に至りては、未だ充分の改良を見せ、吾々は筋りに遺憾を懷き居たるに、先頃の事なりとか、西班牙國バレンシアに於て有名の人々を集めて、虎列刺病の講義を爲し、顯微鏡を以て眞症虎列刺の種と、不傳染虎列刺の種とを區別し、終りて、十八人の醫士及び其他の人々に、右「バチルレン」を種へたるに、接種者は爾后孰をも「コレラ」病と同一の徴候を、顯し、同様なる病勢の經過を爲したりと云ふ、一度「コ

レラ」を種ゆる時は、三ヶ月間同病に罹ることおけれども、久しく其傳染を免れんと欲すれば、一週間以内之を再種せざるべからざるよし、若し此報の如く虎列刺病も亦痘瘡と同トく、人力を以て免かるゝことを得るに至らば、實に世界兆民の大幸と謂ふべきなりと、

夫れ病と申す者の、吾人四大の不調合より發起するのちやが、元來佛法で、三種の病と説き、一に業病、二に鬼病、三に四大不調病と談ト、シテ之を治するの法も又二種ある、即ち世間の醫方明と、出世の總時呪明是れで有る、俗其「コレラ」病の何種の病に屬し、何種の治法を以て之を療す可きかと云ふに、元來此病は、四大不調和ある處から發起する者ぢやに依て、醫術藥劑の効力が最も著しきに違ひ無い、併し乍ら、我出世總持の呪明の法は、法爾常住の妙体也、其功德の廣大なる事ハ之と譬ふるに物なき位ぢや、左れバ「コレラ」病流行の時ハ、平素に優りて捨別我心を清淨に持ち、身の行ひを潔白に致し、佛を信玄神を敬し、現當二世の福利安穩を祈請するが何より肝要なれども、若し不幸にして此病に罹りたら、據無ければ、速に醫術藥劑の力に仰ぐ

事を怠りては相成らん、諺にさへ命ありての物種と申せば、慧身相續の事に氣を附るが専一で御座る、

●吾人の疾病は心性の不潔なるより起り、心性の不潔なるは、理想の野卑なるより起る。(ハックスレイ氏)

○第二十五章 雜(其二) ○成住壞空

○地震の理 地文學上の説に據れば、地震の岩液の蒸沸に因て起る者とす、然れとも仔細に之を吟味する時の、地震の起るに二種の差別あり、第一種の地殻の昇降に依て地層構造に、變化を與ふる爲めに起る事と、第二種の噴火山の破裂に因る振動より起る事とは是れなり、地文學上の理論より言ふ時は、猛烈なる噴火山の在る近傍には、地震甚ぶ少なし其然る所以は、噴火山より地中に滲蓄する熱氣を常に發散するが故なりと、

佛教の眞如法性の空理と談する者ぢやに依て、地球や方角などの事の、彼れ是れと云ふものぢや無い、地球や方角などを彼れ是れと云ふもの、事相の上の所談で有る、左れば佛教に於ては、世界相の所談の如何と問ふに、佛教の元來極微所成を旨とするが

成 住 壞 空

故に、地震の如きも亦た成住壞空の道理に洩れぬ者ととるが、佛教の所談で有る、凡そ物の成するや必らず住するものと無くては成らん、既に成ト既に住する限りは、又壞する事無くては成らん、既に壞すとせば空する事のあるは是れ自然の道理ぢや、シテ又其物の住するや、必らず動く可きの當然で有る、其動くや勢ひ必らず熱を生するの物の性と云ふ、其性は又必らず相引く力が有る、此れ等の作用より地震となり、雷となり、風となり、雨となり、輪廻居轉して成住壞空の變相と現成するので有る、ソレにしても、今度の大地震の、其劇震實に前代未聞ぢや、我れ等の親愛する同胞の、露臥草宿の慘況に沈んで居る、苟くも惻隱仁慈の志ある者にして、此慘苦を見聞するに於ては、誰か其心を痛めざる可きぞ、

●此社會に、愛の網なく、慈悲の露おられず、恰も燈火の消へたる暗夜の如く、暴風の絶へざる荒野の如く(セイロル氏)

○第二十五章 雜(其三) ○業感緣起

○洪水と山林との關係 洪水の起るは、霖雨強雨に依る事は勿論なりと雖も、山林の疎密、山岳の禿否の雨量の多寡と、水流の増減に關する事誠に大なり、然り而して雨量の多寡、水流の増減は、洪水の起る原因となる者とす、抑も水は、水素一と酸素との割合に依て成る者にて、而して酸素、水素の空氣の濃薄輕重に由り、空氣の濃薄輕重は山林の疎密、山岳の禿否に關せずんばならず、故に洪水の山林の疎密、山岳の禿否に原因する者なる事を知る可し、若し此理を了知せば相成る可く、山林を養成し樹木を伐採せざる事に注意す可きは山林學上の理論なりとす、

楞嚴經と申す御經の中に「火勢劣火結爲高山是故山石擊則成焰融則成水」と、總トて佛敎お於て世界相に關する説は、理性の作用と業相の作用との二種に談す、理性の作用とい、即ち洪水の起るや理論上より其起らんで成らん譯を談する事を云ひ、業相の作用とは即ち洪水の起るは唯だ、人々の業力と申して、猥りに林木を伐採し山岳を荒禿するが如き處を此原因で、流水圯濫するに至ると説く、二様の所談が有るのぢやが、要するに洪水の人々之を天變地妖の大なる者として、忌憚するも亦た無理で、無

い、嗚呼洪水如何なきや、斯く殘酷なる者ぞ、堤崩れ、水溢る、ソレのみならず、人を殺す財を害ふ、天何ぞ慈悲の情を知らざるや、禍を降一人を痛ましむる、何ぞ其れ慘憺たる、嗚呼天變地妖如何なれば斯く暴虐なる、幾千萬人の、罹災人民の老を抱き、幼を懷にし、餓飢の街に迷はしむとい、偕く見るも涙、聞くも憐れの極とや申さんか、此慘憺たる悲しむ可き境に陥れる罹災人民の、皆な我れ等の血を分け胞を同ふする兄弟ぢや、ドウして見捨てて置れうぞ、左れば各位も此際に慈善の心を勵まして、多少を問ひて應分の金錢衣類食物を義捐せらるゝが宜しう御座る、

●山林は水源を營養し、空氣の濃薄輕重を調和し、吾人の生活を輔くる者なり故に林木を濫伐する、時は洪水の起るを免かれず (ヘラクラール氏)

明治二十三年五月七日印刷
明治二十三年五月七日出版

定價金廿五錢



版權登錄

版權
所有

15

發行者

愛知縣名古屋市門前町十七番戶
三浦兼助

著述者

全縣全市門前町百五十五番戶
小澤吉行

印刷者

全縣全市傳馬町六十番戶
長繩榮

大賣捌

東京麻布區飯倉五丁目
森江佐七

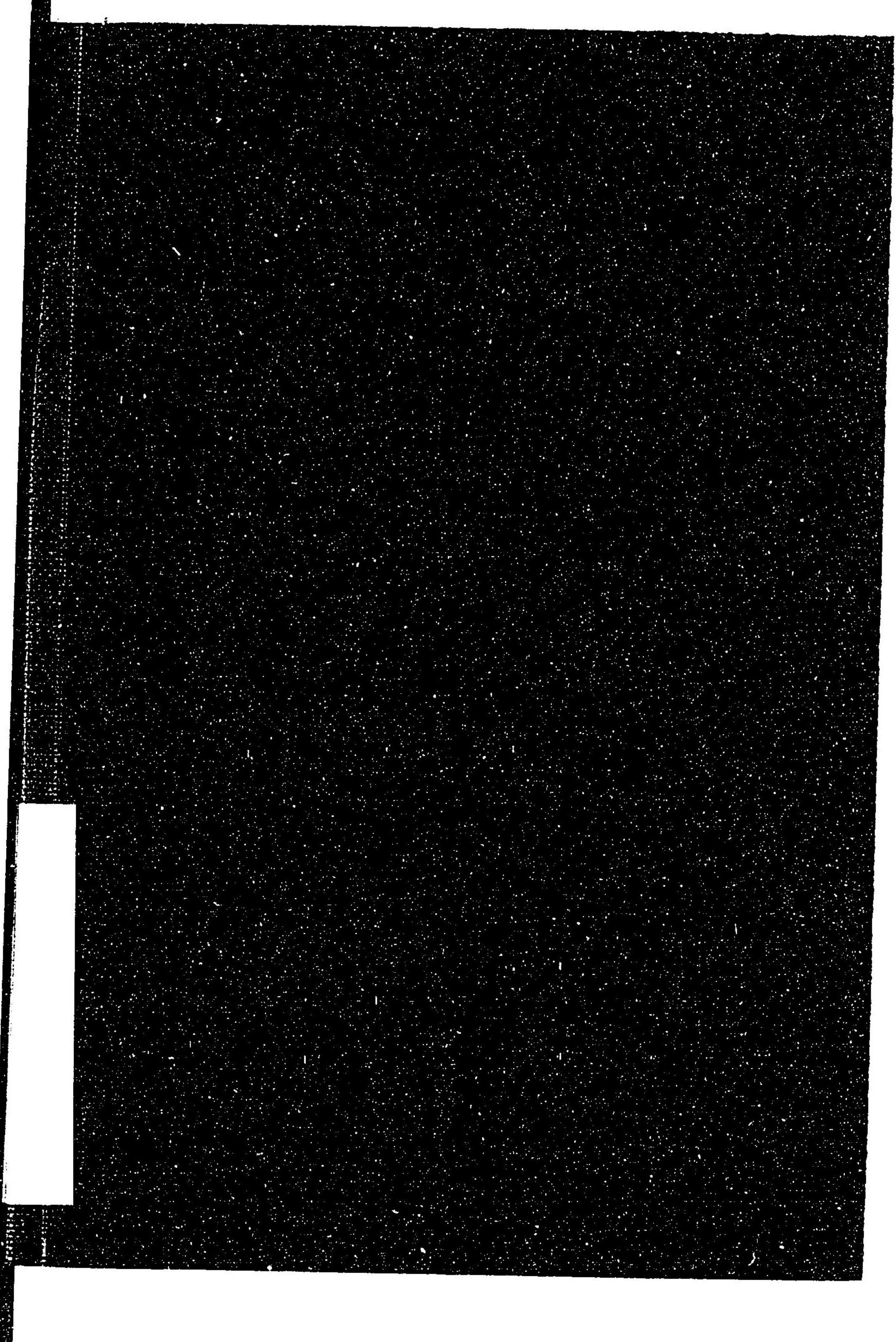
同

西京三條高倉東へ入
出雲寺文二郎

同

東京々橋區三十間堀
明教社





特 18

250

説教の栞

国立国会図書館

015893-000-8

特18-250

説教の栞（西洋因縁）

小沢 吉行／著

M23.5

ABC-1679

